

博士論文（要約）

論文題目

「日本語と朝鮮語の談話における形式と機能の関係
—中途終了発話文の出現を中心に—」

氏名 高木 丈也

目次

第1章 序論	1
1.1. 研究動機と問題の所在	1
1.2. 分析対象、方法論に関する前提	2
1.2.1. 「談話」と「文章」	2
1.2.2. 「談話分析」と「会話分析」	5
1.2.3. 日朝対照による談話分析	10
1.3. 本稿の構成	11
第2章 調査・文字化の方法	15
2.1. 談話採録調査と文字化	15
2.1.1. 調査の枠組み	15
2.1.2. 文字化の概要	17
2.2. 質問紙調査	19
2.3. まとめ	20
第3章 理論的枠組みと出現様相	21
3.1. 「発話形式」に関して	21
3.1.1. 品詞分類と用言の活用形、「発話形式」	21
3.1.1.1. 品詞分類	21
3.1.1.2. 用言の活用形	24
3.1.1.3. 「発話形式」	27
3.1.2. 「中途終了発話文」に関する先行研究	28
3.1.3. 本稿における「中途終了発話文」の定義と出現様相	35
3.1.3.1. 「中途終了発話文」の定義	35
3.1.3.2. 類似概念との関係	36
3.1.3.2.1. 「言いさし文」との関係	36
3.1.3.2.2. 「終助詞終了発話文／丁寧化のマーカ―終了発話文」との関係	38
3.1.3.2.3. 「非述語文」との関係	39
3.1.3.3. 「発話形式」による発話文の出現様相	40
3.1.3.3.1. 「発話形式」とその出現様相	40
3.1.3.3.1.1. 親疎関係による考察	41
3.1.3.3.1.2. 性別による考察	42

3.1.3.3.1.3. 年代による考察	43
3.1.3.3.1.4. 年齢の上下差による考察	44
3.1.3.3.2. 「中途終了発話文」の下位分類とその出現様相	45
3.1.3.3.2.1. 親疎関係による考察	48
3.1.3.3.2.2. 性別による考察	49
3.1.3.3.2.3. 年代による考察	50
3.1.3.3.2.4. 年齢の上下差による考察	52
3.2. 「発話機能」に関して	53
3.2.1. 「発話機能」に関する先行研究	53
3.2.2. 本稿における「発話機能」の分類と出現様相	56
3.2.2.1. 「発話機能」の分類	56
3.2.2.2. 「発話機能」による発話文の出現様相	58
3.3. まとめ	60

第4章 「形式」と「機能」の関係 63 ー「情報要求」発話を中心にー

4.1. 「情報要求」に関する先行研究と分類	63
4.1.1. 「情報要求」に関する先行研究	63
4.1.2. 本稿における「情報要求」の分類	66
4.2. 「情報要求」を表す発話文の出現様相	67
4.2.1. 親疎関係による考察	69
4.2.2. 性別による考察	73
4.2.3. 年代による考察	75
4.2.4. 年齢の上下差による考察	78
4.2.5. 両言語の出現の差を形成する要因	80
4.3. まとめ	82

第5章 談話構成と発話文生成メカニズム 83 ー先行発話と「質問」を表す「中途終了発話文」出現の関係を中心にー

5.1. 「質問文」生成に関する先行研究	84
5.2. 「中途終了発話文」が「質問文」として機能する要因	86
5.2.1. 「明示的な質問表示」	86
5.2.2. 「非明示的な質問表示」	89
5.3. まとめ	96

第6章 発話連鎖と談話構成	99
—「質問」と「応答」の連鎖を中心に—	
6.1. 「質問」→「応答」の「発話連鎖」とは	99
6.1.1. 「質問」→「応答」の「発話連鎖」に関する先行研究	99
6.1.2. 分析範囲と方法	102
6.2. 第2部分における「応答」	106
6.2.1. 第2部分における「応答」発話の出現様相	106
6.2.2. 「発話形式」による出現様相	107
6.2.2.1. 「情報提供」を表す発話である場合	107
6.2.2.2. 「情報提供以外」を表す発話である場合	110
6.2.3. 「発話機能」による出現様相	111
6.2.3.1. 「情報提供」を表す発話である場合	113
6.2.3.2. 「情報提供以外」を表す発話である場合	114
6.2.4. 第2部分の発話文生成に関わる機能	120
6.3. まとめ	122
 第7章 発話連鎖と「くり返し発話」	 125
7.1. 「くり返し発話」とは	125
7.1.1. 「くり返し発話」に関する先行研究	125
7.1.2. 本稿における「くり返し発話」の定義	127
7.2. 「くり返し発話」の「形式」と「談話展開機能」	129
7.2.1. 「くり返し発話」の「形式」	129
7.2.2. 「くり返し発話」の「談話展開機能」	134
7.3. まとめ	136
 第8章 「発話文」に対する意識と談話における使用様相	 137
8.1. 分析項目と方法	137
8.2. 「質問」表現と発話文生成に対する意識	138
8.2.1. 「質問」表現に対する意識	138
8.2.2. 発話文生成に対する意識	143
8.2.2.1. 日本語と朝鮮語で差異をみせる項目	145
8.2.2.2. 日本語と朝鮮語で差異をみせない項目	147
8.3. まとめ	151

第9章 結論	153
9.1. 本稿における議論	153
9.1.1. 各章における議論	153
9.1.2. 本稿全体における結論	157
9.2. 本稿における研究の意義・課題	161
9.2.1. 本稿における研究の意義	161
9.2.2. 本稿における研究の課題	162
 参考文献一覧	 165
日本語で書かれたもの	165
朝鮮語で書かれたもの	171
英語で書かれたもの	172
付録	175
[付録1] フォローアップアンケート 日本語版	175
[付録2] フォローアップアンケート 朝鮮語版	178
[付録3] フェイスシート 日本語、朝鮮語共通	181
[付録4] 先行研究における「発話機能」の分類	182
[付録5] 質問紙調査票 日本語版	186
[付録6] 質問紙調査票 朝鮮語版	189
謝辞	192

表一覧

第1章 序論

【表 1-1】西尾編(1955)における「文字ことば」と「話しことば」の違い	3
【表 1-2】言語の存在様式と分析単位の関係	5

第2章 調査・文字化の方法

【表 2-1】「談話名」、「談話参与者名」と参与者の属性	16
【表 2-2】本稿の文字化で使用する主な記号(宇佐美(2007)による)	18
【表 2-3】日本語談話と朝鮮語談話における総発話文数	19
【表 2-4】質問紙調査における被験者の情報	20

第3章 理論的枠組みと出現様相

【表 3-1】本稿における「品詞」の分類	24
【表 3-2】日本語と朝鮮語の用言の「活用形」	27
【表 3-3】主要先行研究における「中途終了発話文」に相当する発話形式に関する記述	29
【表 3-4】発話形式ごとの発話文の出現数と生起比率	40
【表 3-5】親疎関係による発話形式ごとの発話文の出現数と生起比率	41
【表 3-6】性別による発話形式ごとの発話文の出現数と生起比率	42
【表 3-7】年代による発話形式ごとの発話文の出現数と生起比率	43
【表 3-8】年齢の上下差による発話形式ごとの発話文の出現数と生起比率	44
【表 3-9】「中途終了発話文」の形態論的下位分類ごとの出現数と生起比率	47
【表 3-10】親疎関係による「中途終了発話文」の形態論的下位分類ごとの出現数と生起比率	48
【表 3-11】性別による「中途終了発話文」の形態論的下位分類ごとの出現数と生起比率	50
【表 3-12】年代による「中途終了発話文」の形態論的下位分類ごとの出現数と生起比率	51
【表 3-13】年齢の上下差による「中途終了発話文」の形態論的下位分類ごとの出現数と生起比率	52
【表 3-14】「発話形式」による「発話機能」ごとの出現数と生起比率	59

第4章 「形式」と「機能」の関係 ―「情報要求」発話を中心に―

【表 4-1】発話形式による「情報要求」発話の出現数と生起比率	68
【表 4-2】「情報要求」発話の談話機能別出現数と生起比率	69
【表 4-3】親疎関係による「情報要求」発話の出現数と生起比率	70
【表 4-4】親疎関係による「情報要求」発話の談話機能別出現数と生起比率	70
【表 4-5】性別による「情報要求」発話の出現数と生起比率	73
【表 4-6】性別による「情報要求」発話の談話機能別出現数と生起比率	74
【表 4-7】年代による「情報要求」発話の出現数と生起比率	76

【表 4-8】年代による「情報要求」発話の談話機能別出現数と生起比率	76
【表 4-9】年齢の上下差による「情報要求」発話の出現数と生起比率	78
【表 4-10】年齢の上下差による「情報要求」発話の談話機能別出現数と生起比率	78
【表 4-11】談話要因ごとの p 値と v 値	81

第5章 談話構成と発話文生成メカニズム

ー先行発話と「質問」を表す「中途終了発話文」出現の関係を中心にー

【表 5-1】主要先行研究における「質問文」の生成条件に関する記述	85
【表 5-2】「質問」を表す「中途終了発話文」における質問表示<1>(明示的な質問表示)	87
【表 5-3】「質問」を表す「中途終了発話文」における質問表示<2>(非明示的な質問表示)	89
【表 5-4】談話全体における「間投詞」、「非境界」で終わる「中途終了発話文」の出現数	91
【表 5-5】「質問」を表す「中途終了発話文」開始部における「間投詞」(フィラー)の出現数	92
【表 5-6】「質問」を表す「中途終了発話文」内部における「接続詞」の出現数	93
【表 5-7】「質問」を表す「中途終了発話文」生成における「質問表示」<3>	96
【表 5-8】「質問」を表す「中途終了発話文」の生成と質問表示	97

第6章 発話連鎖と談話構成 ー「質問」と「応答」の連鎖を中心にー

【表 6-1】主要先行研究における「発話連鎖」	100
【表 6-2】「質問」に対する「応答」発話の出現数と生起比率	106
【表 6-3】「質問」に対する「応答」発話の出現数と生起比率	107
ー第2部分の「発話形式」による分類ー	
【表 6-4】「質問」に対する「応答」(情報提供)の出現数と生起比率	108
ー「発話形式」による分類ー	
【表 6-5】「質問」に対する「応答」(情報提供以外)の出現数と生起比率	110
ー「発話形式」による分類ー	
【表 6-6】「質問」に対する「応答」発話の出現数と生起比率	111
ー第2部分の「発話機能」による分類ー	
【表 6-7】「質問」に対する「応答」発話の出現数と生起比率	112
ー第1部分の「談話機能」と第2部分の「発話機能」による分類ー	
【表 6-8】「質問」に対する「応答」(情報提供)の出現数と生起比率	113
ー「発話機能」による分類ー	
【表 6-9】「質問」に対する「応答」(情報提供以外)の出現数と生起比率	114
ー「発話機能」による分類ー	
【表 6-10】「質問」→「応答」(情報要求)連鎖の出現数と生起比率	116
ー第1部分の「談話機能」による分類ー	
【表 6-11】第2部分の「応答」発話が持つストラテジーとしての「談話展開機能」	121

第7章 発話連鎖と「くり返し発話」の機能

【表 7-1】主要先行研究における「くり返し発話」の認定範囲と機能	126
【表 7-2】「くり返し発話」の再現レベル ―全体か、一部か―	130
【表 7-3】「くり返し発話」の再現レベル ―いかなる文法レベルか―	130
【表 7-4】日本語と朝鮮語の「中途終了発話文」に占める「くり返し発話」の出現数と生起比率 ...	132
【表 7-5】「くり返し発話」のストラテジー項目別出現数と生起比率	134
【表 7-6】「説明・確認要求」の「くり返し発話」のイントネーション	135

第8章 「発話文」に対する意識と談話における使用様相

【表 8-1】質問紙調査において印象を問うた「質問」表現	138
【表 8-2】質問紙調査において印象を問うた項目と選択肢	138
【表 8-3】母語話者による4つの「質問」表現に対する印象	140
【表 8-4】質問紙調査において印象を問うた会話	144
【表 8-5】母語話者による発話文生成に対する印象	144

第9章 結論

第1章 序論

1.1. 研究動機と問題の所在

日本語と朝鮮語¹は、類似した文法体系を持つと言われることがよくある。たしかに、言語類型論 (linguistic typology) 的な観点からみたときに、両言語は、形態・統語論レベルにおいて、並行した体系を持つ点が少なくない。しかし、これを個別のセンテンスレベルで考えたとき、類似していると言われるのは、多くの人が正しいと認識する規範的なモデル、あるいは、任意の言語表現を他方の言語に適応させるという、一方向的なモデルにおける対比をさすことがほとんどのようである。すなわち、それぞれの言語を母語とする人々が、日常生活において普遍的に産出している言語を取り出し、それらの姿をありのままに観察し、両言語の言語使用を対照しようとする試みは、そう多くは行なわれていないのである。言語というものが、日常の営みに根付き、ある種の相互作用 (interaction) を目的として、産出されるものであるということを考えたとき、我々の言語研究もまた、蓄積された理論をふまえつつ、言語事実の記述という段階へと進んでいかなくてはならないと考える。

この小稿は、そうした言語研究の方向性を示すための1つの試みとして、日本語と朝鮮語の談話 (discourse) における、実現形態としての発話文を対照し、分析しようとするものである。本稿では、発話文の形式の中でもとりわけ、(文末まで言い切らない) 不完全な文とされる「中途終了発話文」の出現に注目し、談話に特徴的な発話文が、両言語において、いかなる出現の差異をみせるかをより多角的な視点から分析していきたいと思う。

筆者が本稿において、日本語と朝鮮語の談話に現れる「中途終了発話文」について分析を行なおうと思った動機は、以下の2点に集約することができる。

1 点目は、日本語と朝鮮語という文法体系が類似するといわれる言語を「談話」という実現形態のレベルにおいて対照すること自体に、言語学的な意味があると考えたためである。2つの言語を対照するという方法を採用することによって、個別言語の分析では、浮き彫りにすることができない、各言語の特徴の記述が可能になることはもちろん、その分析対象を談話という規範的な言語体系に束縛されない言語様式に定めることにより、言語表層だけではなく、相互作用における発話者の意図や、談話文脈が言語使用に与える影響までが、分析可能になるものと期待される。

2 点目は、談話分析の方法論に新たな視点を取り入れたいと考えたためである。近年の言語学研究においては、談話分析を行なう論考が急速に増えてきており、その中には、本稿で分析する「中途終了発話文」などの発話形式に着目するものも散見されるようになってきた²。しかし、それらの研究をみると、

¹ 本稿で日本語と対照研究を行なうこの言語には、「朝鮮語」のほか、「韓国語」、「韓国・朝鮮語」など様々な名称が存在するが、本稿では、「朝鮮半島において使用されている言語の総体」という意味で、日本の言語学研究において通常使用されている「朝鮮語」という名称を用いることにする。なお、第2章でも述べるが、本稿で具体的な分析対象とするのは、朝鮮語の中でもソウル方言における談話である。

² 日本語と朝鮮語の「中途終了発話文」に関する先行研究は、後に 3.1.2. で概観することにする。なお、日本語と朝鮮語以外の言語の談話における「中途終了発話文」(相当の発話形式) を扱った研究としては、Evans (2009) がある。同論文では、英語、ドイツ語、イタリア語、カヤルディルド語(オーストラリア、ベンティンク島で使用される言語) における「insubordination」(脱従属節化) の分析を行なっている。

センテンス以上の単位を想定していることは、革新的にみえる一方で、実際の分析における発話文の究極のモデルは、「完全文」におかれているという内部矛盾を抱えるものも少なくない。例えば、中途終了発話文について記述する際も、それを完全文の「省略」とみた場合は、この発話形式には、完全文に対する二義的価値しか与えられないことになり、当該形式の持つ本質的特徴を記述することはできなくなる。そこで、本稿では、このような矛盾を克服するために、談話に現れる発話文の存在様式を、「談話の文法」として、ありのままに記述することにより、両言語の発話文が持つ特徴と、類似点、相違点について解明しようと思う。

このように、本稿では、談話分析を、実現形態としての発話文の記述という言語事実に即した方法により行なっていく。つまり、本稿の「中途終了発話文」の分析における関心は、何が省略されたか(非出現部分の同定)といったことではなく、なぜその発話形式が選択され、発話されたのか、そこにはどのような発話意図が存在しているのか、その発話がどのような周辺発話の中で出現し、相互作用においてどのような役割を担っているか、といったことに置かれることになる。こうした一連の分析を通じて、両言語の談話における文法記述はもちろん、規範的な文法と、談話における文法が、いかなる相違をみせるのかについても記述が可能になるものと思われる。

1.2. 分析対象、方法論に関する前提

1.1.では、本稿における研究動機と問題の所在について述べたが、本格的な議論に入る前に、本節では、まず事前に共有しておかなければならない、いくつかの前提事項について述べることにする。具体的には、分析対象となる「談話」と「文章」の区別、「談話分析」の方法論といった問題に対し、本稿がとる立場を明確に示す。また、こうした問題とともに、日本語と朝鮮語を対照した談話分析の学史的展開についても概観し、一連の研究の流れにおける本稿の位置づけと意義を明らかにしようと思う。

1.2.1.「談話」と「文章」

本項では、本稿における研究の分析対象に関する問題、すなわち「談話」、「文章」の範囲とその構成要素の同定について考えることにする。

本稿が扱う「談話」の具体的範囲について考えるために、まずは『言語学大辞典』(1996 年)における記述からみてみることにしよう。同辞典では、「談話」について、以下のように定義している：

「談話」

いくつかの文が連続し、まとまりのある内容をもった言語表現を談話という。話されたもの、書かれたものの両方を含む。たとえば、日常会話、スピーチ、ニュース、手紙、小説、広告文など。(中略)

談話は、テキスト(text、テキストとも)と同義で使われることもある。(中略)一方、談話とテキストを別概念とすることもある。(中略)また、テキストは談話を構成する要素であるとみる人もいる。

国語学では、談話に当たる概念として「文章」という用語が用いられている。書かれたものをさすことが多いが、話されたものを含むこともある。

この記述をみると、「談話」、「文章」という概念は、研究者によって扱われ方が様々であること、その差異は、単に名称という枠を越えて、それらが包含する範囲にまで及ぶものであることがわかる³。しかし、考えてみたい。言語研究において、分析対象の同定は、分析そのものの信頼性に大きな影響を与えるものである。分析対象について十分な考慮がなされずに研究が行なわれた場合、当該研究における信頼性は、著しく低下することになるだろう。同じく「まとまりのある内容をもった言語表現」が扱われる場合であっても、何を「談話」とし、何を「文章」とするかについて、明確な前提を設定しておく必要があるのである。

「談話」と「文章」に関する差異を同定するにあたって重要な観点とは、それがいかに実現されたか、ということである。つまり、「文字」や「音声」といった実現体としての言語の存在様式であるが、そうした違いは、同一の言語であっても、異なる言語的特徴を生成する要因となるものである。この「文字」と「音声」の差異については、古くは、西尾編(1955)で、すでに指摘がされており、その後も名柄、茅野(1988)、ザトラウスキー(2005)、金珍娥(2006)など、様々な論考において、しばしば取り上げられてきた。例えば、西尾編(1955)では、日本語を例としてあげながら、文字言語により実現された「文字ことば」と、音声言語により実現された「話しことば」の違いについて、以下のように述べている：

【表 1-1】西尾編(1955)における「文字ことば」と「話しことば」の違い

文字ことば	話しことば
一、文が比較的長い	文が比較的短い
二、文の順序が正常である	文の順序が正常でない場合がある
三、同じ文や言葉を何回もくりかえすことが少ない	同じ文や言葉をくりかえすことがある
四、言いさしで文を終ることが少ない	言いさしで文を終ることがある
五、文の成分は省略されることが比較的少ない	文の成分の一部を省略することがある
六、「ぼくも行ききみも行く」という使い方をすること	その場合は「ぼくも行くしきみも行く」という使い方をすること
七、「あれ」「これ」「そこ」というようなさし示す言葉が比較的少ない	さし示す言葉が比較的多い
八、敬語は比較的少なく使われる	敬語はいつもついてまわる
九、「行くよ」「行くわ」の「よ」「わ」などの言葉はあまり用いない	「よ」「わ」などの言葉をよく使う
一〇、「これね」「それからさ」の「ね」「さ」などの言葉をあまり用いない	「ね」「さ」などの言葉をよく使う
一一、漢語を比較的好く用いる	漢語は比較的少ない
一二、古い言葉、漢文的な言葉、翻訳口調の言葉がまざることがある	そのような言葉はあまりまざらない
一三、「である」で文を結ぶことが多い	文の終りは「だ」「です」「でございます」講演のときは「であります」を使うことが多い

(p.137、138 の記述をもとにして表に整理 (表記は上掲書による))

³ なお、名称の使用に関して、池上(1985)には、「従来、どちらかと言うと「テキスト」はヨーロッパ系の学者によって、一方「談話」はアメリカ系の学者によって好まれるという傾向があった」(p.61)との記述がある。

表をみると、「文字ことば」(文字)と「話しことば」(音声)という違いは、単に実現方法(媒体)の違いというレベルを超えて、形態論(morphology)や統語論(syntax)、文脈からの文生成といったレベルにおいて、言語の存在様式に大きな影響を与えるものであることがわかる⁴。また、こうした諸レベルにおける差異の存在は、言語研究において分析対象や分析単位(方法)が同定される際には、その実現方法が、極めて重要な要素となることを示すものでもある。

しかし、こうした分析対象としての言語の実現方法に関する基本的前提に立って、既存の諸研究をみると、「話しことば」研究の枠組みにおいて、「文字」で書かれたスクリプト(台詞)や、研究者による作例を分析するなど、そもそも分析対象とする言語の存在様式に関して、十分な考慮がなされていない論考が存在することに気がつく。そのような方法論が採用された場合、言語事実に立脚した、正確な記述が行なえなくなることは容易に予想できるだろう。

すなわち、実現方法による分析対象の同定を厳密に行なう必要があることが示唆されるが、本稿では、上記のような差異をふまえ、『「文字」により実現された言語表現のまとまり』を「文章」、『「音声」により実現された言語表現のまとまり』を「談話」と定めることにより、両者を明確に区別することにする⁵。なお、この中でも本稿における分析の対象となるのは、後者、すなわち「談話」であるが、本稿では、今述べたとおり、あくまでまず音声の先に存在し、実現された言語のみを「談話」と定め、分析を行なっていく。つまり、例えば、映画のスクリプトや、研究者による作例といった文字が先に存在する「書かれた話しことば」(疑似会話体)については、純粋な音声言語ではないとの理由から、分析対象には含めないことにする。

ところで、上では「談話」について、『「音声」により実現された言語表現のまとまり』という表現を用いたが、ここでいう「言語表現」とは、より具体的には、談話における構成要素となる基本的単位のことである。こうした要素、単位のことを本稿では、「発話文」とよぶことにする。これは、文章における構成要素が「文」であることと対称をなすものであるが、「発話文」は、談話におけるターン(turn)⁶を構成する単位であり、必ずしも文章にみられる「文」の概念と一致するものではない。すなわち、いわゆる不完全な文であったり、書きことばの文法規則とは異なる実現形態をとったりするものである。以上のことをまとめると、以下のようになる：

【本稿における「文章」と「談話」の定義】

⁴ この他にも、ザトラウスキー(2005)では、「談話」(話しことば)について、「文章とは異なり、話し手と受け手すべての参加者が一緒に作り上げる表現行動」(p.468)であるとしており、「言語(行動)」のほか「非言語行動」(顔の表情、声のピッチ、イントネーション、手ぶりなど)が現れることを特徴とすると述べている。

⁵ なお、『言語学大辞典』(1996年)では、「テキスト」(text)については、「ある作品、それも書かれた作品の本体をなす言語表現」であり、「本来、文献学(philology)の対象である」(ともに p.959、下線は、筆者による)としている。本稿では、このような言語の実現方法に関わる記述をふまえ、「テキスト」(テキスト)については、『「文字」により実現された言語表現』である「文章」と同様の概念を持つものとして扱うことにする(ただし、名称上は、「文章」に代表させておき、「談話」と「文章」という枠組みの中で比較を行なっていく)。

⁶ 本稿では、「ターン」を「発言権を持った話者が、話し始めて終わるまでのひとまとまり」という意味で用いる。文法的な区切りによる判定が可能な場合もあるが、イントネーションや、発話と発話の「間」によって認定されることもある。また、後述するように「あいづち」や「フィラー」もターンの構成要素となる。

「文章」…「文字」により実現された言語表現(文)のまとまり。

「談話」…「音声」により実現された言語表現(発話文)のまとまり。

さて、言語の分析に際して、いわゆる「センテンス」を最大の単位とせずに、より大きな枠組みの中でそれを捉えることは、実際の言語使用における構成要素の特性を記述する上で有効な方法であると考ええるが、その構成要素の分析にあたっては、どのような分析単位を導入するのが妥当であるかをよく考えておく必要がある。先にも述べたとおり、例えば、談話を分析する際に、もし、文章にみられる「文法的に完全な文」を究極のモデルとするならば、いわゆる「不完全な文」が出現した場合、それは「省略」として扱われることになるだろう。しかし、書かれた言葉における文法をそのまま適応したのでは、文章とは異なる文法を持つ「談話」における文法の本質は、記述することができない。そこで、本稿では、このような問題が生じることを避けるために、談話を分析するにあたっては、その構成要素であるターンとしての「発話文」を分析単位とすることにより、言語事実により即した記述を行なっていくことにする。そして、本稿では、分析単位である「発話文」の分析、記述によって、帰納的に構築された文法を「談話文法」(discourse grammar)として位置づけ、これを「文」により構成された文章を前提とする「文文法」(sentence grammar)とは分けて考えることにする⁷。このことを改めて整理すると、以下の【表 1-2】のようになる：

【表 1-2】言語の存在様式と分析単位の関係

存在様式	実現方法	構成要素／分析単位	記述された文法
談話	音声	発話文	談話文法
文章	文字	文	文文法

本稿で分析対象とする「談話」における「音声により実現された言語表現」、すなわち「発話文」は、基本的には、即時的なやりとりをその存在の前提としているため、必ずしも規範的な言語規則を反映したものであるとは限らない。そこで、本稿のように、「談話文法」という観点を導入し、「文文法」とは異なる枠組みから体系の記述を試みる方法が極めて有効であると考ええる。

1.2.2.「談話分析」と「会話分析」

次に、本項では、方法論について考えることにする。本稿で行なおうとする談話分析(discourse analysis)と類似した研究領域に会話分析(conversation analysis)がある。この2つの領域は、「話しことば」を分析の対象とするという点では共通しており、厳密な区別ができるものではないが、少なくともそれらの分析における方法論という点においては、異なる特徴をもつといえる。そこで、本項では、本稿の研究が採用する分析方法について述べるための前提として、談話分析と会話分析の方法論につい

⁷ ただし、「談話文法」の記述にあたっては、言語体系としての根幹部分については、「文文法」と項を一にしている部分も存在しており、両者はまったく個別に存在するものではない。

て概観することから始めよう思う。

「談話分析」が言語学の一領域として位置づけられるようになったのは、1980年代に入ってからのことである⁸。メイナード(1993)では、その1つの契機となったのは、アメリカの言語学者、Tannen によって1984年に書かれた『Conversation Style』であったとしているが、そもそもこの研究も、1960年代から行なわれ始めたエスノメソドロジー (ethnomethodology)⁹における「会話分析」の流れを受け継いだものであった¹⁰。

談話分析に先駆けて研究がなされた「会話分析」という領域は、アメリカで Sacks, Schegloff, Jefferson といった社会学(sociology)の流れをくむエスノメソドロジスト(ethnomethodologists)らによって開拓され、発展してきたものである。ザトラウスキー(1993)では、Levinson(1983)など、いくつかの論考で述べられている「談話分析」と「会話分析」の特徴に関する記述を援用し、両者についてまとめているが、そのうち「会話分析」については、以下のようなものであるとしている¹¹：

【「会話分析」の特徴】

- a. a rigorously empirical approach which avoids premature theory construction …
methods are essentially inductive;
(性急な理論構築を避けようとする。徹底して経験的、帰納的なアプローチをとる)
- b. search is made for recurring patterns across records many naturally occurring conversations, …
(自然に交わされる数多くの会話の記録を対象として、繰り返し起こるパターンを考察する)
- c. emphasis on the interactional and inferential consequences of the choice between alternative utterances …
(いくつかの発話間での選択が、その後の示唆や対応の仕方にどのような結果をもたらすかを強調して分析する)
- d. there is as little appeal as possible to intuitive judgments… the emphasis is on what can actually be found to occur, not on what one would guess would be odd (or acceptable) if it were to do so …
(直観的判断をできるだけ排除し、その発話が適切か否かという判断よりも、実際に起こったことに重

⁸ 日本の国語学の中では、比較的早い時期から「話しことば」研究への萌芽が認められていた。特に1948年に設立された「国立国語研究所」は、現在に至るまで、「話しことば」の研究において、大きな役割を担っている。例えば、同研究所より1955年に発表された『談話語の実態』は、様々な場面やインフォーマントの違いによる談話を採録した先駆的な研究であった。

⁹ 1960年代に、米国のGarfinkelらが提唱した社会学の一潮流をさす。直訳すると、「人々のやり方」。『新社会学辞典』(1993年)によると、「人々が暗黙のうちに共有している常識的なやり方を細部にいたるまで記述し、考察する」(p.100)ことを目的とする学問領域で、その手法には、実験的場面を設定する方法、日常生活の中に小実験を織り込む方法、テープレコーダーを駆使した会話を分析する方法などが採用される。

¹⁰ なお、言語学者による研究において、初めて談話分析の可能性が示唆されたのは、「discourse analysis」(談話分析)という術語を初めて使用したといわれるHarris(1952)にまで遡る。ただし、この研究は、人為的に作成された「書かれた話しことば」を分析しているという点で、本稿が前提とする「談話分析」とは大きく異なるものである。

¹¹ 本項におけるザトラウスキー(1993)の引用における日本語訳、および文献名の表示は、すべてザトラウスキーによるものである。

点を置く)

- e. discover the systematic properties of organization of talk , and the ways in which utterances are designed to manage such sequences.

(会話の線条的構造における相互連関的な性質とその流れがどのように作られているかを発見しようとする) (Levinson 1983:286-7)

(p.6-7)

彼らの手法の特徴は、「自然主義的観察研究」(naturalistic observational discipline) (マルコム・クルタード(1999:101))という言葉で説明されるように、日常の言語使用場面における会話を録音し、文字化されたスクリプトを詳細に観察、分析、記述していくという極めて帰納的、かつ実証的な方法によるものである。初期の会話分析の研究をみると、組織(警察、交通裁判所、検死審問、答弁取引、少年審判、病院など)、関係(性、マイノリティなど)、行為(事実認識、規範、身体間調整など)を扱ったものが多いが、これは、もともと彼らは社会学的な関心が強く、言語、非言語行動を媒介とした社会的相互作用についての記述を主たる研究目的としていたことと関係が深いといえる¹²。また、1970～80年代に入ると、その興味、関心の方向は、会話の構造と構成(organization)へと移っていくことになるが、このことは、この時期に「話者交替」(turn-taking)や「隣接ペア」(adjacency pair)、「選好組織」(preference organization)、「挿入発話連鎖」(insertion sequences)といった談話展開に関する論文が多く発表されたことから確認することができる。

一方、「談話分析」については、ザトラウスキー(1993)では、以下のようにまとめられている:

【「談話分析」の特徴】

- a. The isolation of a set of basic categories or units of discourse …

(ディスコースの基本的範疇や単位の集合(set)を取り出す)

- b. the formulation of a set of concatenation rules stated over those categories, delimiting well-formed sequences of categories (coherent discourses) from ill-formed sequences (incoherent discourses) …

(これらの範疇が適用されて、範疇の適確連鎖(一貫性のあるディスコース)と不適格連鎖(一貫性のないディスコース)を区別する一連の規則が定式化される)

- c. appeal to intuitinos, about, for example , what is and what is not a coherent or well-formed discourse …(Van Dijk 1972;Labov and Fanshel 1977:72)

(考察の対象となるディスコースの一貫性の有無、または、そのディスコースが適確か否かについては、直観的な判断によることが多い)

- d. tendency to take one (or a few) texts (often constructed by the analyst) and to attempt to

¹² 「会話分析」の起源は、1963年に Sacks が UCLA の臨時助教授として在職していた頃に行なった研究に端を発するとされる。この研究は、自殺防止センターの職員が、電話で相談を受ける際に、相談者から名前を聞き出すことが難しい、という悩みを持っていることを知り、それを解決するために、相談の電話の録音を分析した、というものであった。

give an analysis in depth of all the interesting features of this ,limited domain to find out
… “ what is really going on ”(Labov and Fanshel 1977:59,117)

(一つ、ないし二、三のテキスト(分析者によって作られたものが多い)を取り上げて、その限られた範囲以内のあらゆる興味ある特徴を深く分析し、実際に何が起きているかを説明しようとする)
(Levinson 1983:286)

(p.6)

「会話分析」が帰納的、実証的な研究であるならば、「談話分析」は演繹的、経験的な方法をとるものである。その分析過程において依拠する理論は、主として言語学(linguistic)であり、その成果は、例えば、言語学の一部を成す統語論の延長線上にあるものであるとも考えられる(津田(1994))¹³。このような理由から、談話分析では、必ずしも日常生活における言語を分析対象とするという前提が存在せず、テレビ番組やラジオの音声、さらには、ドラマの台本や小説、研究者による作例など「書かれた話したことば」(疑似会話体)が用いられることもある。分析に際しては、言語学の下位領域として位置づけられる統語論、形態論のほか、語用論(pragmatics)、意味論(semantic)といった分野からアプローチがされることもある。

このように分析方法において違いをみせる会話分析と談話分析であるが、実際に「話されたことば」を分析する過程においては、両者いずれか一方の立場に立ち、研究を行なうことは、極めて難しいといえる。それはまさに、会話分析と談話分析を厳密に区分することが困難であることと関係しているのであるが、例えば、もし、分析の方法や範囲が「会話分析」の領域にのみ限定された場合には、主に談話参与者(discourse participants)間の社会的関係や、談話の展開方法に関心がいくことになり、「話されたことば」である「談話」を扱いながらも、言語形式そのものの分析を行なうことは、難しくなるだろう。また、反対に「談話分析」の領域にのみ限定された場合には、主に談話の中に存在する任意の発話を取り上げて、それに対する文法的な分析を行なうことになり、談話そのものの存在様式を周辺発話や文脈、談話展開といった観点からより実証的に分析することは、困難になる。つまり、いずれかの領域に偏った分析方法が採用された場合、言語に対するより多角的な分析、記述を行なうことが困難になってしまうのである。

このような問題を解決するには、どのような方法論が有効であろうか。筆者は、そのための鍵は、Hymes が提唱する「コミュニケーションの民族誌」(ethnography of communication)という概念にあると考える。Hymes によると、「コミュニケーションの民族誌」が理論的に依って立つところは、社会言語学(socio-linguistics)であり、社会学と言語学はもちろん、心理学、民族誌をつなぐものであるという。こうした考えは、Hymes(1974)における、以下のような記述から知ることができる：

A general theory of the interaction of language and social life must encompass the multiple between linguistic means and social meaning. The relations within a particular community or personal repertoire are an empirical problem, calling for a mode of description

¹³ 久野(1978)による「省略」の研究、牧野(1980)による「くり返し」の研究などは、その好例といえよう。

that is jointly ethnographic and linguistic, conceiving ways of speaking as one among the community's set symbolic form.

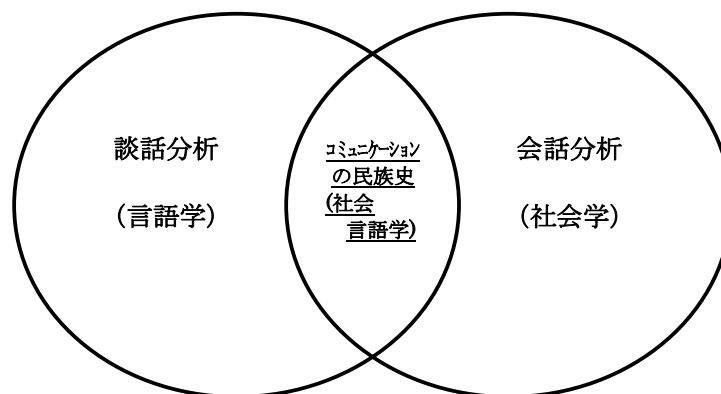
(言語による相互作用と社会生活を記述する一般理論は、言語手段と社会的意味の様々な問題を包括しなければならない。ある特定の社会や個人的な特性における関係は、経験的な問題であり、それは、民族誌と言語学との協力による記述方式が必要とされ、様々な話し方がその地域社会における記号形態の集合の1つとして理解されるような種のものである)

(p.31(筆者訳))

上記のように、Hymes の「コミュニケーションの民族誌」が扱おうとするテーマは、領域横断的といえるもので、その分析手法も多岐に渡る¹⁴。例えば、発話方法 (ways of speaking)、発話状況 (speech situation)、発話の構成要素 (components of speech)¹⁵、発話機能 (functions of speech) などの多角的な視点からの分析が取り入れられるが、こうした視点が導入されることによってはじめて、「談話分析」と「会話分析」が相互に補完し合う、「話されたことば」に対するより実証的、かつ正確な記述が可能になると考えられる。

以上のような談話分析、会話分析の特徴をふまえたうえで、本稿で行なう「談話分析」では、従前の言語学研究における「談話分析」の手法を基本としながらも、「会話分析」における手法も取り入れて、言語事実を分析するという方法論を採用することにする。具体的には、以下に示したようなモデルのもと、それぞれの領域に個別の観点、分析項目を設定する¹⁶：

【本稿における「談話分析」の方法論の基本概念となる「コミュニケーションの民族史」】



¹⁴ 「コミュニケーションの民族誌」は、Hymes を中心に 1960 年代に興った概念である。岩田他(2013)によると、Hymes は、1920 年頃に社会人類学者である Malinowski が、トロブリアド諸島における調査報告をした際に、「ことばを使うことは行為であり、意味はコンテキストにおいて解釈される」という趣旨の主張したことに影響を受け、これを説くに至ったといわれている。

¹⁵ 具体的には、状況(scene: 改まった状況か、くだけた状況か、など)、話し手、送り手(speaker, sender: 談話参与者)、発話の形式(forms of speech: レジスターやスタイルの違い)などがあげられる。

¹⁶ なお、談話分析における一領域に、「語用論」があるが、これは、主に談話が行なわれる個別、具体的な「(言語行動)場面」と「言語(形式)」の関係を扱うものである。ただし、特定の場面における談話は、それ自体を分析対象とすることには意味があっても、必ずしもある言語における談話の一般性を抽出するのに有効な方法とは限らない。そのため、本稿における研究では、分析項目として「談話参与者の関係」(初対面、親疎)による設定は行なっても、「場面」による設定は行なわないことにする。

【主に「談話分析」の手法を用いる観点、分析項目】

0. 日本語談話、朝鮮語談話の対照研究。
1. 「中途終了発話文」(発話形式)に関する形態・統語論的分析。
2. 「中途終了発話文」の「発話機能」に関する分析。
3. 発話意図とポライトネスに関する分析。
4. 先行発話との一貫性と、発話文の生成メカニズムに関する分析。

【主に「会話分析」の手法を用いる観点、分析項目】

1. 実際に「話されたことば」に関する分析。
2. 発話者の属性(性別、年代)、対話者との関係(親疎関係、年齢差)による言語使用の相違に関する分析。
3. 隣接ペアに関する分析。
4. 発話連鎖(談話展開)に関する分析。

以上のように、本稿では、「談話分析」と「会話分析」という双方向の視点から実現体としての「発話文」を観察することにより、言語事実に対するより多角的、かつ深層的な記述を行なっていく。なお、本稿における研究では、言語事実としての計量化データの分析を基本としながらも、そこに見出される特徴を解明するための手段として、具体的用例の分析を取り入れることにする。すなわち、まずは「量的」な観点により出現傾向を把握した後で、「質的」側面における分析に進んでいくというアプローチをとる。このような方法をとることにより、各用例が、両言語の談話における、いかなる特徴を反映したものであるのかを把握したうえで、より正確な言語記述を行なうことが可能になると考える。

1.2.3. 日朝対照による談話分析

続いて、本項では、既存の日朝対照研究の枠組みにおいて、談話分析がどのように展開されてきたのかを概観し、研究史における本稿の位置づけを示すことにしたい。

1.2.2.でも述べたとおり、言語学研究において談話分析が広がりをもせたのは、1980年代に入ってからのものであった。そして、それから、30年余りの時を経て、現在では、広義の日本語学の中で、着実な発展をみせており、すでに1つの学問領域として、定着したといってもよい趨勢をみせている¹⁷。

このような状況の中で、本稿で分析対象とする、日本語と朝鮮語の「談話」を扱った対照研究の動向をみてみると、日本語学のそれに比べ、研究の蓄積は、まだそう多くないというのが現状である。管見によると、日本語と朝鮮語の談話を扱った対照研究が本格的に始まったのは、1990年代中ごろのことで、その中でも比較的早い時期のものとしては、「挨拶と婉曲表現」を扱った李殷娥(1995)があげられる。この論考は、言語が使用される、ある「場面」と「表現」の関係を分析するというものであるが、こうした研究

¹⁷ 例えば、杉戸(1984、1987)や、佐久間(1987、1990、1992、2003)、ザトラウスキー(1991、1993)など枚挙に暇がない。

方法は、その後も、不満表明(朴承圓(2000))、反対意見表明(李吉鎔(2001))、依頼場面における言い訳(嚴廷美(2001))、断り場面とあいづち(任炫樹(2002))、ほめに対する返答(金庚芬(2002))など、「言語行動」(language behavior)を扱う多くの研究において広く採用されていくこととなった。

また、2000 年以降になると、「スピーチレベル」(speech level)に関する研究も行なわれるようになる。金珍娥(2002)や鄭賢貞(2004)などのスピーチレベルシフト(speech level shift)と待遇法(待遇法)の関係性を扱った論考は、その例である。

一方で、「発話形式」を「談話文法」として、正面から捉えた研究は、言語行動やスピーチレベルを扱ったものよりは、比較的遅い発展をみせている¹⁸。金珍娥(2006、2010、2013)による文末形式や、「非述語文」を扱った一連の研究や、金智賢(2008)における無助詞の研究、高木(2012、2013b、2014)における「中途終了発話文」の研究などがあるが、いずれも 2000 年代半ばから 2010 年代に入って現れ始めたものである。

また、「発話機能」(speech function)や、「発話(行為)連鎖」(speech act sequence)という点から両言語を対照した研究はさらに少なく、管見の限り、発話機能については、曹英南(2004)における「言いさし表現」の機能に関する研究、発話連鎖(談話展開)については、金敬善(1998)における電話会話における終結部展開の研究、高木(2013a)における「くり返し発話」の研究くらいしか確認されていない¹⁹。

以上のように、日本語と朝鮮語の対照研究の枠組みにおける談話分析の歴史はまだ浅く、未解明な部分が多いといえる。また、これまでのところ、比較的早くから研究が始まった「言語行動」に関する論考が主流を占めており、「発話形式」や「発話機能」、その他にも「発話連鎖」といったことを扱ったものは極めて少ない状況にある。それだけでなく、上記の一連の研究は、主に日本国内でなされた研究であるものの、そのほぼすべてが朝鮮語母語話者の手になる論考である。対照研究という領域は、両言語の母語話者による視点があつてこそ、より正確な議論が可能になるものであると考える。今後は、日本語母語話者の視点による論考がさらに増えていくことが期待される状況にあるといつてよいだろう。

このような状況をふまえて、本稿では、日本語と朝鮮語の談話に現れる「中途終了発話文」について分析するにあたって、既存の研究では、いまだ十分に解明されていない談話文法における発話文の「形式」と「機能」の関係、さらには「発話連鎖」の形成といった項目を中心に扱い、両言語の談話における発話文の本質的特徴が、いかなる類似点、相違点をみせるかを解明していこうと思う。

1.3. 本稿の構成

前節で述べたことをふまえて、本稿では、日本語と朝鮮語の談話に現れる発話文を「形式」と「機能」、「発話連鎖」といった観点から、「談話分析」と「会話分析」の手法により分析していく。具体的には、以下

¹⁸ 比較的早い時期のものとして、曹英南(2002)における「言いさし表現」の論考があるが、これは、質問紙による意識調査の結果を分析したもので、厳密な意味での「談話分析」を行なったものではない。

¹⁹ 梅木(2009)では、日朝接触場面における「発話連鎖の期待」に関する研究を行なっている。ただし、これは、日本語母語話者と、朝鮮語を母語とする日本語学習者による日本語談話を分析したものである。

のような手順で議論を展開していくことにする：

本章に続く第2章では、調査・分析の方法について示す。本稿における研究では、主たる分析対象として、筆者が独自に採録した自然談話(各言語、ともに 21 談話ずつ)を使用するが、これらの談話は、発話者の属性や関係という点において、条件が統制されたものになっている。ここでは、これらの談話採録調査の枠組みを示すとともに、音声としての談話資料の文字化方法、発話文認定の原則についても述べることにより、以降の章における分析の前提を提示することにする。また、この章では、第8章で分析する、言語使用への意識を問う質問紙調査の概要についても整理する。

第3章では、日本語と朝鮮語における品詞や、用言の活用形、「発話形式」に対する本稿の基本的立場を明らかにした後、発話形式の一部を構成し、本稿における主たる分析対象となる「中途終了発話文」の先行研究における記述、本稿の定義、類似概念との関係、形態論的下位分類についてみていく。また、本稿における今一つの分析項目となる「発話機能」に関しても、既存の研究における議論をふまえながら、理論的枠組みを構築する。なお、第3章では、「形式」と「機能」による分類を示すのみならず、それらが実際の談話においてどのような出現を示すかについて、計量化したデータとともに提示する。データの分析にあたっては、両言語における出現傾向の差異のみならず、発話者の属性や、対話者との関係による出現の差という観点も取り入れることにする。

第4章から第8章までは、本稿の中核を担う章で、第3章までで述べた理論的前提をもとに具体的な分析を行っていく。まず、第4章では、日本語と朝鮮語の談話における「形式」と「機能」の関係として、特に「中途終了発話文」が「情報要求」という「発話機能」を持つ場合に焦点を当てて分析する。具体的には、単独のターンとしての発話文の出現に注目しながら、(1)発話者の属性、および対話者との関係によって、「形式」と「機能」は、いかなる出現の差異をみせるのか、(2)それらの発話におけるポライトネス(発話意図)は、いかなる特徴を持つのか、という2つの観点から分析を行なう。なお、上記の分析に際しては、「中途終了発話文」のみならず、「非中途終了発話文」の出現との相違にも着目し、分析発話形式がなぜ、その文脈において「選択」されたかについても考察していく。

第5章では、「質問」(情報要求)²⁰を表す「中途終了発話文」の生成メカニズムについて分析する。具体的には、第4章でみた単独のターンとしての発話文に関する分析を発展させ、それらを「先行発話」からの文脈の中で捉えなおすことにより、そもそも文末に終止形語尾を持たない発話文、明示的な質問要素を持たない発話文が、なぜターンを構成し、「質問」文として機能することが可能になるのかを分析する。

第6章では、「質問」を表す発話が、いかなる「連鎖組織」を生み出し、以降の談話展開に影響を与え

²⁰ 後述することになるが、本稿では、第3章、第4章で、単独の発話文が持つ「発話機能」について分析する際には、「情報要求」という術語を、第5章、第6章において、「発話連鎖」(周辺発話との関係)について分析する際には、「質問」という術語を用いることにする。これらは、いずれも慣例に従ったものである。

ているのかを分析する。具体的には、「質問」に後続する「応答」発話を「情報提供」を表す発話、「情報提供以外」を表す発話に分類し、それぞれの発話を「形式」と「機能」という観点から分析することにより、「質問」発話(先行発話)と、「応答」発話(後続発話)が、どのような有機的関係を構築しているかを示す。

第7章では、談話展開上の戦略として用いられる「くり返し発話」の出現について「形式」と「(談話展開)機能」という観点から分析を行ない、日本語と朝鮮語の「発話文」生成と「談話展開」に関するさらなる特徴を明らかにする。また、「くり返し発話」と「中途終了発話文」生成の関係についても論じることとする。

第8章では、第4章から第7章までで述べてきた内容をふまえ、両言語の母語話者を対象に実施した質問紙調査の結果を分析し、表現に対する意識、発話文生成に対する意識を明らかにするとともに、談話における使用様相との関連についても考察を試みる。

第9章では、本稿全体の結論を整理、総括したうえで、本稿における研究の意義、今後の課題について言及する。

本稿は、音声言語としての「談話」に特徴的にみられる「形式」を取り上げ、それが相互作用の中でいかなる「機能」を担い、談話展開に貢献しているのかを、「談話文法」という観点から記述しようとするものである。上記の一連の分析により、談話における発話文そのもののあり方に関する記述はもちろん、既存の研究では明らかにされてこなかった、日本語と朝鮮語の談話における「形式」と「機能」の関係や、発話文の生成メカニズム、発話連鎖(談話展開)、文文法と談話文法の差異について、その一端を示すことが可能になるものと期待される。

第2章 調査・文字化の方法

談話分析を行なうにあたっては、その分析対象となる言語資料の確保が重要な問題になる。近年は、個別言語の談話を扱った研究においては、自然言語を大量に集積したコーパス(corpus)の使用が盛んになってきたが、本稿で分析対象とする日本語と朝鮮語においては、均質な資料を公開したコーパスは、今のところ、存在していない状況にある²¹。そのため、本稿では、日本語母語話者同士、朝鮮語母語話者同士による自然談話を独自に採録し、そこで得られた音声資料(1次資料)と、文字化資料(transcript、2次資料)を主たる分析対象とすることにする²²。本章では、この談話採録調査の枠組みと、文字化の概要について示すとともに、第8章においてみる、言語使用への意識を問う質問紙調査の概要についても整理することにする。

2.1. 談話採録調査と文字化

2.1.1. 調査の枠組み

本稿における談話採録調査の枠組みは、宇佐美(1995)、金珍娥(2002、2004a、2004b)を参考にし、性別(男性・女性)、年代(10代後半・20代後半・40代前半)といった「発話者の属性」や、親疎関係(初対面・友人)、年齢の上下差(対年上・対同年・対年下)といった「対話者との関係」など、談話に影響を与えるであろう各種要素を考慮したうえで、設定を行なった。各談話の参加者は、「ベース被験者」と、そのベース被験者に対する属性、関係の異同により選定された1名の「対話者」により構成されており、両言語ともに計 21 談話ずつが設定されている²³。各言語における談話の「談話名」と「談話参加者名」、発話者の属性や、対話者との関係に関する情報は、以下のようになる：

²¹ 母語話者の談話を収集した主要なコーパスとしては、日本語では、「日本語話し言葉コーパス(Corpus of Spontaneous Japanese)」(国立国語研究所、通信総合研究所)や、「BTSによる多言語話し言葉コーパス—日本語会話1(日本語母語話者同士の会話)」(東京外国語大学)などが、朝鮮語では、「21 세기 세종 계획」(21世紀世宗計画、韓国文化観光部、国立国語院)により構築されたコーパスなどが存在する。なお、上述のとおり、日本語と朝鮮語の「談話分析」にあたっては、対照に耐えうる均質なコーパス資料が見当たらないという理由から、多くの場合、研究者自身により採録した談話資料を用いることになるが、個人の研究者が確保できる談話資料は、量的な側面において限界があるため、十分なデータが確保できないという問題が生じることがある。そこで、本稿では、こうした問題に対処するために、独自に採録した談話資料を分析の中心に据えながらも、第8章では、両言語の母語話者を対象に実施した質問紙調査の結果を分析し、談話資料の分析を補うことにする。

²² 談話参加者の選定にあたっては、日本語母語話者は、東京で言語形成期を過ごし、外住歴のない者、朝鮮語母語話者は、ソウルで言語形成期を過ごし、外住歴のない者に限定している。なお、調査は、2007年1月から2010年1月にかけて東京とソウルの大学内で行なった。

²³ 【表2-1】に示したように、本稿の調査では、日本語と朝鮮語において均質な言語資料を確保するために、両言語ともに同一の条件により参加者を定め、談話の採録を行なった。2者間談話に限定したのは、発話者と対話者の属性が発話に与える要因をできる限り可視化するためである。なお、談話採録に際しては、全被験者に調査・研究の趣旨、および、守秘義務の遵守について十分な説明を行なったうえで、情報に基づく同意(informed consent: 前田編(2005))を得ている。

【表 2-1】「談話名」、「談話参与者名」と参与者の属性²⁴

日本語談話

談話名	談話参与者名		参与者1と2の関係	
	ベース被験者(属性) 【参与者1】	対話者(属性) 【参与者2】	親疎関係・年代	性別・年齢の上下差
J1	JNB1(20F)	JN1(40F)	初対面	同性・年上
J2		JN2(20F)		同性・同年
J3		JN3(10F)		同性・年下
J4	JNB2(20F)	JN4(40M)		異性・年上
J5		JN5(20M)		異性・同年
J6		JN6(10M)		異性・年下
J7	JNB3(20M)	JN7(40F)		異性・年上
J8		JN8(20F)		異性・同年
J9		JN9(10F)		異性・年下
J10	JNB4(20M)	JN10(40M)		同性・年上
J11		JN11(20M)		同性・同年
J12		JN12(10M)		同性・年下
J13	JNB5(10F)	JN13(10F)	友人	同性・同年
J14		JN14(10M)		異性・同年
J15		JN15(10M)		同性・同年
J16	JNB7(20F)	JN16(20F)		同性・同年
J17		JN17(20M)		異性・同年
J18		JN18(20M)		同性・同年
J19	JNB9(40F)	JN19(40F)		同性・同年
J20		JN20(40M)		異性・同年
J21		JN21(40M)		同性・同年

朝鮮語談話

談話名	談話参与者名		参与者1と2の関係	
	ベース被験者(属性) 【参与者1】	対話者(属性) 【参与者2】	親疎関係・年代	性別・年齢の上下差
K1	KNB1(20F)	KN1(40F)	初対面	同性・年上
K2		KN2(20F)		同性・同年
K3		KN3(10F)		同性・年下
K4	KNB2(20F)	KN4(40M)		異性・年上
K5		KN5(20M)		異性・同年
K6		KN6(10M)		異性・年下
K7	KNB3(20M)	KN7(40F)		異性・年上
K8		KN8(20F)		異性・同年
K9		KN9(10F)		異性・年下
K10	KNB4(20M)	KN10(40M)		同性・年上
K11		KN11(20M)		同性・同年
K12		KN12(10M)		同性・年下
K13	KNB5(10F)	KN13(10F)	友人	同性・同年
K14		KN14(10M)		異性・同年
K15		KN15(10M)		同性・同年
K16	KNB7(20F)	KN16(20F)		同性・同年
K17		KN17(20M)		異性・同年
K18		KN18(20M)		同性・同年
K19	KNB9(40F)	KN19(40F)		同性・同年
K20		KN20(40M)		異性・同年
K21		KN21(40M)		同性・同年

〔表中の記号〕(凡例中、x には、数字が入る)

＜談話名＞ Jx：日本語談話 (Japanese)、Kx：朝鮮語談話 (Korean)

＜談話参与者名＞ JNB: 日本語ベース (Japanese Native speaker Base)

KNB: 朝鮮語ベース (Korean Native speaker Base)

JNx/KNx: 日本語対話者／朝鮮語対話者

＜属性＞ = () 内＞ (年代) 10:10 代後半、20:20 代後半、40:40 代前半

(性別) M: 男性 (Male)、F: 女性 (Female)

²⁴ 年代は、調査当時のものを満年齢により分類している。

調査は、大きく分けて、以下の2つの段階からなる：

① 談話の採録

【表 2-1】に示した参与者による2者間談話を IC レコーダーにより録音する。話す内容は、初対面談話では、初めは「互いについて話す」というテーマを設定しておき、それ以降は、会話の流れに任せて自由に話してもらったが、友人同士の談話では、最初からテーマを決めずに自由に話してもらった。1 談話あたりの収録時間は、20 分ほどである。なお、録音中、調査者は別室で待機し、参与観察 (participant observation) は行なっていない。

② フォローアップアンケートの記入²⁵・インタビュー

(フェイスシート(調査整理表)の記入²⁶・追調査)

談話採録が終了した後に、被験者に対してフォローアップアンケート (follow-up questionnaire) やインタビュー (interview) を実施し、分析過程で必要となる被験者の情報や、談話収録過程における感想や内省などを引き出す。ここで得られた被験者に関する基本的データは、フェイスシート(調査整理表)に記入しておき、分析過程で随時参照する。また、それ以外にも、必要に応じて、随時、追調査を実施し、分析の精度を高める。

2.1.2. 文字化の概要

先に述べた談話採録で得られた音声資料を文字化し、分析対象とする。文字化資料の作成にあたっては、まず音声資料から文字資料への1次的な「文字起こし」をそれぞれの言語の母語話者である第3者に依頼し、そこで作成された文字化資料を改めて筆者が照合したうえで、分析資料化するという過程を経た。

文字化をする際の表記(記号など)、書式については、基本的には、日本語資料は宇佐美(2007)の「基本的な文字化の原則」(Basic Transcription System for Japanese: BTSJ)に拠ることとし、朝鮮語資料についても、同原則を援用しつつ、朝鮮語の表記の慣習に照らして、若干の不都合が生じた場合には、それを改定した原則に準じて書き表すことにした²⁷。

なお、分析単位である「発話文」の認定にあたっては、基本的には上記原則に準じ、話者交替が起こった場合、あるいは、先行する発話の後に2秒以上の間(ポーズ)が確認された場合にこれを認めること

²⁵ フォローアップアンケートは、被験者記入式で、日本と韓国で実施したすべての調査の被験者に対して行なった(ベース被験者は談話ごとに行なった)。具体的には、①性別、生年月日、職業といった属性、②出身地、外住歴(期間)、保護者の生育地、外国語の学習歴(期間)といった言語環境、③録音されていることに対する意識の度合い、会話の自然さ、対話者に対する意識といった談話採録に関する内省を問うものである。実際に使用したフォローアップアンケート(日本語版・朝鮮語版)は本稿の末尾に[付録1]、[付録2]として付されている。

²⁶ フェイスシート(調査整理票)は、フォローアップアンケートとは別に被験者の情報を記入したもので、採録した談話に参加した被験者ごとに(ベース被験者は談話ごとに)作成してある。具体的には、会話番号、被験者の年齢、性別、対話者の年齢、性別、調査開始時刻、調査終了時刻、調査場所、同席者の有無、備考(録音時の状況、雑音などの特記事項)などを記入する欄が設けられており、すべて調査者(筆者)が記入するものである。実際に使用したフェイスシートは、本稿の末尾に[付録3]として付されている。

²⁷ たとえば、朝鮮語においては、「。」(句点)や「、」(読点)は用いずに、「.」(ピリオド)や「,」(コンマ)を用いること、分かち書きをすることなど。

にする。また、「日本には、いついらっしゃったんですか？」に対する「2002 年…」のような1語だけからなる発話(いわゆる「1語文」)も、話者の交替や、間の存在といった発話文としての認定基準さえ備えていれば、「発話文」として認める。ただし、上記原則においては、「フィラー」(あいづち)に関しては、1発話文として認めていない場合があるが、本稿では、金珍娥(2004a、2004b、2006)などにおける議論をふまえ、これらも談話における相互作用において重要な役割を担う発話であるとの立場をとり、独立した「発話文」として扱うことにする。

入力には Microsoft 社の Excel を用い、会話を文字化する時間と範囲は、初対面談話については、採録開始から 07 分 00 秒の範囲、友人同士の談話については、採録終了2分前から起算して 07 分 00 秒の範囲とした。

本稿で提示する用例中に付される記号は、主に、以下のようなものである：

【表 2-2】本稿の文字化で使用する主な記号(宇佐美(2007)による)

記号	意味
。／.	発話文の終了(非疑問文)
?。／?.	" (疑問文)
…。／….(三点リーダー)	中途終了発話文(非疑問文)
…?。／…?.(三点リーダー)	" (疑問文)
[↑] [→] [↓]	イントネーション
<発話文>{<} 【【。	実質的発話の重複、割り込み(先行発話)
】】<発話文>{>}。	" (後続発話)
<笑い>	笑いの挿入
…(あいづち。)…。	対話者によるあいづち発話の重複、割り込み
→ 発話文	当該項目で注目する発話文
⇒ 発話文	

／の左は日本語、右は朝鮮語における表記を示す。

以上のことをふまえ、ここで実際の文字化データを示しておくことにしよう。次ページの例をみてもわかるように Excel データによるセルの割り当ては、概ね「基本的な文字化の原則」に拠っており、あいづち発話の挿入による同時発話の場合などを除いては、ターンとしての「発話文」という単位をもとに改行することを原則としている。ただし、本稿における文字化においては、「発話文終了」の代わりに「中途終了発話文」の欄を設けていることや(左から3行目)、()で示された同時発話における「あいづち」発話も独立した発話文として計量していることなど、独自の記述法を採用した部分も存在している(なお、実際の分析過程においては、「中途」の欄には、分析項目に関わる様々な記号を配し、作業の便宜を図った)：

【本稿における文字化の例】

ライン 番号	発話文	中途	話者	発話内容
1	1		JNB	はじめまして。
2	2		JN8	はじめまして。
3	3		JNB	私、「JNB姓」と申します。
4	4		JN8	あ、「JN8姓」です。
5	5		JNB	<笑い>。
6	6		JN8	よろしくお願いします。
7	7		JNB	よろしくお願いします。
8	8・10	*	JNB(JN8, JN8)	特に、何もないんですけど(はい。)、なんか自由に話してくれっていうのが、この(はい。)研究の あれらしいので…。
9	11		JN8	はい。
10	12		JNB	ちなみに今は何されてるんですか？。
11	13		JN8	今、主婦です。
12	14,5		JNB(JN8)	あ、主婦[↑]、あ、ご結婚されてる(はい。)んですね。
13	16	*	JNB	はあ、専業主婦…？。
14	17	*	JN8	専業主婦…。
15	18		JNB	ああ、今日は、何しにいらっしゃったんですか？。

なお、本稿で分析対象とする談話に現れた総発話文は、日本語で 4,162 発話、朝鮮語で 3,959 発話となる²⁸。

【表 2-3】日本語談話と朝鮮語談話における総発話文数

日本語	朝鮮語
4,162	3,959

単位: 発話

2.2. 質問紙調査

談話の分析により明らかになった事項をふまえ、「表現」、および「発話文生成」に対する母語話者の意識を調べるために、日本語母語話者、朝鮮語母語話者に対し、質問紙調査を実施した。【表 2-4】に示したように、被験者は、性別(男性・女性)、年代(10 代後半・20 代後半・40 代前半)を考慮した条件により選定しており、調査対象者は、各言語で 120 名ずつとした²⁹。被験者の属性については、調査票の1ページ目に記入を依頼し、調査後には筆者がフェイスシート(調査整理表)に転記し、分析の過程

²⁸ 両言語において条件を統制し、談話採録を行なった場合、朝鮮語より、日本語において、総発話文数が多くなることは、金珍娥(2006)でも述べられているように、日本語で「あいづち発話」(「あー」、「そうですね」などの類)が多いことと深く関連している。

²⁹ 調査は、2013 年 6 月から 8 月にかけて、東京とソウルの大学内で実施した。被験者の選定にあたっては、談話参加者を選定した際と同様に、日本語母語話者は、東京で言語形成期を過ごし、外住歴のない者、朝鮮語母語話者は、ソウルで言語形成期を過ごし、外住歴のない者に限定している。なお、年代は、調査当時のものを満年齢により分類している。

において随時参照した³⁰。また、必要に応じて、追調査やインタビューも行ない、分析の精度を高めた：

【表 2-4】質問紙調査における被験者の情報

日本語／朝鮮語

被験者の属性 (年代、性別)	人数	
10M	20名	120名
10F	20名	
20M	20名	
20F	20名	
40M	20名	
40F	20名	

[表中の記号]

<被験者の年代> 10:10 代後半、20:20 代後半、40:40 代前半

<被験者の性別> M: 男性 (Male)、F: 女性 (Female)

2.3. まとめ

本章では、本稿における研究が採用する調査、分析の方法について概観した。具体的には、本稿の研究において主たる分析対象となる各言語 21 ずつの2者間談話の参加者が、性別(男性・女性)、年代(10 代後半・20 代後半・40 代前半)、親疎関係(初対面・友人)、年齢の上下差(対年上・対同年・対年下)という「発話者の属性」や「対話者との関係」により、統制がなされたものであることを示すとともに、音声資料の文字化方法や、発話文認定の原則についても述べた。また、第8章で行なう、言語使用への意識の分析において用いる、質問紙調査の被験者情報についても述べた。本稿で行なう談話採録調査、分析は、単に日本語と朝鮮語という言語を対照するためだけのものではなく、「発話者の属性」や「対話者との関係」をも視野に入れたより精密な記述を目指すものである。次章以降では、本章で述べた調査、分析の枠組みを前提に、分析項目に関わる具体的な議論に入っていくことにしたい。

³⁰ 脚注 26 において示したものと、基本的には同様のものを用いている。なお、フェイスシートの備考欄には、調査後に、筆者が被験者と個人的な対話を行なう中で得られた、様々な内省なども記しておいた。本稿の末尾に付された[付録 3]も参照。

第3章 理論的枠組みと出現様相

本章では、分析、議論のより具体的な前提として、日本語と朝鮮語の「発話形式」と「発話機能」に関する理論的枠組みを構築し、本稿におけるこれらの定義を示す。また、ここでも「形式」と「機能」の項目が、実際の談話の中で、いかなる出現を示すのかについて、データも合わせてみることにする。

3.1. 「発話形式」に関して

3.1.1. 品詞分類と用言の活用形、「発話形式」

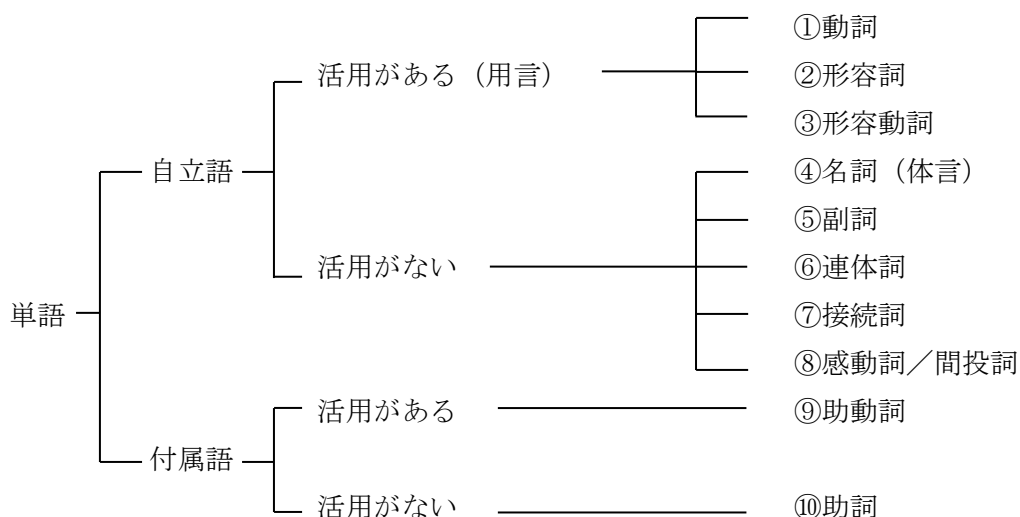
本項では、発話文の構成要素となる品詞の分類や、その根幹を成す用言の活用形、文末形式による「発話形式」の分類について、本稿における立場を明らかにしておく。

3.1.1.1. 品詞分類

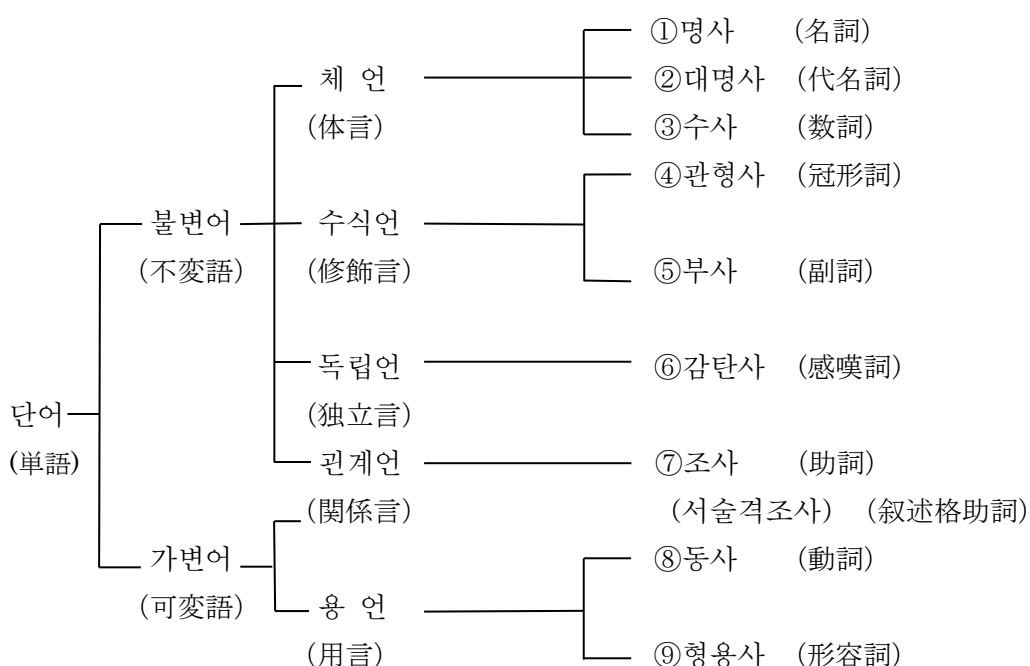
まず、品詞分類についてみることにしよう。本稿では、日本語と朝鮮語の品詞、および(用言の)活用形の下位分類の構築にあたっては、より広く採用されており、体系的な整理がされている学校文法(school grammar)³¹における分類をまず参照することにする。なお、具体的な参照にあたっては、各言語の学校文法について解説した永野(1986)『学校文法概説』、남기심, 고영근(1985, 1998)『표준 국어문법론』(標準国語文法論)における記述をもとにする。同書により、日本語、朝鮮語の学校文法における品詞の分類を整理すると、以下のようになる:

³¹ 「学校文法」とは、学校(主に義務教育)における国語教育の中で用いられている文法のことをさす。日本語の学校文法は、一般に橋本進吉による「橋本文法」と同義に捉えられることが多いが、『国語教育研究大辞典』(1988年)によると、それは、(1)終戦の直前に中学校の教科書の固定化作業において、『新文典 初年級用』(1931年)を基盤としたこと、(2)『国語法要説』(1934年)に用いられた「文節」という術語、およびその考え方が導入された固定教科書『中等文法』(1947年、文部省)が刊行されたこと、(3)戦後もこの文法が継承され、文節論が一般化し、品詞としての形容動詞が定着したこと、などによるところが大きいという。ただし、橋本進吉(1935)では、「連体詞」が独立した品詞として立てられていないのに対し、現行の学校文法では、これを品詞として認めているといった違いも存在する。また、朝鮮語の学校文法は、임홍빈(2000)、김재욱(2007)によると、かつての学校文法が、「최현배 문법」(崔鉉培文法)、「이희승 문법」(李熙昇文法)など、特定の学説に大きく影響を受けたものであったことから、それらの特殊性を可能な限り排除し、統一を図るために考案されたという経緯を持つという。具体的には、1963年の『학교문법통일안』(学校文法統一案、문교부(文教部))を経て、1985年には国定文法が制定され、文法用語や品詞、文成分の一次的分類における統一がなされるに至ったとしている。

【日本語の学校文法における品詞分類】



【朝鮮語の学校文法における品詞分類】



図をみると、学校文法における品詞の分類は、日本語では 10 品詞、朝鮮語では9品詞が定められており、両言語ともに、「活用がある語／가변어(可変語)」と「活用がない語／불변어(不変語)」という概念による分類がされているなど、大きな枠組みとしては、類似した体系を持つことがわかる。また、分類された品詞についてみてみると、例えば、「動詞」などは、両言語で品詞項目化されており、その範囲も概

ね並行していることから、対照にあたっては、この分類項目をそのまま使用しても大きな問題は起こらないといえそうである。しかし、その一方で、中には「接続詞」のように、日本語では独立した品詞として認めているのに対し、朝鮮語ではそれを認めていない項目、または、反対に「代名詞」、「数詞」のように、朝鮮語では認めているのに対し、日本語では認めていない項目も存在しており、両言語の品詞分類は、細部においては必ずしも一致していないことがわかる。

このように両言語の品詞分類は、大きな枠組みにおいては類似した体系を持ちつつも、細部においては異なる分類を持つことが確認されるが、本稿のように2つの言語の対照を行なう研究においては、前提となる品詞の分類項目が一致していない場合、正確な言語の記述ができなくなるおそれがある。つまり、両言語の品詞分類を一元的に統一しておく必要があるわけだが、本稿では、このような問題を避けるための方法として、基本的に日本語の学校文法における分類をもとに品詞項目を設定し、そこに朝鮮語の品詞を再分類することにより、両言語の品詞分類の枠組みを統一するという方法を採用することにしようと思う。具体的には、「動詞、形容詞、名詞、副詞、連体詞、接続詞、間投詞³²、助詞」の8つの品詞を立てることにし、それぞれの品詞の範囲については、以下のように定めることにする^{33,34,35}：

³² 必ずしも、感動、感嘆のみを表すものではないとの理由から、本稿では、「感動詞」、「感嘆詞」ではなく、「間投詞」という用語を用いることにする。

³³ 日本の学校文法における「助動詞」については、本稿では、独立した品詞として認めていない。また、「接続助詞」についても「助詞」の下位項目として認めていない。これは、朝鮮語の学校文法においては、文法的に類似した機能を持つ「接尾辞」(선어말어미:先語末語尾)や、「終止形語尾」(중결어미:終結語尾)、「接続形語尾」(연결어미:連結語尾)が、品詞の一部を構成する要素として認められていないことや、同品詞が「付属語」であるため、文中では、用言に結合して現れることを前提としていることによる。

³⁴ 韓国の学校文法に従い、朝鮮語の「있다」は動詞、「없다」は形容詞、「아니다」は形容詞として扱うが、「-이다」については、これを「格助詞」とみることが難しいことから、形容詞として扱っておく。なお、日本語の「体言+だ／です」の類も便宜的に形容詞に合流させておく。

³⁵ 日本語の「形容詞」と「形容動詞」は、現行の学校文法では、それぞれ独立した品詞項目となっているが、これらは形態の違いによる分類にすぎないので、本稿では、同一項目(「形容詞」)として扱う。

【表 3-1】本稿における「品詞」の分類

	本稿における 品詞名	日本の「学校文法」に おける該当品詞名	韓国の「学校文法」に おける該当品詞名	主要な範囲	備考
1	動詞	動詞	동사 (動詞)	自立語で活用する語。動作・作用・存在を表す。述語になることができる。基本形が日本語では「ウ段」、朝鮮語では「-다」で終わる。	用言
2	形容詞	形容詞・形容動詞	형용사 (形容詞)	自立語で活用する語。性質や状態を表す。述語になることができる。基本形が日本語では「-い」または「-だ」で、朝鮮語では「-다」で終わる。	用言
3	名詞	名詞	명사・대명사・수사 (名詞・代名詞・数詞)	自立語で活用しない語。物体・物質・人物・場所など具体的な対象を表す。主格助詞を伴って主語になるほか、日本語では「-だ」、「-です」、朝鮮語では「-이다」、「-아니다」を伴って述語になることができる。朝鮮語の「대명사」(代名詞)、「수사」(数詞)も日本語における分類に従って、本項目に統一する。	体言
4	副詞	副詞	부사 (副詞) の一部	自立語で活用しない語。連用修飾語として用いられる。主語や述語になることはできない。朝鮮語の学校文法では、「接続詞」もここに含まれるとされるが、本稿では、独立した項目を設けているため、含めていない。	
5	連体詞	連体詞	관형사 (冠形詞)	自立語で活用しない語。連体修飾語として用いられる。主語や述語になることはできない。	
6	接続詞	接続詞	부사 (副詞) の一部	自立語で活用しない語。前後の文や節、句などを結び付け、相互の関係を表す。主語や述語になることはできない。	
7	間投詞	感動詞／ 間投詞	감탄사 (感嘆詞)	自立語で活用しない語。感動や、呼びかけ、応答などを表す。主語や述語になることはできない。	
8	助詞	助詞の一部	조사 (助詞)	付属語で活用しない語。体言や副詞などと結合し、語と語の格関係を示したり、様々な意味を付け加える。単独では、主語、述語になることはできない。日本語の「接続助詞」は、ここに含めない。	

3.1.1.2. 用言の活用形

3.1.1.1.で定めた、本稿で採用する8種の品詞分類のうち、動詞と形容詞が「用言」、名詞が「体言」となるが、ここでは、このうち「用言」の活用形に対する本稿の立場を述べることにする。

まず、日本語における用言の活用形についてみてみよう。現行の学校文法では、活用形に6つの形を認めているが、それぞれについて、永野(1986)では、以下のように説明している：

・未然形：単独では用いられず、常に助動詞ナイ・ウ・ヨウなどを伴う。ウを伴うものは、オ列長音化するの

で、これを推量形(志向形)として別に立てる考え方もある。

- ・連用形: 単独でいったん中止する用法をもつ。また、助動詞タ・マス、助詞テその他を伴って用いられる。なお、動詞の連用形は、他の用言や体現と結びついて複合語を構成したり、単独で体言に転成したりする。形容詞・形容動詞の連用形は、単独で連用修飾語となる。
- ・終止形: 単独で、文を言いきるのに用いられる。助動詞ソウダ・助詞カラなどを伴う用法もある。
- ・連体形: 単独で、連体修飾語となる。助動詞ヨウダ・助詞ノデなどを伴う用法もある。口語の動詞・形容詞では、終止形と連体形は同形だが、形容動詞では形がちがうので、それに合わせて、動詞・形容詞でも別に立てるのである。
- ・假定形: 助詞バを伴って、仮定の条件を表わす形。
- ・命令形: 単独で、命令の意味を表わして言い切る。動詞にだけこの形がある。

(p.77, 78)

上記の分類をみると、日本語の活用形は、例えば「未然形」は、「未然」という意味や機能を担うものではなく、実質的には、「ナイ・ウ・ヨウ」などに接続する形である、というように形態論的特徴による分類になっていることがわかる³⁶。すなわち、各活用形は、必ずしも文中における機能を反映したものにはなっていない。

一方、朝鮮語の活用形はどうだろうか。남기심, 고영근(1985, 1998)では、韓国の学校文法における用言の活用形は、以下のような3つの分類を持つとしている(以下では、動詞の例を示すが、同書では、この他に形容詞、叙述格助詞(「-이다」(・である))についても説明している):

- ・종결형(終結形): (가) 학생들이 책을 읽는다. (学生達が本を読む)
(나) 학생들이 책을 읽느냐? (学生達が本を読むか?)
- ・연결형(連結形): (다) 학생들이 책을 읽고 어른들은 바둑을 두신다.
(学生たちが本を読んで、大人達は碁を打つ)
(라) 학생들이 책을 읽어 본다. (学生達が本を読んでみる)
- ・전성형(転成形): (마) 책을 읽는 학생들이 많다. (本を読む学生達が多い)
(바) 책을 읽기 싫어 하는 학생들도 많다.
(本を読むことを嫌がる学生達も多い)

(남기심, 고영근(1998)p.123を改変、訳は筆者による)

(가)、(나)は、文を終結させる形で종결형(終結形)、(다)、(라)は文と文をつなぐ形で연결형(連結形)、(마)、(바)は、体言を修飾したり、名詞形を作り、文の性格を転成させる形で전성형(転成形)とよばれている。上記のような活用形の分類の場合は、それぞれの活用形が文中でどのような役割を担っているかという観点、すなわち、統語論的観点から立てられているといつてよいだろう。

このように、両言語の学校文法における用言の活用形の分類をみても、日本語の分類は、用言

³⁶ 同様の指摘は、金珍娥(2006)でもされている。

が活用する際に、どのようなふるまいをみせるかという「形態論的観点」に主眼がおかれたものであるのに対し、朝鮮語の分類は、用言が文中においてどのように機能するかという「統語論的観点」に主眼がおかれたものになっており、その分類基準は違いをみせている。しかし、本稿における研究は、両言語の談話において、本来、文を終止させる機能を持たない形式が発話文末に現れるとき、いかなる出現様相をみせるかを対照しようとするものであり、両言語の用言の活用形の同定に際しては、やはり何らかの統一的基準を設定しておくことが不可欠になる。

以上のようなことを考慮したとき、両言語において適用可能な枠組みの設定を可能にするのは、文中における用言の「機能」に着目した「統語論的観点」からの分類であるといえる。このような分類を採用することによって、各言語内部における用言の活用形というパラダイムを超えて、文生成というより上位のレベルから両言語を対照することが可能になるからである。そこで、本稿では、両言語の用言の活用形を同定するに際しては、韓国の学校文法にみられるような統語論的観点による分類法を採用し、活用形を同定することにする。より具体的な分類基準としては、韓国の学校文法にみられる活用形の分類を、活用形の文中における機能という観点から、より細分化し、分類した野間(2000)における「用言の諸形」という概念を両言語に適用し、用いることにする。野間(2000)では、朝鮮語の用言の活用形として、以下のような5つの分類があることを述べている³⁷：

- ・終止形: 文を終止させる。Ⅰ・습니다／Ⅱ・ㅁ니다(します)、Ⅲ・요(します)
- ・接続形: 文をつなぐ。Ⅰ・고(して)、Ⅱ・면(すれば)
- ・名詞形: 名詞の働きをする。Ⅱ・로(すること)、Ⅰ·기(すること)
- ・連体形: 体言を修飾する。Ⅰ·는(する)、Ⅱ·ㄴ(した)、Ⅱ·ㄹ(するべき)
- ・引用形: 引用の構造を作る。Ⅱ·ㄴ다고(すると)、Ⅱ·ㄴ다는(するという)

(p.90)

上記の分類は、朝鮮語の学校文法にみられる統語論的分類をさらに「機能」という観点から細分化したもので、例えば「引用形」は引用節を導く、というように、それぞれの活用形が、文を構成する要素として、文中でいかなる機能を有しているかがより明確に示されている。以上の内容をふまえ、本稿における日本語と朝鮮語の用言の活用形を整理すると、以下のようになる：

³⁷ 以下の引用におけるⅠ、Ⅱ、Ⅲ(ローマ数字)は、用言の「語基」を表す。「語基」については、野間(2000)のほかにも、菅野(1981、2007)、菅野他(1998)なども参照のこと。なお、韓国の学校文法と、野間による「用言の諸形」との対応関係は、以下のようになる：

- ・종결형(終結形): 終止形
- ・연결형(連結形): 接続形、引用形
- 전성형(転成形): 名詞形、連体形

【表 3-2】日本語と朝鮮語の用言の「活用形」

活用形	文中の機能	日本語の例	朝鮮語の例
終止形	文を終止させる形	「-ます」、「-です」といった助動詞（終止形語尾）が結合した形、基本形など。	「-ㅂ니다/습니다」、「-아/어요」、「-아/어」といった終止形語尾が結合した形、基本形など。
接続形	文をつなぐ形	「-て」、「-けど」、「-ので」といった接続形語尾（接続助詞）が結合した形。	「-고」、「-(으)ㄴ데／-는데／-던데」、「-아/어서」といった接続形語尾が結合した形。
名詞形	名詞の働きをする形	「-み」、「-さ」など。	「-(으)ㄴ」、「-기」など。
連体形	体言を修飾する形	動詞の場合は、基本形と同形。形容詞の場合は、「-い」、「-な」。	「-(으)ㄴ／는／던」など。
引用形	引用節を作る形	「-と」、「-って」、など。	「-(으)ㄴ다고」、「-는다고」など。

3.1.1.3. 「発話形式」

次に、「発話形式」についてみることにする。日本語と朝鮮語の文法では、文末形式は、ふつう「用言＋終止形語尾³⁸⁾」という述語構造を持つとされる。しかし、日常の相互作用の場において観察される発話をみてみると、必ずしも文末に「終止形語尾」を伴わない場合があることが確認される³⁹⁾。そこで、本稿では、このような談話の特徴をふまえたうえで、発話形式の分類を行なうにあたっては、談話文法という観点から、その文末形式に着目し、類型化することにする。

具体的な発話形式としては、文末に終止形語尾が現れる(1-a)「完全文」の他に、用言の終止形以外の活用形や名詞、副詞などの品詞によって発話が終了する(2)「中途終了発話文」、その「中途終了発話文」に日本語の終助詞や、朝鮮語の丁寧化のマーカが結合した(1-b)「終助詞終了発話文／丁寧化のマーカ終了発話文」、(1-c)「フィラー」の4類型を認めることになる。今述べた日本語と朝鮮語の談話に現れる「発話形式」の分類を整理すると、以下ようになる。なお、ここでは、本稿の主たる分析項目である「中途終了発話文」と、それに対する形式としての「非中途終了発話文」に分け、整理することにする：

³⁸⁾ 本稿における「活用形」の定義は、統語論的基準によるものであるため、本来的に文を終止させる機能を持つ要素が現れる場合は、広く「終止形」として同定している。そのため、例えば、日本語では、学校文法で丁寧さを表す助動詞とされる「-ます」や「-です」が結合する場合のほかに、「基本形」、「命令形」なども、朝鮮語では、「-ㅂ니다/습니다」(「-です、ます」)、「-아/어요」(「-です、ます」)、「-아/어」(「-だ、する」よ)といった「終止形語尾」が結合する場合のほかに、詠嘆形「-(느)군／-(느)구나」(「-だ、する」なあ)、確言形「-지」(「-だ、する」ね)、確認形「-거든」(「-な、する」んだ)、意思形「-(으)ㄴ게」(「-する」からね)、目撃法「-더라」(「-だっ、してい」たよ) (以上、名称は菅野(1981, 2007)による)などが結合した場合も「文を終止させる形」＝「終止形」として扱われることになる。

³⁹⁾ 高木(2008a, 2010, 2012)、다카기[高木](2008b)を参照。

【文末形式に注目した「発話形式」の分類】

1. 「非中途終了発話文」

a. 「完全文」

「終止形語尾」によって文が終止する文法的に欠落した部分のない発話文。

b. 「終助詞終了発話文」(日本語)、「丁寧化のマーカ―終了発話文」⁴⁰(朝鮮語)

中途終了発話文(以下、2.)の末尾に「終助詞」や「丁寧化のマーカ―」が結合し、文が終了する発話文。(⇒3.1.3.2.2.参照)

c. 「フィラー」⁴¹

日本語では「あー」、「あの一」、「えーと」など、朝鮮語では「아-」(あー)、「저-」(あの一)、「ユ-」(その一)などのあいづち(応答)や言いよどみを表す間投詞類が単独で現れる発話文。

2. 「中途終了発話文」

用言の「終止形」以外の活用形、または用言に含まれない品詞によって終了する発話文。

(⇒3.1.3.1.参照)

なお、2.1.2.でも述べたことがあるが、本稿では「完全文」、「中途終了発話文」、「終助詞終了発話文」/「丁寧化のマーカ―終了発話文」はもちろん、「フィラー」についても、相互作用における1つの意志的な「発話」とであると考え、ターンを構成する発話とみる立場をとることをここで改めて確認しておく。

以上では、日本語と朝鮮語の談話を分析するにあたって前提となる、品詞や、用言の活用形、「発話形式」に対する本稿の基本的な考え方を述べてきた。次項では、「発話形式」の中でも、本稿で特に注目する「中途終了発話文」に関わる諸理論を概観することにする。

3.1.2. 「中途終了発話文」に関する先行研究

続いて、本項では、「発話形式」の中でも、文法と談話文法の差異を形成し、本稿の主たる分析対象となる「中途終了発話文」について、その先行研究を概観していく。「中途終了発話文」については、1990年代以降、談話分析の普及とともにそれを分析する論考も次第に増加してきた。ただし、同形式

⁴⁰ 3.1.3.2.2.および、脚注 56 においても再度、述べるが、朝鮮語の「丁寧化のマーカ―」(野間(2006))は、文を構成する様々な要素、品詞に接続しうるもので、少なくとも形態論的には、日本語の「終助詞」的なものであるとみることができる。こうしたことから、本稿における「発話形式」の分類では、「丁寧化のマーカ―終了発話文」を、とりあえず、日本語の「終助詞終了発話文」と並行的なものであるとみておくことにする。

⁴¹ 石川(2010)によると、「フィラー」(filler)という術語が一般的になったのは、1990年代以降のことで、1980年代までは「言いよどみ」のほか、「遊び言葉」、「場つなぎ言葉」などとよばれたという。なお、同論文では、相手の事情を考慮して表出されるものを「あいづち」、発話者自身の都合によって表出されるものを「フィラー」として扱っているが、中村(2007)でも指摘しているように「あいづち」と「フィラー」の境界は曖昧な部分が少なくない。そこで、発話形式の分類を行なう本項では、これらについて生成要因による分類を行なうことはせずに、「フィラー」という項目に統一しておくことにする。なお、金珍娥(2010)で「文法的な対立項」を持つとされる「そうですね/そうだね」や、「그래요/그래」(そうです/そうだ)などの類については、「述部」を持つ発話であるという理由から、発話形式の分類においては、「完全文」として分類することにする。

は、研究者によって様々な名称が用いられるばかりか、その規定範囲も異なる場合があるので、注意を要する。そこで、本項では、このような点をふまえ、既存の日本語と朝鮮語の研究において、本稿で「中途終了発話文」とよぶものに類似する形式が、どのように定義、記述されてきたかをみていくことにする。主要な先行研究における「中途終了発話文」に相当する発話形式の記述は、以下のようになる(表中の言語欄の「日」は日本語を分析対象とした研究、「日朝」は日本語と朝鮮語の対照言語学研究、「朝」は朝鮮語を分析対象とした研究であることを示す)：

【表 3-3】主要先行研究における「中途終了発話文」に相当する発話形式に関する記述

論文名	言語	分析対象	用語	定義・記述
高橋 (1993)	日	小説	はなしことばにおける、省略によってうまれた、のべかけかたの諸形式	「主文の省略や述語の省略など、もともとの、のべかけかたの省略された形式」
宇佐美 (1995)	日	談話	中途終了型発話	「述部が省略された場合や、複文の場合、従属節のみで主節が省略されたりする発話、すなわち、最後まで言い切っていない発話」
陳文敏 (2000)	日	談話	「中途終了型」発話	「文法的には言い切っておらず不完全な発話であるが、情報伝達においては不完全なところは何もなく、言い終わっているもの」
杉山 (2001)	日	対談番組	中途終了型発話	※陳文敏（2000）の分類を援用。
金珍娥 (2002)	日朝	談話	中途終了発話文	「『非意志的中途終了発話文』（同時発話や割り込み発話による中途終了）と、『意志的中途終了発話文』（言いよどみによる中途終了や、自分の意志で中止する中途終了、述部のない発話、従属節の述部で終了している発話文）に分類される」
小田 (2002)	日	学習者談話	中途終了型発話	「表面上では未完結あるいは不完全であっても、発話レベル、つまり話者の意図としては言い終わっているもの」
曹英南 (2004)	日朝	映画字幕、電話会話	言いさし表現	「1. 形の上で、文を最後まで言わずに途中で終わっている発話である。2. 相手の割り込みではなく、話者の意志により完結している発話である」
元智恩 (2005)	日朝	質問紙	中途終了文（断りの場面で使用されるもの）	「依頼などを断る際に、『不可』を表す主節まで言わずに、残りは相手の判断に委ねる表現」
강은숙 (2005)	朝	談話	中途終了型発話 (중도 종료형 발화)	「名詞形、単語や連結語尾で中途終了する発話」（筆者訳）
佐藤 (2005)	日朝	ドラマ台本	中途終了型発話	※宇佐美（1995）の定義、陳文敏（2000）の分類を援用。朝鮮語も日本語に従って分類。
李恩美 (2008)	日	談話	中途終了型発話	※宇佐美(1995)などの定義を援用。
손옥현, 김영주 (2009)	朝	ドラマ台本	終結語尾化された連結語尾 (종결어미화된 연결어미)	「1つめは、文を終結する機能を担い、文の終結の抑揚を持つこと。2つめは、連結語尾であるときは異なった意味を持つこと。3つめは、文末において平叙形、感嘆形、疑問形などの多様な叙法で実現すること。4つめは、待遇表示の実現、特に「-요」との結合が可能であること」（筆者訳）

高橋(1993)は、本稿でいう「中途終了発話文」と似た概念を持つ形式を巨視的に整理した先駆的な論考ある。この論文では、その形式を「はなしことばにおける、省略によってうまれた、のべかけかたの諸形式」と称し、それを「主文の省略や述語の省略など、もともと、のべかけかたの省略された形式」(p.20)と定義している。同論文によると、当該形式は、①接続助辞、②条件形、③第二中止形(「-テ」)、④引用助辞で終わるものが全体の出現の9割を占めており、その他にも⑤疑問詞、⑥陳述副詞や、⑦「～ように」で終わる文などがあるとしている。ただし、この論考では、言語資料として小説の中に現れる話しことば(書かれた話しことば)を用いているということや、この分類の中の②条件形や③第二中止形は、①接続助辞の下位分類にあたるものであるということなど、多少の問題があることは否めない。

宇佐美(1995)は、談話における敬語の使用から不使用、あるいはその逆への移行といったスピーチレベルシフトに注目し、Brown and Levinson(1987)の「ポライトネス理論」(politeness theory)⁴²を用いて、そのメカニズムの解明を試みたものである。この論文では、本稿で「中途終了発話文」とよぶ発話形式を「中途終了型発話」とよんでおり、「述部が省略された場合や、複文の場合、従属説のみで主節が省略されたりする発話、すなわち、最後まで言い切っていない発話」(p.35)と定義している。同論文では、「中途終了型発話」の機能は、「最後まではっきり言い切らないことによって、明言を避け、発話を緩和したり、相手に発話の機会を与える」(p.35)とあるとしており、尊敬語・謙譲語(+レベル)、丁寧体(0レベル)から常体(-レベル)へとシフトが行なわれる5つの要因⁴³のうちの1つとして位置付けている。また、「英語を教えるわけにもいかないし…」のような「中途終了型発話」は、「英語を教えるわけにもいきませんし…」という形式とスピーチレベルの対立(常体と丁寧体の対立)を持っており、どちらを用いるかは話者が場面ごとに選択し、決定していると指摘している。

陳文敏(2000)は、日本語母語話者同士の談話にみられる「中途終了型」発話の表現形式、および、その生起理由について論じたものである。この論文では「中途終了発話文」を「中途終了型」発話」とよんでおり、それを「文法的には言い切っておらず不完全な発話であるが、情報伝達においては不完全なところは何もなく、言い終わっているもの」(p.129)と定義し、以下のような類型を立てている：

(1) 複文の主節が省略されている発話

- ①「テ形」表現
- ②「接続助詞」表現(・シ、・ノデ等)
- ③「条件形」表現(・ト、・バ等)

(2) 述部が省略されている発話

- ①「引用」表現(・ト、・って)

⁴² ここでいう「ポライト」(polite)とは、語用論の枠組みの中での概念であり、「円滑な人間関係を確立・維持するための言語行動」(宇佐美 2003)という意味である。この理論は、Goffman(1967)の「face」という概念にその基礎をおいており、相互作用の中で、発話者は対話者の、個人から承認された望ましい自己像を維持することへの欲求であるポジティブ・フェイス(positive face)と個人の領域を維持し行動の自由を保つことへの欲求であるネガティブ・フェイス(negative face)を維持しようと努力する、というものである。

⁴³ ①心理的距離の短縮、②相手の-レベルに合わせる時、③ひとりごと、自問をする時、④確認のための質問、或いは、答えをする時、⑤中途終了型発話、の5つ。

- ②「トピック呈出」表現(-ハ、-って)
- ③「例示」表現(-とか)
- ④ その他(-っていう、-という、-(名詞)の等)

(3)形式は「ダ体」発話だが、音声的には「ダ体」と認められない発話⁴⁴

(p.130～137 を整理)

この中で、(3)のように、分類にあたって音声的な特徴を導入したことは、言語事実に対するより精密な分析が可能になるという点で、注目に値するといえるだろう。ただし、(1)「複文の主節が省略されている発話」については、同じ「接続助詞」であるにも関わらず、①「テ形」表現、②「接続助詞」表現、③「条件形」表現の3種を認めており、形態、品詞、(意味)機能という3つの基準が混在した項目が立てられている。さらに、それぞれの用例の検討に際しては、計量化を行っていないため、分析項目の設定が恣意的になりがちで、体系だった分析が行ないにくくなっているという問題点もある。

杉山(2001)は、陳文敏(2000)における「「中途終了型」発話」の分類が妥当なものであるかを対談番組からとった資料をもとに検証し、その生起理由や、ストラテジーとしての使用効果について言及したものである。この論文では、「中途終了発話文」を「中途終了型発話」とよんでおり、名称(表記)こそ陳文敏(2000)におけるものとは異なっているが、その下位分類に関しては、陳の説を踏襲したものとなっている。

金珍娥(2002)は、日本語と朝鮮語の談話におけるストラテジー(strategy)としてのスピーチレベルシフトを分析したものである。この論文では、本稿と同じ「中途終了発話文」という名称を用いており、それを相手によって終了させられる「非意志的中途終了発話文」と話者が自らの意志で終了する「意志的中途終了発話文」に分類し、具体的には、前者には「同時発話」⁴⁵(simultaneous speech)や「割り込み発話による中途終了」が、後者には「言いよどみによる中途終了」や、「自分の意志で中止する中途終了」、「述部のない発話」、「従属文の述部で終了している発話文」が含まれるとしている。しかし、ここで、「言いよどみによる中途終了」、「自分の意志で中止する中途終了」は生起要因による分類であり、「述部のない発話」、「従属文の述部で終了している発話文」は統語論、形態論的な分類であるため、同じレベルで扱うことにはやや無理がある。また、「意志」、「非意志」という言葉の使用にあたって、何を「意

⁴⁴ 同論文には、この類型に関して、「こうした発話は、形式上は「ダ体」発話に分類されるものである。しかし、発話の末尾が上昇イントネーションを伴わず、しかも伸ばしてゆっくり話されるので、言い切っていないと判断し、「中途終了型」発話と捉える」(p.136)という記述があり、以下のような例をあげている(文字化の方法は、陳文敏(2000)による。ただし、下線は筆者による)：

⇒JF2: そうすると、その目指していらっしゃる就職というのは、病院+...
JF1: ええ、一応、大学なんですけど[うん]。

(p.136 例 20[会話4])

⁴⁵ 「同時発話」は、一般的に、「重複」(overlap)と「割り込み」(interruption)に分けられることが多いが、金珍娥(2002)では、「割り込み発話」を同時発話の下位分類として位置づけていない。なお、「重複」と「割り込み」の区別は、研究者によって異なるため、注意を要する。本稿では、Ferguson(1977)に従って、統語的な切れ目などの発話交替箇所(Transition Relevance Place: TRP)で同時発話が起こったものを「重複」、発話交替箇所を無視して、同時発話が起こったものを「割り込み」とすることにする。

志」とみるかについての言及がされていないため、その意味がわかりにくいという問題もある⁴⁶。なお、この論文では、「述部のない発話」は朝鮮語よりも日本語の方で多く現れるとしたうえで、それは相手と上下関係を作ることを避け、親しげに振舞うことが可能になるためではないか、と指摘している⁴⁷。

小田(2002)は、日本語母語話者と、朝鮮語を母語とする中上級の日本語学習者の談話資料をもとに、「明日は忙しいので…」や、「明日は晴れると思うんだけど…」といった「接続助詞」で終わる発話文の現れ方と、それらの中級から上級にかけての学習者の習得推移を論じたものである。この論文では、本稿でいう「中途終了発話文」を「中途終了型発話」とよんでおり、それを「表面上では未完結あるいは不完全であっても、発話レベル、つまり話者の意図としては言い終わっているもの」(p.15)と定義している。また、「接続助詞で終わる中途終了型発話」については、「1)話し手がターンを奪われずに、2)話者交替が起こっている直前、あるいは非言語情報や意味によって区切れが明らかであり、3)その発話末が接続助詞で終わっている発話」(p.16)と定義している。同論文では、日本語母語話者の発話には、「-テ」が他の形式より圧倒的に多く現れており、それに対し、韓国人中級学習者の発話には「-テ」、「-カラ」、「-シ」、「-ケド」が比較的バランス良く現れ、上級学習者の発話には「-ケド」、「-テ」がより多く現れるとの報告がされている。ただし、これは「日本語教育」という立場からの論考であるため、中間言語(interlanguage)話者の発話形式の分析と、それらの学習者のレベルごとの使用推移に主な論点がおかれているだけではなく、分析の対象も「接続助詞」で終わる形式に限定しているため、日本語や朝鮮語の談話における「中途終了発話文」の全体像を示したものではない。

曹英南(2004)は、日本語と朝鮮語の「言いさし表現」について分析をしたもので、分析形式を「形の上で、文を最後まで言わずに途中で終わっている発話」、「相手の割り込みではなく、話者の意志により完結している発話」(ともに p.26)と定義している。さらに「言いさし表現」は、述部の有無により「述部あり」、「述部なし」に分けられるとしており、例えば、以下のような例をあげている：

(1)「述部あり」:述部が存在する発話

「ーと思ひまして」、「ーこれ、よかつたら」、「ー会つてもいいわつて」
「연락 못 해서」(連絡できなくて)、「가라니까」(行けつてば)、
「끝내고 나면」(終わつてみたら)

(2)「述部なし」:述部が存在しない発話

「あなたから」「じゃ」「もう一度」
「집에」(家に)、「그럼」(じゃあ)、「별로」(別に)

⁴⁶ 「話す」という行為を「静」から「動」への変化という意味で有標(marked)な行為であると考えれば、談話に現れる発話文はすべて「意志的」なものであるということができよう。ただし、必ずしもこのような考えのみが存在するわけではない。例えば、野間(2007)には、「2人の対話にあっては、2人とも話しているのが default である」(p.34)という記述があるが、これは、実際に言語が行なわれる場(これを河野(1977)では「言語的場」、野間(2007)では「言語場」(linguistic field)などとよんでいる)において、相互作用への参加者は皆、言語的な表現と非言語的な表現により常に語り続けている、という考え方である。このように何を「意志」とするかという問題に対しては、様々な解釈が可能であるが、本稿では、「音声」により実現された言語表現のまとまりとしての「談話」を分析対象とするため、とりあえず、そこにみられる「発話文」については、意志的な要因により生成されたものであるとの立場をとることとする。

⁴⁷ この論文の分析対象は、初対面の2者間談話であった。

このように述部の有無に着目することは、両言語の発話文に関して記述をするうえで重要な観点であるといえるが、同論文では、各項目においてどのような形式が現れるかについては、詳細な記述がなく、体系的な分析がされていない。また、談話分析の枠組みにおいて対照研究を行なっているが、分析対象となる言語資料には、「書きことば」としての映画字幕(翻訳)や、採録条件が統制されていない電話会話が使用されており、自然談話の分析を行なっていないという点も考慮の余地がある。

元智恩(2005)は、ポライトネスの観点から日本語と朝鮮語の断りの場面における言語使用を分析したもので、理由・原因を表す日本語の接続助詞「-テ」、「-カラ」、「-ノデ」と、朝鮮語の接続形式「-아/어서」(・て、・ので)の使用状況を、教官に対する場面と、友人に対する場面における比較の中で分析している。この論文では、本稿で「中途終了発話文」とよぶものを「中途終了文」とよんでおり、断りの場面で使用されるものについて「依頼などを断る際に、「不可」を表す主節まで言わずに、残りは相手の判断に委ねる表現」(p.47)と定義している。なお、同論文は、接続助詞や接続形式の中でも、特に理由を表す形式で終わる発話文に限定して分析したものであるため、他の形式で終わる「中途終了文」に関する記述はない。また、分析対象には、被験者に母語に対する内省を問うた質問紙調査によるデータが使用されており、やはり実際の言語使用を記述したものではない。

강은숙(2005)は、朝鮮語母語話者のスピーチレベルの変動について、主に社会的関係と親密度という観点から分析したものである。この論文では、スピーチレベルが、「비존대 등급」(非尊待等級)に変動する際の要因のうちの1つとして「中途終了型発話」(중도 종료형 발화)をあげており、それを「名詞形、単語や連結語尾で中途終了する発話」(p.21)と定義している。同論文では、「中途終了型発話」は、終止形語尾で終わる発話と同様に、統辞的に完結した発話形態であり、その発話権の交替には、(完結)抑揚が重要な役割を果たすと述べている。なお、この論文では、スピーチレベルの変動についての分析を行なっているが、計量化が行なわれていないため、社会的関係や親密度といった要因によって、発話がどのような出現の差異をみせるかについては、記述がされていない。

佐藤(2005)は、日本語と朝鮮語の「中途終了型発話」をスピーチレベルシフトとの関係から論じたものである。この論文では、名称、定義は宇佐美(1995)のものを、下位分類は基本的には陳文敏(2000)のものを援用しており、朝鮮語についても日本語に準じて分類を行なっている。なお、同論文は、分析対象として、日本語のドラマとその朝鮮語への翻訳を用いており、自然談話に関する分析は行なっていない。

李恩美(2008)は、日本語の談話に現れる「中途終了型発話」の形式と機能について分析したものである。この論文では、名称、定義は、主に宇佐美(1995)の記述に従うとしたうえで、下位分類については、以下のような類型があると述べている:

1. 接続表現(C:Conjunction)

「～て/～し/～ので」などの接続助詞(連結語尾)で言い終わる発話

2. 引用表現(Q:Quotation)

「〜と/〜って」などで言い終わるもので、「思う、考える、言う、話す」などの述部が省略されていると判断される発話

3. 例示表現 (E: Example)

「〜とか」などで言い終わるもので、「ある、言う」などの述部が省略されていると判断される発話

4. 名詞表現 (N: Noun)

「名詞(句)+(格/取り立て助詞)」で言い終わる発話

5. 副詞表現 (A: Adverb)

「副詞」で言い終わる発話

6. その他 (O: Others)

上記のいずれにも分類できない発話

(p.131)

同論文では、上記のように大きく6つの類型に分けているが、各類型は、品詞や統語論的特徴によりまとめられた1つの集合体となっている。そのため、例えば「接続表現」であれば、具体的にどのような接続助詞が、どの程度現れているかについての記述はなく、各類型を構成する具体的項目について、詳細な分析は行なわれていない。

손옥현, 김영주 (2009) は、朝鮮語のドラマの台本やコーパス資料を分析し、発話文末に現れる「終結語尾化された連結語尾」(중결어미화된 연결어미)⁴⁸の使用状況について分析したものである。この論文では、当形式の認定条件を「1つめは、文を終結する機能を担い、文の終結の抑揚を持つこと。2つめは、連結語尾であるときとは異なった意味を持つこと。3つめは、文末において平叙形、感嘆形、疑問形などの多様な叙法で実現すること。4つめは、待遇表示の実現、特に「-요」との結合が可能であること」(P.29)と定めており、発話文末でもっとも多く使用される接続形は、「-고」(・て)で、それに「-는데」(・けど)、「-다고」(・と(引用))が続くとの調査結果を示している。ただし、同論文は、本来、文終止機能を持たない形式の中でも、用言の「接続形」のみを扱ったものであり、「中途終了発話文」全般をみたものではない⁴⁹。

以上、既存の主要研究における「中途終了発話文」(相当の発話形式)に関する記述を概観した。上記の諸研究は、いずれも日本語を対象としたもの、あるいは、日本語と朝鮮語の対照研究の枠組みにおけるものがほとんどで、朝鮮語の談話に現れる「中途終了発話文」全般を単独で扱った論考は、極めて少ない状況にある。また、それだけではなく、上記の一連の研究というものも、「中途終了発話文」をポライトネスや、スピーチレベルシフト、ストラテジーといった主に語用論の枠組みの中で扱ったものがほとんどで、そもそも分析形式に対する厳密な定義、分類がなされていないものも多かった。さらに、話され

⁴⁸ ここでいう「連結語尾」は、本稿における「接続形語尾」をさす。

⁴⁹ この他にも、조민하(2011)では、発話文末に現れる連結語尾(接続形)の音声的特徴について論じている。なお、コーパス資料やテレビ番組を分析対象として、文と文を接続する連結語尾(接続形)の出現様相を調べた、이은경(1998, 1999)、전영옥, 남길임(2005)によると、文中に現れる同活用形の中で、もっとも多い出現がみられたものも、やはり「-고」(・て)であったという。

た言葉としての「談話」を扱っていない研究や、話者の属性、関係による発話形式の計量化を行っていない研究も多く、談話において、どのような発話文が、どのような発話者によって、どの程度現れているかについて体系的な記述が行ないにくくなっていることも確認された。「中途終了発話文」を談話レベルの中で分析することの重要性は言うまでもないことであるが、宇佐美(1995)や金珍娥(2002)でも述べられているように、この発話形式の認定・分類の仕方は、研究者の主観に左右される部分が少なくない。我々は、まず「中途終了発話文」について、精密な定義、基準を与えたうえで、「談話」という言語事実に向き合っていく必要があるといえるだろう。

3.1.3. 本稿における「中途終了発話文」の定義と出現様相

本項では、前項までみてきた理論的前提や、先行研究における記述をふまえ、本稿における「中途終了発話文」の定義を示すとともに、類似概念との関係、出現様相(生起比率、下位分類)についてみることにする。

3.1.3.1. 「中途終了発話文」の定義

これまでに述べてきた先行研究における記述をふまえたうえで、本稿では「中途終了発話文」⁵⁰の定義を<形態・統語論>、<話者交替と音声>、<発話意図伝達>という観点から、以下のように定めることにする。このように、文末形式としての「形態・統語論的観点」にとどまらず、多角的な観点から定義(認定基準)を設定することにより、より精密な同定が可能になるものと期待される：

【本稿における「中途終了発話文」の定義】

(1) <形態・統語論>

「終止形語尾」によって統合される主節の述部が、文の末尾に現れていない発話文。すなわち、用言の「終止形」以外の活用形、または用言に含まれない品詞によって終了する発話文。倒置や付け足し、くり返しなどにより、結果として発話文の末尾に終止形語尾が現れていないものも含む。

(2) <話者交替と音声>

話者の交替が起こる直前に現れる場合も、そうでない場合もあるが、非言語情報や音声、意味によって区切りが明らかである発話文⁵¹。

(3) <発話意図伝達>

発話上には現れない言語形式、および、その発話者の意図が対話者に推測可能な場合もあれば、そうでない場合もあるが、発話者の主体的選択の結果として終了した発話文。

定義(1)では、倒置や付け足し、くり返しなどの結果、実現形態としての発話文の末尾に「終止形語尾」によって統合される主節の述部が現れていない場合は、当該発話文中に主節の述語が存在していたとし

⁵⁰ なお、これまでも用いてきたが、本稿で「中途終了発話文」という名称を採用するのは、1.2.1.で述べたように、本稿では、分析の基本単位を「発話文」に定めているためである。

⁵¹ 2.1.2.でも述べたように、本稿では、発話の後、2秒以上の「間」(ポーズ)が確認される場合に独立した「発話文」として認定を行なっている。

でも「中途終了発話文」として認定するということを示しているが、これは、本稿では、中途終了発話文の同定にあたって、発話文を形態・統語論的観点からみる際には、あくまで実現形態としての「文末形式」そのものの形態・統語論特徴に着目しようとするによるものである⁵²。

上記のような定義をふまえたうえで、以下に具体的な例(作例)を示す。A、Bは発話者を表し、その前に→で示されているものが、「中途終了発話文」である：

[例 3-1] (作例)

→A:好きなの、本当に…？。 [倒置]

B:うん。

→A:どこが…？。

B:ど、どこがってさあ。 ※終助詞終了発話文

[例 3-2] (作例)

→A:그거 아니야, 그거…？. [倒置]

B:이건 아닌데요. ※丁寧化のマーカ―終了発話文

→A:그럼, 그건 뭔데…？.

(日本語訳)

→A:それじゃないの、それ…？

B:これは違いますよ。

→A:じゃあ、それは何…？

3.1.3.2. 類似概念との関係

本稿で扱う「中途終了発話文」と概念が似ているものに、「言いさし文」や「終助詞終了発話文／丁寧化のマーカ―終了発話文」、「非述語文」などがあるが、本稿では、これらは基本的に「中途終了発話文」とは異なるものとして扱う。以下では、既存の研究における、それぞれの概念に関する論考を概観しながら、本稿で扱う「中途終了発話文」との相違について述べることにする。

3.1.3.2.1. 「言いさし文」との関係

日本語の接続形(接続助詞)で言いさす表現に関しては、それぞれ立場は異なるものの、国立国語

⁵² 談話全体における「倒置」による中途終了発話文の出現をみると、日本語では 271 例(18.3%)、朝鮮語では 191 例(16.9%)と、両言語でほぼ同じ生起比率を示すことが確認された。また、日本語における「-テ」、「-ケド」、「-シ」や、朝鮮語における「-(으)ㄴ데/는데/던데」(・けど)などの接続形語尾(接続助詞)の中には、文法化(grammaticalization)により、一種の文終止マーカ―として機能しているものもある。しかし、本稿では、こうした倒置、または、文法化した発話形式と「中途終了発話文」の関係については、とりあえず扱わないことにし、あくまで発話文末が上記の形式により終了しているものを「中途終了発話文」として認定し、分析することにする。なお、日本語の接続助詞で終わる発話文に関しては、この後、3.1.3.2.1.で「言いさし文」について取り上げる際に再びみることになる。

研究所(1951)、白川(1990、1995、1996)、益岡、田窪(1992)など、古くから様々な議論が行なわれてきた⁵³。ここでは、これらの一連の論文の中から白川(1990)における論考を取り上げ、具体例とともにみながら、本稿において分析対象とする「中途終了発話文」との関係性を述べることにする。

白川(1990)は「テ形」で言いさす文が、刊行されている漫画やシナリオにおいてどのように使用されているかを整理、分析したものである。まず、この論文では、一般的な「言いさし文」と一線を画する「省略された文」には、復元可能性(recoverability)の存在が前提になるとして、以下の様な例をあげている([例 3-3]から[例 3-6]の用例中の下線は筆者による。なお、同論文では、「 φ 」を、そこに言語表現が現れないことを示す記号として使用している)：

[例 3-3]

A:どこ行くの？

B:ちょっと、そこまで φ 。

(p.47(49))

[例 3-4]

しばらく外に出ていていただけませんか。床にワックス掛けしますので φ 。

(p.47(51))

白川によると、上記の例において、 φ の箇所には、一義的に1つの語を「復元」⁵⁴することができるため、この様な場合には「言いさし」ではなく、「省略」と考えなければならないとしている。

これに対し、「テ形」による「言いさし文」には、①事情の説明、②感嘆、③陳謝、④感謝、⑤非難を表す5つの用法を見出すことができ、これらは一見するとあたかも「終助詞的」にみえるが、実際にはそうではなく、単語や文脈、イントネーションという手がかりがあって初めて意味が成立する「文脈依存的」なものであるとしている：

[例 3-5]

栗 田 :海原雄山が食べに来たですって！？

山 岡 :またイヤミを言ったのか！

カレー屋の妻:(感激醒めやらぬ顔つきで)その逆です、主人のポークカレーをととてもほめてくださっ
て……。

(p.41(21))

⁵³ たとえば、「-ケド」で終わる文について、国立国語研究所(1951)は「終助詞(的なもの)」であるとみているのに対して、益岡、田窪(1992)は「後続されるべき主節が省略されたもの」、白川(1996)は「省略でもなければ、言い残しがあるわけでもない言い終わりの文」であるとしている。

⁵⁴ 「復元」というと、元の(発話)文というものがあり、それを前提として実際の発話文に現れていない部分を句や節、文レベルで精密に構築することを意味することになる。例えば、[例 3-3]の場合は、意味レベルまでは発話者の意図を構築することはできても、精密に「復元」するのは難しいだろう。そのため、ここは「復元」というよりも、「意味的構築」くらいの言葉に置き換えた方がいいかもしれない。

下線部分は「テ形」で終わる表現になっているが、後に続く「……」の部分には何が入るかは文脈からは推し量ることができない。つまり、このような場合は(白川式に言う)現れていない部分を一義的に復元することができない、ということになる。よって、まず、このような発話は、いわゆる「省略」とみなすことはできないわけだ。さらに、同論文では、上述のとおり、単語や、文脈、イントネーションという手がかりに支えられて、①～⑤の意味を持つものを「言いさし文」としているが、ここでは上記分類のうち②「感嘆」を表すものであると解釈ができる。よって、このような発話文こそが「言いさし文」として認定される資格を持つことになる。

さらに、以下のような「テ形」で終わる発話文もあるとしている：

[例 3-6]

刑 事 : いい加減に白状しないか？ A子ちゃんに声を掛けて、それでどうした？

被疑者 : A子ちゃんに、「ドライブに行かないか？」と誘って……。

刑 事 : 誘って、それで、どうした？

被疑者 : 無下に断られて、カッとなって殺しました。

(p.40(14))

この場合には、「……」の部分の言外の意味は、復元(構築)はおろか、推測すら不可能である。よって、こういった発話文は、同論文においては、「省略された文」でないことはもちろん、「言いさし文」としての認定もせずに、その分析対象から除外している。

上でみた白川説では、「省略された文」にしても「言いさし文」にしても、それらを決定付ける重要な要素のうちの1つに、「出現部分と非出現部分の意味関係」があるということができただろう。しかし、意味による分類は、研究者による恣意的なものになりやすいだけでなく、本稿では、発話文の「形式」を分析項目の1つとして取り入れているため、本稿における「中途終了発話文」の認定にあたっては、最も客観的な判断が可能な形態的な基準を最優先させることにし、意味や復元の可能性といったことは一次的には問題にしないことにする。つまり、先にみた例で言うならば、[例 3-3]、[例 3-4]、[例 3-5]のような例だけではなく、[例 3-6]の「誘って……」のような例も、本稿では「中途終了発話文」として認定され、分析の対象となることになる⁵⁵。

3.1.3.2.2.「終助詞終了発話文／丁寧化のマーカ―終了発話文」との関係

本稿で「中途終了発話文」と認定する発話形式に、日本語の「終助詞」(「-よ」、「-ね」、「-さ」など)や、朝鮮語の「丁寧化のマーカ―」(「-(으)요」)、野間(2006))⁵⁶がついて終わる発話文は、終止形語尾が

⁵⁵ 参考までに、上記の例は、後に述べる本稿での(日本語における)中途終了発話文の認定基準に従うと、[例 3-3]は「名詞＋助詞」、[例 3-4]は「-ノデ」、[例 3-5]と[例 3-6]は「-テ」で終わる「中途終了発話文」として認定されることになる。

⁵⁶ 「丁寧化のマーカ―」(「-(으)요」)は、野間(2006)でも述べられているように、文中において終結部や非終結部など、様々な位置に現れ、応答、提示、終止、中継ぎの意を表すものである。これは、体言のみならず、助詞や接続形、終

文末に現れないため「完全文」とみなせないことはもちろん、スピーチレベルにおいて「中途終了発話文」と同等の発話効果を持つともみなしにくいいため、本稿ではそれぞれ「終助詞終了発話文／丁寧化のマーカ―終了発話文」として別に扱う⁵⁷。これらの発話形式は、本稿における主たる分析対象ではないが、談話において、いかなる出現の特徴を示すのかについては、注目しておき、3.1.3.3.1.、4.2.1.でみることにする。

3.1.3.2.3.「非述語文」との関係

金珍娥(2006)は、日本語と朝鮮語の文末形式を扱った論考で、文末が述語で統合される文を「述語文」(predicate sentence)、文末が述語で統合されていない文を「非述語文」(non-predicate sentence)として、以下のような例をあげている：

(1)「述語文」

「何を踊ってたんですか」、「最近ちょっとお休みしちゃってるみたいですけど」
「이탈리아어 막 까먹지 않아요?」(イタリア語、すぐに忘れちゃいませんか?)、
「어학연수는 기본이 돼 버려 가지구」(語学留学は基本になってしまつて)

(2)「非述語文」

「今は別に」、「専門知識とか」、「ね」
「이름 읽는 거」(名前読むこと)

(p.82-83、訳は筆者による)

上記のような例をみると、述語文は、文末に終止形語尾が現れるものだけでなく、接続形(接続助詞)で終わるものなど、述語が現れているものについては幅広く認定していることがわかる。また、非述語文の例には、本稿で「中途終了発話文」と認定するような発話形式の他に「ね」といった「終助詞」が単独で現れる例もあげられている。

このように、文の要である述語の有無が、両言語においていかなる出現差を示すかをみることは、「発話文」の特徴の本質を記述するうえで、1つの有効な方法になりえるものではあるが、本稿の研究の主たる目的は、あくまで「形式」としての「終止形語尾が現れない発話」の談話における出現とその「機能」をみることにあつたため、本稿では、「中途終了発話文」の認定にあたっては、「述語の有無」というよりは、発話文末の形態に着目し、分析を行なうことにする。すなわち、本稿では、文末に「述語」が現れる場合

止形にも付きうるものであることから、形態論的には、日本語の終助詞に類似しているといえる。例えば、用言の接続形に結合した場合の例としては、「가고」(行つて)に対する「가고요」(行つてです)、「하는데」(しますけれど)に対する「하는데요」(しますけれどです)などが、文の末尾に現れる場合があるが、これらは朝鮮語の用言活用のパラダイムに当てはめて考えれば、それぞれ前者は「訓体」(非敬意体)、後者は「해례体」(敬意体)の語尾として扱うことも可能である。もし、これらを文末における語尾として扱うのであれば、この形式で終わる発話文は、完全文として認定されることになるが、実際には、接続形だけでなく、終止形の後にも付きうるなど、単純に語尾と同類のものであるとは考えにくい。そのため、本稿では、中途終了発話文に「-(이)요」(・です)がついた発話文については、「丁寧化のマーカ―終了発話文」とし、1つの独立した「発話形式」として扱うことにする。

⁵⁷ 完全文に終助詞、丁寧化のマーカ―が付加された発話文は、統語論的には、文末に述語が現れているとみられるため、完全文に分類しておくことにする。

であっても、それが「終止形語尾」を伴うのか、「終止形語尾以外」を伴うのか、という観点に着目し、分類を行なうことになる。

3.1.3.3.「発話形式」による発話文の出現様相

ここでは、3.1.1.3.でみた「発話形式」の分類の中でも「中途終了発話文」が、いかなる出現様相を示すのかについて、実際のデータ(生起比率)をみながら分析することにする。その際に、他の発話形式との出現の差異はもちろん、談話参加者の属性(性別、年代)、対話者との関係(親疎、年齢差)による出現の差異にも注目することにする。

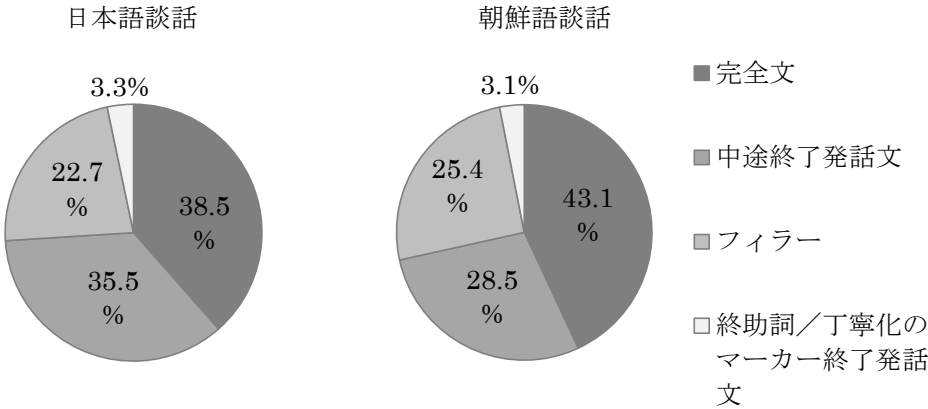
3.1.3.3.1.「発話形式」とその出現様相

まずは、3.1.1.3.でみた「発話形式」が、本稿で分析対象とする日本語と朝鮮語の談話全体(各 21 談話)においていかなる出現を示すかをみてみることにしよう。談話全体における発話形式ごとの発話文の出現様相は、以下のようになった：

【表 3-4】発話形式ごとの発話文の出現数と生起比率

		日本語	朝鮮語
非中途 終了 発話文	完全文	1,603 (38.5%)	1,705 (43.1%)
	終助詞／マーカー	136 (3.3%)	122 (3.1%)
	フィラー	946 (22.7%)	1,005 (25.4%)
中途終了発話文		1,477 (35.5%)	1,127 (28.5%)
計		4,162 (100 %)	3,959 (100 %)

各セル内：発話文の出現数(生起比率)



表をみると、談話全体における4つの発話形式は、両言語ともに、「完全文」→「中途終了発話文」→「フィラー」→「終助詞／丁寧化のマーカー終了発話文」という同様の出現順を示していることがわかる。ただし、具体的項目について両言語を比較してみると、「完全文」の生起比率は、朝鮮語で高く、日本語で低いこと、「中途終了発話文」の生起比率は、日本語で高く、朝鮮語で低いことが確認され、カイ二

乗検定による検定の結果でも、これらの項目には、0.1%水準の有意差が認められた($p<0.001$)。また、単独のターンとしての「フィラー」は、朝鮮語談話において若干、高い生起比率を示しており⁵⁸、1%水準の有意差が認められること($p<0.01$)、「終助詞／丁寧化のマーカ―終了発話文」は、日本語と朝鮮語でほぼ同程度の生起比率をみせることも確認された⁵⁹。

次に、上掲の表でみた発話形式による発話文の出現様相を親疎関係、性別、年代、年齢の上下差という観点から整理し、それぞれの出現状況をみていくことにする。

3.1.3.3.1.1. 親疎関係による考察

まず、親疎関係による出現差についてみることにする。親疎関係による発話形式ごとの発話文の出現様相は、以下のとおりである：

【表 3-5】親疎関係による発話形式ごとの発話文の出現数と生起比率

日本語談話			
		初対面 (24話者)	友人 (18話者)
非中途 終了 発話文	完全文	950 (40.1%)	653 (36.5%)
	終助詞終了発話文	42 (1.8%)	94 (5.3%)
	フィラー	549 (23.1%)	397 (22.2%)
中途終了発話文		831 (35.0%)	646 (36.1%)
計		2,372 (100 %)	1,790 (100 %)

朝鮮語談話			
		初対面 (24話者)	友人 (18話者)
非中途 終了 発話文	完全文	963 (39.8%)	742 (48.2%)
	マーカ―終了発話文	122 (5.0%)	0 (0.0%)
	フィラー	739 (30.5%)	266 (17.3%)
中途終了発話文		595 (24.6%)	532 (34.5%)
計		2,419 (100 %)	1,540 (100 %)

⁵⁸ 上掲の表に示したとおり、談話全体における「フィラー」は、朝鮮語で多く現れているが、これは、金志宣(2000)や、金珍娥(2004a)などで報告されている、朝鮮語より日本語で「あいづち発話」が多く現れるという結果とは対照的なものである。本稿では、ターンとしての独立した「フィラー」のみを分析しているという違いはあるものの、後でみるように、発話者の属性などによっては、異なった出現をみせる可能性もあるので、注意する必要がある。

⁵⁹ 【表 2-1】で示したように、本稿における調査では、ベース被験者(JNB、KNB)1名と、その人物に対する対話者1名を設定し、2者による談話を採録している。ただし、このうち、初対面談話のベース被験者については、J1～J3/K1～K3(20代女性)、J4～J6/K4～K6(20代女性)、J7～J9/K7～K9(20代男性)、J10～J12/K10～K12(20代男性)において、同一人物を話者として設定しているため、談話全体における特定話者の参与率が、相対的に高くなるという状況になっている。そのため、ベース被験者は、初対面談話の採録を3回経験することになり(データが破棄になった場合は、それ以上依頼したこともあった)、後半の採録では、本調査における採録方法にある種の「慣れ」が生じてきていた可能性がある。このような理由から、本来は、「ベース被験者」と「ベース被験者以外」の発話の出現状況を比較し、そのデータの信頼性を検証する必要があるが、本調査では、各言語 12 談話と、限られた談話数しか確保されておらず、20代男性、20代女性という属性の話者が、全く同じ属性の対話者と話す談話(比較対象となりうる談話)は、それぞれ最大1サンプルずつしか設定されていない。そこで、本稿では、「慣れ」が発話に与える影響、あるいは、調査における均質性確保の問題については、今後の課題とし、両言語ともにフォローアップアンケートにおいて、録音を「意識した」と答えた被験者がいなかったことに鑑み(また、日本語と朝鮮語において、同一条件下で調査が実施されたことを前提として)、分析を進めていくことにしたい。

各セル内: 発話文の出現数(生起比率)

表をみると、日本語談話では、「完全文」は初対面談話で、「終助詞終了発話文」は、友人同士の談話で高い生起比率をみせていることが確認できる。また、「フィラー」、「中途終了発話文」の出現は、親疎による大きな違いがないことがわかる。一方、朝鮮語談話では、「完全文」、「中途終了発話文」ともに友人同士の談話で、「丁寧化のマーカ―終了発話文」、「フィラー」は、初対面談話で高い生起比率をみせていることがわかる。

なお、両言語の比較では、初対面談話では、「丁寧化のマーカ―終了発話文」、「フィラー」は朝鮮語で、「中途終了発話文」は、日本語で高い生起比率をみせていること、友人同士の談話では、「完全文」は朝鮮語で、「終助詞終了発話文」、「フィラー」は日本語で高い生起比率をみせており、カイ二乗検定の結果でも、それぞれ 0.1%水準の有意差が認められた($p<0.001$)⁶⁰。このように、朝鮮語の初対面談話では、「中途終了発話文」が日本語ほど高い生起比率をみせていないことが確認されたが、これは、同談話において、「フィラー」や、「丁寧化のマーカ―終了発話文」の出現が多いことと関係していると考えられる。

3.1.3.3.1.2. 性別による考察

次に、性別による出現差についてみることにする。性別による発話形式ごとの発話文の出現様相は、以下のとおりである：

【表 3-6】性別による発話形式ごとの発話文の出現数と生起比率

日本語談話

		男性 (21話者)	女性 (21話者)
非中途 終了 発話文	完全文	792 (38.7%)	811 (38.3%)
	終助詞終了発話文	60 (2.9%)	76 (3.6%)
	フィラー	492 (24.1%)	454 (21.4%)
中途終了発話文		700 (34.2%)	777 (36.7%)
計		2,044 (100 %)	2,118 (100 %)

朝鮮語談話

		男性 (21話者)	女性 (21話者)
非中途 終了 発話文	完全文	834 (43.2%)	871 (42.9%)
	マーカ―終了発話文	56 (2.9%)	66 (3.3%)
	フィラー	466 (24.2%)	539 (26.6%)
中途終了発話文		573 (29.7%)	554 (27.3%)
計		1,929 (100 %)	2,030 (100 %)

各セル内: 発話文の出現数(生起比率)

⁶⁰ 本章におけるデータ分析では、基本的にカイ二乗検定の結果において、0.1%水準の有意差が認められた項目を特徴的な差異を持つものとして記述していく。

上掲の表をみると、各言語の内部において、性別による発話形式の差は、大きくは認められないことがわかる。

なお、両言語の比較では、女性談話において「フィラー」が朝鮮語で、「中途終了発話文」が日本語で高い生起比率をみせており、カイ二乗検定の結果も、それぞれ 0.1%水準の有意差を示すことが確認された($p<0.001$)。

3.1.3.3.1.3. 年代による考察

続いて、年代による出現差についてみることにする。年代による発話形式ごとの発話文の出現様相は、以下のとおりである：

【表 3-7】年代⁶¹による発話形式ごとの発話文の出現数と生起比率

日本語談話

		10代（10話者）	20代（10話者）	40代（10話者）
非中途 終了 発話文	完全文	388 (36.3%)	415 (44.0%)	340 (34.6%)
	終助詞終了発話文	26 (2.4%)	38 (4.0%)	49 (5.0%)
	フィラー	248 (23.2%)	204 (21.6%)	270 (27.4%)
中途終了発話文		406 (38.0%)	287 (30.4%)	325 (33.0%)
計		1,068 (100 %)	944 (100 %)	984 (100 %)

朝鮮語談話

		10代（10話者）	20代（10話者）	40代（10話者）
非中途 終了 発話文	完全文	376 (39.9%)	379 (42.7%)	368 (42.4%)
	マーカー終了発話文	21 (2.2%)	21 (2.4%)	9 (1.0%)
	フィラー	244 (25.9%)	158 (17.8%)	268 (30.9%)
中途終了発話文		301 (32.0%)	330 (37.2%)	222 (25.6%)
計		942 (100%)	888 (100 %)	867 (100 %)

各セル内：発話文の出現数(生起比率)

表をみると、日本語談話では、「完全文」は 20 代、「フィラー」は 40 代、「中途終了発話文」は 10 代で高い生起比率をみせるということ、一方、朝鮮語談話では、「完全文」はどの年代でも変わらず高い生起比率をみせながらも、「フィラー」は 40 代、「中途終了発話文」は 20 代で高い生起比率をみせること、「中途終了発話文」の 40 代における生起比率は低いことなどが確認できるだろう。

また、両言語の比較では、40 代の話者において特に顕著な差をみせていることがわかる。すなわち、「完全文」は朝鮮語で、「終助詞終了発話文」、「中途終了発話文」は日本語で高い生起比率をみせており、カイ二乗検定の結果でも、それぞれ 0.1%水準の有意差が認められた($p<0.001$)。以上のような出現様相から、結果として、朝鮮語では「完全文」が、日本語では「中途終了発話文」が、比較的、幅広

⁶¹ 分析資料の量的バランスを統制するため、本稿で年代に関する分析を行なう際は、J1～J12(日本語)および、K1～K12(朝鮮語)のベース被験者は分析対象から除き、10代、20代、40代それぞれ10話者ずつの発話を分析対象とする。なお、今回の調査では、10代は年下との、40代は年上との対話が設定されていないため、分析に際しては、この点に注意しておく必要がある。

い年代で使用する発話形式であることが確認できる。なお、朝鮮語の 40 代話者における「中途終了発話文」は、日本語に比べ、低い生起比率をみせているが、これはこの年代で「完全文」の出現が多いことと関係があるものと思われる。

3.1.3.3.1.4. 年齢の上下差による考察

最後に、年齢の上下差による出現差についてみることにする。年齢の上下差による発話形式ごとの発話文の出現様相は、以下のとおりである：

【表 3-8】年齢の上下差⁶²による発話形式ごとの発話文の出現数と生起比率

日本語談話

		対年上（8話者）	対同年（8話者）	対年下（8話者）
非中途 終了 発話文	完全文	309 (37.9%)	368 (45.2%)	273 (36.8%)
	終助詞終了発話文	6 (0.7%)	10 (1.2%)	26 (3.5%)
	フィラー	217 (26.6%)	164 (20.1%)	168 (22.6%)
中途終了発話文		284 (34.8%)	272 (33.4%)	275 (37.1%)
計		816 (100 %)	814 (100 %)	742 (100 %)

朝鮮語談話

		対年上（8話者）	対同年（8話者）	対年下（8話者）
非中途 終了 発話文	完全文	262 (33.2%)	344 (43.5%)	357 (42.5%)
	マーカー終了発話文	38 (4.8%)	46 (5.8%)	38 (4.5%)
	フィラー	306 (38.8%)	178 (22.5%)	255 (30.4%)
中途終了発話文		183 (23.2%)	222 (28.1%)	190 (22.6%)
計		789 (100 %)	790 (100 %)	840 (100 %)

各セル内：発話文の出現数(生起比率)

表をみると、日本語談話では、「完全文」は、対同年で高い生起比率をみせる一方、その他の発話形式は、対話者との年齢差によって大きな差をみせていないこと、朝鮮語談話では、「完全文」は、対同年のほか、対年下で、「フィラー」は対年上で、「中途終了発話文」は、対同年で高い生起比率をみせることなどが確認できる。

なお、両言語の比較では、対年上の談話では、「丁寧化のマーカー終了発話文」、「フィラー」は朝鮮語で、「中途終了発話文」は日本語で高い生起比率をみせること、対同年の談話では、「丁寧化のマーカー終了発話文」は朝鮮語で高い生起比率をみせること、対年下の談話では、「フィラー」は朝鮮語で、「中途終了発話文」は日本語で高い生起比率をみせていることが確認され、カイ二乗検定による検定の結果でも、それぞれ 0.1%水準の有意差が認められた ($p<0.001$)。

以上では、日本語と朝鮮語の談話に現れる発話文を発話形式により分類し、その出現様相のデータ

⁶² 本稿における調査では、親疎関係のうち、親(友人同士)の談話については、対同年の談話のみを採録しているため、本稿で年齢の上下差に関する分析を行なう際は、J1～J12、K1～K12 の初対面談話のみを分析対象とし、J13～J21(日本語)および、K13～K21(朝鮮語)の談話は、分析対象から除くことにする。

をみてきた。データの分析の結果、発話者の属性、対話者との関係という観点からみたときに、日本語談話では、朝鮮語談話に比べ、「中途終了発話文」が相対的に広い使用域を持つということが明らかに
なり、具体的には、40代の話者や、初対面、対年上／年下といった関係における発話において、より高
い生起比率をみせることが確認された。ここでは、出現の傾向をみるために、主に計量化したデータを
みることにとどまったが、このような出現の差異が、相互作用の中でどのような意味を持つのかについ
ては、次章以降で分析を行なっていくことにしたい。

3.1.3.3.2. 「中途終了発話文」の下位分類とその出現様相

3.1.3.3.1. でみたデータにより、談話における中途終了発話文は、日本語でより高い生起比率を示すこ
が確認されたが、続いて、ここでは、それらの発話文が持つ、より具体的な文末形態についてみてみるこ
にする。両言語における「中途終了発話文」の文末形式を形態論的観点から分類した結果、以下に示すよ
うな類型が確認されることがわかった：

【日本語の「中途終了発話文」の形態論的下位分類】

I. 接続形(接続助詞)で終わるもの

- ①「-テ」、②「-ケド」、③「-ノデ」、④「-カラ」、⑤「-シ」、⑥「-バ」、⑦「-ト」、⑧「中止形」、
⑨その他の接続形

II. 接続形(接続助詞)以外で終わるもの

- ⑩名詞、⑪名詞＋助詞、⑫副詞、⑬「-みたいな」、⑭引用形とその諸形式、⑮間投詞、⑯「-とか」、
⑰非境界、⑱接続詞、⑲連体形

【朝鮮語の「中途終了発話文」の形態論的下位分類】

I. 接続形で終わるもの⁶³

- ①「-고」、②「-(으)ㄴ데／-는데／-던데」、③「-아/어서」、④「-(으)니까」、⑤「-(으)면」、
⑥「-는지／-는지／-던지」、⑦「-지만」、⑧その他の接続形

II. 接続形以外で終わるもの

- ⑨名詞、⑩名詞＋助詞、⑪副詞、⑫間投詞、⑬引用形とその諸形式、⑭接続詞、⑮非境界、
⑯連体形

このような類型は、実際の談話に現れた「中途終了発話文」を「談話文法」という観点から帰納的に分類し

⁶³ 朝鮮語における「接続形で終わるもの」の日本語との対応は、おおよそ以下のとおりである：

①「-고」(・て)、②「-(으)ㄴ데／-는데／-던데」(・けど)、③「-아/어서」(・て、・ので)、④「-(으)니까」(・から)
⑤「-(으)면」(・たら)、⑥「-는지／-는지／-던지」(・(の)か)、⑦「-지만」(・けど)

たものである⁶⁴。上記をみると、日本語では19種の、朝鮮語では16種の形式が確認されており、中途終了発話文の形態論的下位分類は、日本語においてより多い類型を持つことがわかる。また、日本語、朝鮮語ともに、「Ⅰ. 接続形で終わるもの」、「Ⅱ. 接続形以外で終わるもの」に分類され、大きな枠組みとしては、類似した体系を持つことがわかるが、これは両言語の文文法における体系が、基本的枠組みにおいて類似していることを反映したものである。なお、「接続形で終わるもの」については、形態(接続形語尾)による分類を、「接続形以外で終わるもの」については、品詞、あるいは、活用形(用言)による分類を行なっているが、日本語の⑬「-みたいな」、⑯「-とか」に関しては、発話文末における出現が突出して多かったため、例外的に特定の形態により類型化している。さらに、日本語⑭、朝鮮語⑬「引用形とその諸形式」は、日本語では、「-と」、「-って」のほかに「-という」、「-っていう」などの、朝鮮語では「-(으)ㄴ/는다고」(「-と/って」)のほかに「-(으)ㄴ/는다는」(「-と/っていう」)などの、引用文の連体形で終わる発話も含めている。また、日本語⑮、朝鮮語⑫「間投詞」は、それが単独で現れているもの(「はい」、「ええ」や、「네」(はい)、「응」(うん)といった「単純応答」、「あいづち」など)は含めておらず、何らかの発話の末尾に現れ、ターンを構成しているもののみが含まれている。

ところで、菅野(1981、2007)、菅野他(1988)で用言の「分析的な形」(synthetic form)とよばれる形⁶⁵については、文中の意味、機能という点においては、노마[野間](1996)も指摘するように、事実上、その構造全体を単位として、用言の語形の一つとみなすのが妥当であろう。しかし、本稿では、あくまで文末の形態論的観点から中途終了発話文の分類を試みるという立場をとるため、その非出現部分の判定が恣意的になることを防ぐために、分析的な形についても、(形態論的な境界で発話が終了した場合においては、)意味的な点は考慮せずに、あくまで文末形式の形態により分類を行なうことにする。

また、言いよどみや、対話者による割り込み(同時発話)などの結果、菅野(1981、2007)、菅野他(1988)で用言の「総合的な形」(analytic form)とよばれる形⁶⁶や任意の語が、句や語を構成する境界以外の位置で終了した場合に関しては、「非境界」(日本語⑰、朝鮮語⑮)として認定することにする。

例えば、以下の[例3-7]の「→」によって示されたJNBの発話は、「中途終了発話文」として認定されることになる：

[例3-7](日本語談話)

JNB: でも、特に、そこまで、それで出てけー、みたいなことには特に…。

JN3: あー、ゆるいんで…。

→JNB: あー、ゆる…。 ※「⑰非境界」(中途終了発話文)

JN3 なんか、おじちゃんがいつも<笑いながら>笑ってる感じなので…。

⁶⁴ 各項目の認定にあたっては、両言語ともに8回以上の出現が確認されたものを独立させている。また、接続形で終わる発話の中で、出現回数が8回未満のものは、日本語⑨、朝鮮語⑧「その他の接続形」にまとめたが、この項目には、日本語では「-ナガラ」、「-ノニ」などが、朝鮮語では「-면서」(「ながら」)、「-다가」(「-して(いる途中で)」)などが確認されている。なお、本稿における調査では、3.1.1.1.でみた品詞のうち、「連体詞」で終わる発話文、および3.1.1.2.でみた活用形のうち、「名詞形」で終わる発話文は、確認されなかった。

⁶⁵ 後置詞、不完全名詞、補助用言など、補助的な単語を含む2単語以上からなる文法的な形。例えば「するかもしれない」、「してもよい」、「해 주다」(「してくれる」)、「한 적이 있다」(「したことがある」)など。

⁶⁶ 1単語(用言)に種々の付属形式(助動詞や接尾辞、各種語尾類)が結合したもの。例えば、「行かれましたよ」、「大きくない」、「먹었어요」(「食べました」)、「보였지요」(「見えたでしょう」)など。

ここで、以上の下位分類が、本稿で分析対象とする談話全体において、いかなる出現を示すかをみてみることにしよう。談話全体における中途終了発話文の形態論的下位分類ごとの出現様相は、以下のようになった：

【表 3-9】「中途終了発話文」の形態論的下位分類ごとの出現数と生起比率

日本語談話		
接続形 467 (31.6%)	①「-テ」	209 (14.2%)
	②「-クド」	105 (7.1%)
	③「-ノデ」	56 (3.8%)
	④「-カラ」	32 (2.2%)
	⑤「-シ」	18 (1.2%)
	⑥「-バ」	13 (0.9%)
	⑦「-ト」	10 (0.7%)
	⑧「中止形」	8 (0.5%)
	⑨その他の接続形	16 (1.1%)
接続形 以外 1,010 (68.4%)	⑩名詞	312 (21.1%)
	⑪名詞＋助詞	198 (13.4%)
	⑫副詞	127 (8.6%)
	⑬「-みたい」	113 (7.7%)
	⑭引用形とその諸形式	91 (6.2%)
	⑮間投詞	46 (3.1%)
	⑯「-とか」	41 (2.8%)
	⑰非境界	40 (2.7%)
	⑱接続詞	24 (1.6%)
	⑲連体形	18 (1.2%)
総発話文数		1,477 (100 %)
朝鮮語談話		
接続形 432 (38.3%)	①「-고」	143 (12.7%)
	②「-(으)ㄴ데 / -는데 / -던데」	136 (12.1%)
	③「-아/어서」	49 (4.3%)
	④「-(으)니까」	42 (3.7%)
	⑤「-(으)면」	15 (1.3%)
	⑥「-는지 / -는지 / -던지」	8 (0.7%)
	⑦「-지만」	8 (0.7%)
	⑧その他の接続形	31 (2.8%)
接続形 以外 695 (61.7%)	⑨名詞	296 (26.3%)
	⑩名詞＋助詞	184 (16.3%)
	⑪副詞	83 (7.4%)
	⑫間投詞	39 (3.5%)
	⑬引用形とその諸形式	29 (2.6%)
	⑭接続詞	26 (2.3%)
	⑮非境界	24 (2.1%)
	⑯連体形	14 (1.2%)
総発話文数		1,127 (100 %)

各セル内：当該発話文の出現数(生起比率)

表をみてわかるように、談話全体において、「接続形」で終わる発話文は朝鮮語で、「接続形以外」で終わる発話文は日本語で高い生起比率を示しており、これらはともにカイ二乗検定の結果でも 0.1%水準の有意差が認められた($p<0.001$)。

「接続形」で終わる発話文について、具体的形態についてみると、日本語では①「-テ」が圧倒的に多く、次に続く②「-ケド」と比較しても2倍の出現をみせている。これは、小田(2002)の「接続助詞」で終わる発話文の出現に関する調査結果とも符合するもので、日本語のいわゆる「テ形」が、談話の中で、並列や、原因・理由、先行動作など幅広い文法機能を持つことによるものであると考えられる。一方、朝鮮語では、日本語の「テ形」のように幅広い文法機能を持つ接続形である①「-고」(・て)の出現が相対的に多いことに加えて、②「-(으)ㄴ데／-는데／-던데」(・けど)の出現の多さも際立っており、朝鮮語における「接続形」で終わる発話文の生起比率を高めている⁶⁷。また、「接続形以外」で終わる発話文は、両言語ともに「名詞」(日本語⑩、朝鮮語⑨)、「名詞+助詞」(日本語⑪、朝鮮語⑩)、「副詞」(日本語⑫、朝鮮語⑪)という出現順を示している点では類似しているが、日本語では、⑬「-みたいな」、⑭「-とか」という具体的形式により終わる発話や、⑭「引用形とその諸形式」が多く表れているなど、特徴的な相違もみられる。

上ではまず、談話全体における中途終了発話文の形態論的下位分類と、それぞれの出現状況についてみたが、以降では、これらを親疎関係、性別、年代、年齢の上下差という観点から整理し、それぞれの出現状況をみていくことにする。

3.1.3.3.2.1. 親疎関係による考察

まずは、親疎関係による出現状況をみる。親疎関係による中途終了発話文の形態論的下位分類の出現様相は、以下のとおりである：

【表 3-10】親疎関係による「中途終了発話文」の形態論的下位分類ごとの出現数と生起比率

日本語談話

	文末形式	初対面(24話者)		友人(18話者)	
接続形	①「-テ」	298 (35.9%)	123 (14.8%)	169 (26.2%)	86 (13.3%)
	②「-ケド」		76 (9.1%)		29 (4.5%)
	③「-ノデ」		56 (6.7%)		0 (0.0%)
	④「-カラ」		8 (1.0%)		24 (3.7%)
	⑤「-シ」		6 (0.7%)		12 (1.9%)
	⑥「-バ」		4 (0.5%)		9 (1.4%)
	⑦「-ト」		8 (1.0%)		2 (0.3%)
	⑧「中止形」		8 (1.0%)		0 (0.0%)
	⑨その他の接続形		9 (1.1%)		7 (1.1%)
接続形 以外	⑩名詞	533 (64.1%)	163 (19.6%)	477 (73.8%)	149 (23.1%)
	⑪名詞+助詞		111 (13.4%)		87 (13.5%)
	⑫副詞		63 (7.6%)		64 (9.9%)
	⑬「-みたいな」		65 (7.8%)		48 (7.4%)
	⑭引用形とその諸形式		34 (4.1%)		57 (8.8%)
	⑮間投詞		23 (2.8%)		23 (3.6%)
	⑯「-とか」		23 (2.8%)		18 (2.8%)
	⑰非境界		29 (3.5%)		11 (1.7%)
	⑱接続詞		10 (1.2%)		14 (2.2%)
	⑲連体形		12 (1.4%)		6 (0.9%)
	総発話文数		831 (100%)		646 (100%)

⁶⁷ 小田(2002)において、韓国人の上級日本語学習者の談話には「-テ」のほかに「-ケド」の出現が多いとの報告があるが、これは、朝鮮語談話において「-(으)ㄴ데／-는데／-던데」(・けど)の出現が多いことと関係がありそうである。なお、「-는데」(・けど)系の接続形語尾の「文法化」に関しては、김지혜(2004)、임규홍(2010)などに詳しい。

朝鮮語談話

	文末形式	初対面(24話者)		友人(18話者)	
接続形	①「-고」	267 (44.9%)	97 (16.3%)	165 (31.0%)	46 (8.6%)
	②「-(으)ㄴ데／-는데／-던데」		76 (12.8%)		60 (11.3%)
	③「-아/어서」		39 (6.6%)		10 (1.9%)
	④「-(으)니까」		18 (3.0%)		24 (4.5%)
	⑤「-(으)면」		10 (1.7%)		5 (0.9%)
	⑥「-는지／-는지／-던지」		5 (0.8%)		3 (0.6%)
	⑦「-지만」		6 (1.0%)		2 (0.4%)
	⑧その他の接続形		16 (2.7%)		15 (2.8%)
接続形 以外	⑨名詞	328 (55.1%)	114 (19.2%)	367 (69.0%)	182 (34.2%)
	⑩名詞＋助詞		106 (17.8%)		78 (14.7%)
	⑪副詞		44 (7.4%)		39 (7.3%)
	⑫間投詞		19 (3.2%)		20 (3.8%)
	⑬引用形とその諸形式		11 (1.8%)		18 (3.4%)
	⑭接続詞		11 (1.8%)		15 (2.8%)
	⑮非境界		13 (2.2%)		11 (2.1%)
	⑯連体形		10 (1.7%)		4 (0.8%)
総発話文数		595 (100%)		532 (100%)	

各セル内: 当該発話文の出現数(生起比率)

表をみると、両言語ともに、「接続形」は、初対面の談話において、「接続形以外」は、友人同士の談話において比較的高い生起比率をみせていることがわかる。ただし、そのような出現をみせる主要な要因は、両言語で異なっており、初対面談話で「接続形」が多く現れるのは、日本語では、②「-けど」、③「-ノデ」が、朝鮮語では、①「-고」(・て)や③「-아/어서」(・て、のて)が多く現れること、友人同士の談話で「接続形以外」が多く現れるのは、日本語では、⑭「引用形とその諸形式」が、朝鮮語では、⑨「名詞」が高い生起比率をみせることが関係しているといえる。

また、両言語の差異に着目すると、接続形の中で、順接(並列、原因・理由、先行動作)を表す形式は、日本語(①「-て」)では親疎ともに高い生起比率をみせるのに対し、朝鮮語(①「-고」(・て))では初対面談話のみで高い生起比率をみせるということ、逆接／前置きを表す形式は、日本語(②「-けど」)では初対面談話でより高い生起比率をみせるのに対して、朝鮮語(②「-(으)ㄴ데／-는데／-던데」(・けど))では親疎ともに高い生起比率をみせるといった違いをみせている。

3.1.3.3.2.2. 性別による考察

次に、性別による出現状況をみる。性別による中途終了発話文の形態論的下位分類の出現様相は、以下のとおりである:

【表 3-11】性別による「中途終了発話文」の形態論的下位分類ごとの出現数と生起比率

日本語談話

	文末形式	男性(21話者)		女性(21話者)	
接続形	①「-テ」	210 (30.0%)	105 (15.0%)	257 (33.1%)	104 (13.4%)
	②「-ケド」		43 (6.1%)		62 (8.0%)
	③「-ノデ」		24 (3.4%)		32 (4.1%)
	④「-カラ」		10 (1.4%)		22 (2.8%)
	⑤「-シ」		5 (0.7%)		13 (1.7%)
	⑥「-バ」		9 (1.3%)		4 (0.5%)
	⑦「-ト」		6 (0.9%)		4 (0.5%)
	⑧「中止形」		2 (0.3%)		6 (0.8%)
	⑨その他の接続形		6 (0.9%)		10 (1.3%)
接続形 以外	⑩名詞	490 (70.0%)	157 (22.4%)	520 (66.9%)	155 (19.9%)
	⑪名詞＋助詞		93 (13.3%)		105 (13.5%)
	⑫副詞		60 (8.6%)		67 (8.6%)
	⑬「-みたい」		52 (7.4%)		61 (7.9%)
	⑭引用形とその諸形式		52 (7.4%)		39 (5.0%)
	⑮間投詞		21 (3.0%)		25 (3.2%)
	⑯「-とか」		18 (2.6%)		23 (3.0%)
	⑰非境界		17 (2.4%)		23 (3.0%)
	⑱接続詞		9 (1.3%)		15 (1.9%)
	⑲連体形		11 (1.6%)		7 (1.0%)
総発話文数			700 (100%)		777 (100%)

朝鮮語談話

	文末形式	男性(21話者)		女性(21話者)	
接続形	①「-고」	212 (37.0%)	68 (11.9%)	220 (39.7%)	75 (13.5%)
	②「-(으)ㄴ데 / -는데 / -던데」		70 (12.2%)		66 (11.9%)
	③「-아/어서」		27 (4.7%)		22 (4.0%)
	④「-(으)니까」		15 (2.6%)		27 (4.9%)
	⑤「-(으)면」		6 (1.0%)		9 (1.6%)
	⑥「-는지 / -는지 / -던지」		6 (1.0%)		2 (0.4%)
	⑦「-지만」		4 (0.7%)		4 (0.7%)
	⑧その他の接続形		16 (2.8%)		15 (2.7%)
接続形 以外	⑨名詞	361 (63.0%)	155 (27.1%)	334 (60.3%)	139 (25.1%)
	⑩名詞＋助詞		90 (15.7%)		93 (16.8%)
	⑪副詞		33 (5.8%)		50 (9.0%)
	⑫間投詞		24 (4.2%)		15 (2.7%)
	⑬引用形とその諸形式		16 (2.8%)		13 (2.3%)
	⑭接続詞		17 (3.0%)		10 (1.8%)
	⑮非境界		18 (3.1%)		8 (1.4%)
	⑯連体形		8 (1.4%)		6 (1.1%)
総発話文数			573 (100%)		554 (100%)

各セル内: 当該発話文の出現数(生起比率)

表を見ると、性別の違いは、中途終了発話文における文末形式の選択に大きな影響を与えていないことがわかる。

3.1.3.3.2.3. 年代による考察

続いて、年代による出現状況についてみる。年代による中途終了発話文の形態論的下位分類の出

現様相は、以下のとおりである：

【表 3-12】年代による「中途終了発話文」の形態論的下位分類ごとの出現数と生起比率

日本語談話

	文末形式	10代（10話者）		20代（10話者）		40代（10話者）	
接続形	①「-テ」	127 (31.3%)	67 (16.5%)	73 (25.4%)	30 (10.5%)	114 (35.1%)	51 (15.7%)
	②「-ケド」		21 (5.2%)		12 (4.2%)		28 (8.6%)
	③「-ノデ」		19 (4.7%)		3 (1.0%)		10 (3.1%)
	④「-カラ」		6 (1.5%)		14 (4.9%)		9 (2.8%)
	⑤「-シ」		4 (1.0%)		5 (1.7%)		6 (1.8%)
	⑥「-バ」		3 (0.7%)		3 (1.0%)		4 (1.2%)
	⑦「-ト」		2 (0.5%)		0 (0.0%)		3 (0.9%)
	⑧「中止形」		1 (0.2%)		0 (0.0%)		1 (0.3%)
	⑨その他の接続形		4 (1.0%)		6 (2.1%)		2 (0.6%)
接続形 以外	⑩名詞	279 (68.8%)	86 (21.2%)	214 (74.6%)	71 (24.8%)	211 (64.9%)	58 (17.8%)
	⑪名詞＋助詞		36 (8.9%)		45 (15.7%)		58 (17.8%)
	⑫副詞		25 (6.2%)		31 (10.8%)		32 (9.8%)
	⑬「-みたい」		48 (11.8%)		24 (8.4%)		3 (1.0%)
	⑭引用形とその諸形式		26 (6.4%)		17 (5.9%)		27 (8.3%)
	⑮間投詞		19 (4.7%)		10 (3.5%)		6 (1.8%)
	⑯「-とか」		15 (3.7%)		7 (2.4%)		3 (1.0%)
	⑰非境界		14 (3.4%)		5 (1.7%)		9 (2.8%)
	⑱接続詞		6 (1.5%)		2 (0.7%)		12 (3.7%)
	⑲連体形		4 (1.0%)		2 (0.7%)		3 (0.9%)
総発話文数			406 (100%)		287 (100%)		325 (100%)

朝鮮語談話

	文末形式	10代（10話者）		20代（10話者）		40代（10話者）	
接続形	①「-고」	108 (35.9%)	30 (10.0%)	114 (34.5%)	35 (10.6%)	88 (39.6%)	36 (16.2%)
	②「-(으)ㄴ데 / -는데 / -던데」		45 (15.0%)		37 (11.2%)		13 (5.9%)
	③「-아/어서」		7 (2.3%)		9 (2.7%)		12 (5.4%)
	④「-(으)니까」		9 (3.0%)		16 (4.8%)		13 (5.9%)
	⑤「-(으)면」		2 (0.7%)		7 (2.1%)		2 (0.9%)
	⑥「-는지 / -는지 / -던지」		4 (1.3%)		0 (0.0%)		1 (0.5%)
	⑦「-지만」		1 (0.3%)		3 (0.9%)		3 (1.4%)
	⑧その他の接続形		10 (3.3%)		7 (2.1%)		8 (3.6%)
接続形 以外	⑨名詞	193 (64.1%)	95 (31.6%)	216 (65.5%)	100 (30.3%)	134 (60.4%)	48 (21.6%)
	⑩名詞＋助詞		40 (13.3%)		53 (16.1%)		40 (18.0%)
	⑪副詞		22 (7.3%)		19 (5.8%)		22 (9.9%)
	⑫間投詞		5 (1.7%)		12 (3.6%)		13 (5.9%)
	⑬引用形とその諸形式		13 (4.3%)		10 (3.0%)		1 (0.5%)
	⑭接続詞		9 (3.0%)		10 (3.0%)		2 (0.9%)
	⑮非境界		6 (2.0%)		7 (2.1%)		6 (2.7%)
	⑯連体形		3 (1.0%)		5 (1.5%)		2 (0.9%)
総発話文数			301 (100%)		330 (100%)		222 (100%)

各セル内：当該発話文の出現数(生起比率)

表をみると、日本語談話の「接続形」は、20代において、相対的に低い生起比率をみせていることがわかる。これは、日本語のこの年代における「接続形」(接続助詞)の中でも①「-テ」の出現が相対的に少ないことと関係しているといえる。また、顕著な違いとして、日本語の⑬「-みたい」、⑯「-とか」は、「若者ことば」として位置づけられることも多いように、年代が下がるにつれ、その出現が増加していることも確認できる。

3.1.3.3.2.4. 年齢の上下差による考察

最後に、年齢の上下差による出現状況をみる。年齢の上下差による中途終了発話文の形態論的下位分類の出現様相は、以下のとおりである：

【表 3-13】年齢の上下差による「中途終了発話文」の形態論的下位分類ごとの出現数と生起比率

日本語談話

	文末形式	対年上（8話者）		対同年（8話者）		対年下（8話者）	
接続形	①「-テ」	112 (39.4%)	46 (16.2%)	83 (30.5%)	36 (13.2%)	103 (37.5%)	41 (14.9%)
	②「-ケド」		27 (9.5%)		20 (7.4%)		29 (10.5%)
	③「-ノデ」		31 (10.9%)		12 (4.4%)		13 (4.7%)
	④「-カラ」		0 (0.0%)		3 (1.1%)		5 (1.8%)
	⑤「-シ」		1 (0.4%)		1 (0.4%)		4 (1.5%)
	⑥「-バ」		0 (0.0%)		3 (1.1%)		1 (0.4%)
	⑦「-ト」		1 (0.4%)		2 (0.7%)		5 (1.8%)
	⑧「中止形」		4 (1.4%)		2 (0.7%)		2 (0.7%)
	⑨その他の接続形		2 (0.7%)		4 (1.5%)		3 (1.1%)
接続形 以外	⑩名詞	172 (60.6%)	44 (15.5%)	189 (69.5%)	66 (24.3%)	172 (62.5%)	53 (19.3%)
	⑪名詞＋助詞		35 (12.3%)		38 (14.0%)		38 (13.8%)
	⑫副詞		28 (9.9%)		19 (7.0%)		16 (5.8%)
	⑬「-みたいな」		18 (6.3%)		30 (11.0%)		17 (6.2%)
	⑭引用形とその諸形式		9 (3.2%)		12 (4.4%)		13 (4.7%)
	⑮間投詞		7 (2.5%)		10 (3.7%)		6 (2.2%)
	⑯「-とか」		10 (3.5%)		7 (2.6%)		6 (2.2%)
	⑰非境界		15 (5.3%)		4 (1.5%)		10 (3.6%)
	⑱接続詞		3 (1.1%)		0 (0.0%)		7 (2.5%)
	⑲連体形		3 (1.1%)		3 (1.1%)		6 (2.2%)
総発話文数			284 (100%)		272 (100%)		275 (100%)

朝鮮語談話

	文末形式	対年上（8話者）		対同年（8話者）		対年下（8話者）	
接続形	①「-고」	87 (47.5%)	35 (19.1%)	89 (40.1%)	30 (13.5%)	91 (47.9%)	32 (16.8%)
	②「-(으)ㄴ데 / -는데 / -던데」		23 (12.6%)		26 (11.7%)		27 (14.2%)
	③「-아/어서」		14 (7.7%)		12 (5.4%)		13 (6.8%)
	④「-(으)니까」		6 (3.3%)		8 (3.6%)		4 (2.1%)
	⑤「-(으)면」		3 (1.6%)		5 (2.3%)		2 (1.1%)
	⑥「-는지 / -는지 / -던지」		2 (1.1%)		0 (0.0%)		3 (1.6%)
	⑦「-지만」		0 (0.0%)		3 (1.4%)		3 (1.6%)
	⑧その他の接続形		4 (2.2%)		5 (2.3%)		7 (3.7%)
接続形 以外	⑨名詞	96 (52.5%)	31 (16.9%)	133 (59.9%)	46 (20.7%)	99 (52.1%)	37 (19.5%)
	⑩名詞＋助詞		30 (16.4%)		44 (19.8%)		32 (16.8%)
	⑪副詞		16 (8.7%)		19 (8.6%)		9 (4.7%)
	⑫間投詞		3 (1.6%)		7 (3.2%)		9 (4.7%)
	⑬引用形とその諸形式		5 (2.7%)		4 (1.8%)		2 (1.1%)
	⑭接続詞		7 (3.8%)		3 (1.4%)		1 (0.5%)
	⑮非境界		3 (1.6%)		3 (1.4%)		7 (3.7%)
	⑯連体形		1 (0.5%)		7 (3.2%)		2 (1.1%)
総発話文数			183 (100%)		222 (100%)		190 (100%)

各セル内：当該発話文の出現数（生起比率）

表をみると、日本語談話における③「-ノデ」は、対年上で多く（一方、①「-テ」や②「-ケド」は年代により大きな変化をみせていない）、⑩「名詞」、⑬「-みたいな」は、対同年で多いということ、朝鮮語談話の①

「-고」(・て)は対年上で多いということなどが確認できる。

3.2.「発話機能」に関して

3.2.1.「発話機能」に関する先行研究

本項では、本稿における今一つの分析項目となる、談話における「発話機能」⁶⁸の分類を概観した後、本稿における下位分類を提示する。主要先行研究における「発話機能」の分類のうち、上位項目の分類は、以下のようになっている⁶⁹：

国立国語研究所(1960)

＜「表現意図」の分類(日)＞

1. 詠嘆表現、2. 判叙表現、3. 要求表現、4. 応答表現

国立国語研究所(1987)

＜「発話機能」における「文末の表現意図」の分類(日)＞

1. 叙述要素文、2. 伝達要素文、3. 疑問要素文、4. 要求要素文、5. 意志要素文、
6. 単語文、7. 言いさし文

※「場面を形成する要因」による分類

＜「働きかけの種類」(聞き手メアテの条件)による分類＞

- ・没対者性…独語、聞かせ
- ・対者性

要求…1. 情報要求、2. 行為要求、3. 注目要求

非要求…4. 情報提供、5. 意志表示、6. 注目表示

ザトラウスキー(1993)

＜「発話機能」の分類(日)＞

1. 注目要求、2. 談話表示、3. 情報提供、4. 意志表示、5. 同意要求、6. 情報要求、
7. 共同行為要求、8. 単独行為要求、9. 言い直し要求、10. 言い直し、11. 関係作り・儀礼、
12. 注目表示

⁶⁸ 発話文自体が有する機能のことをさす。ただし、ここで取り上げた全ての先行研究において必ずしも「発話機能」という術語が用いられているわけではない。以下では、当該論文において使用されている、本稿における「発話機能」に相当する概念のものについては、「表現意図」のように「」付きで示すことにする。なお、日本においては、1980年代後半以降、Hallidayの機能文法などの影響を受けながら、日本語の談話研究を中心に「発話機能」という語が多く用いられるようになった。

⁶⁹ ここでは、議論の核心となる上位分類を中心に示す。下位分類までを含めて、図式化したものは、本稿の末尾に[付録4]として付してある。なお、＜見出し部分＞における()は、分析対象となる言語を示しており、「日」は「日本語」を、「朝」は「朝鮮語」をさす。

曹英南(2004)

＜「言いさし表現」の「機能」の分類(日・朝)＞

1. 行為要求、2. 情報要求、3. 情報提供、4. 意志表示

鈴木(2007)

＜「発話機能」の分類(日)＞

1. 注目要求／間投詞的表現、2. 談話表示、3. 要求、4. 提供、5. 受容

李恩美(2008)

＜「中途終了型発話」の「発話機能」の分類(日)＞

1. 情報要求、2. 情報伝達、3. 情報応答・情報提供、4. あいづち、5. その他

まず、日本語の「発話機能」に関する論考の中で、最も早い時期のものとして、国立国語研究所(1960)をあげることができる。この論考は、文法研究が主に書きことばを分析対象としていた時代にあつて、話しことばを対象に定めた先駆的な研究である。この中では、4種の「表現意図」を設定し、それを「言語主体が文全体にこめるところの、いわゆる命令・質問・叙述・応答などの内容のこと」(p.87)と定めているが、この4つの「表現意図」項目の下位分類をみると、「態」、「相」、「時」といった文法範疇による分類や、「断定」、「希求」、「推定」、「意志」といった命題や相手に対する話者の心的態度などモダリティ(modality)による分類が混在しており、不統一さを感じさせる部分もある。

国立国語研究所(1987)は、日本語教育の枠組みの中における論考で、「発話機能」のうち、「文末の表現意図」による分類として、7種の分類を設定している。この中で1.「叙述要素文」や2.「伝達要素文」、3.「疑問要素文」といった項目は、(その認定基準に文法的側面を取り入れたものであるとしても)「発話機能」の一部を成すものであることがわかるが、6.「単語文」や7.「言いさし文」などは、発話文を統語論的基準により分類したものであり、パラディグマティックな分類を成していない。なお、同論考では、「文末の表現意図」による分類のほかに「場面を形成する要因」⁷⁰のうち、「働きかけの種類」(聞き手メアテ)、「対者性」による分類として、6種を設定している。

ザトラウスキー(1993)は、日本語の電話による勧誘の談話構造を分析したもので、「発話機能」として12種の分類を行なっている。これは、国立国語研究所(1987)の分類を参考にしたものであると考えられるが、この中では、1.「注目要求」、5.「同意要求」、7. 8.「共同／単独行為要求」、9.「言い直し要求」など、「要求」系の項目を細分化しているほか、2.「談話表示」、10.「言い直し」などの項目を新たに加えている。ただし、この分類では、全体の半数である6項目が「要求」系で占められており、やや偏った項目設定がされているという印象を与えるほか、12種の「発話機能」のうち、下位分類を認めているのは、12.「注目表示」のみで、その他の項目に関しては、より精密な分類を行なう余地が残されている

⁷⁰ 「発話の動機」(場面メアテ)、「働きかけの種類」(聞き手メアテ)、「発話内容に対する態度」(素材メアテ)の3つ。

⁷¹。また、「情報」と「意志」の項目を分けているが、その認定基準は、研究者の主観に左右されやすいという点⁷²、「要求」と「提供」、「表示」項目の関係をどのように扱うのかという点、「言い直し」が他と異なる基準による分類であるという点など、さらなる議論が必要な部分もある。

曹英南(2004)は、日本語と朝鮮語の「言いさし表現」の使用状況と生起理由、発話者の意識などについて分析した論考である。この論文の中では、国立国語研究所(1987)における分類を援用しつつ、「言いさし表現」の「機能」を4種に分類している。同論文は、日本語と朝鮮語の対照研究という枠組みの中で、両言語の「発話機能」の相違を捉えようとした数少ない研究であるが、やはり「情報」と「意志」の区分に妥当性を与えられるかという点、「要求」と「提供」、「表示」項目をどのように体系的に扱うのか、という点において再考の余地がある。また、映画の SCRIPT、(話者の属性や発話時間が一定ではない)電話による会話を分析対象としているため、「話しことば」という言語事実に基づいた、より体系的、かつ精密な記述をする必要があるともいえる。

鈴木(2007)は、発話の機能文型に基づく「話談の多重構造」という観点から、日本語の相談談話における「談話型」について分析したもので、「発話機能」を5種に分類している。この論文では、それまでの研究における問題点を分析しつつ、より精密な下位分類の構築をしているが、同論文の元となった鈴木(2003)においては扱っていた「応答」(要求に対する提供)という概念を分類に取り入れておらず、そのため、発話者の意図が機能の中で考慮されにくくなってしまったという点が惜まれる。また、この中では、国立国語研究所(1987)の「疑問」と「要求」、ザトラウスキー(1993)の「同意要求」、「情報要求」、「行為要求」、「言い直し要求」を、大項目として、1つの「要求」にまとめている。

李恩美(2008)は、日本語の「中途終了型発話」について「表現形式」と「発話機能」という観点から分析したもので、5種の「発話機能」を設定している。この論文では、「発話機能」の中では、「情報伝達」、「情報要求」の2項目が高い生起比率をみせており、それは、分析発話形式が、働きかけや、相手の領域を侵すことへの躊躇の機能を持つためであるとしている。ただし、この論文では、5種の「発話機能」の下位分類については、いずれについても記述がされておらず、また、分析範囲が日本語の初対面談話に限定されているため、より詳細かつ広範囲な分析を行なう必要があるといえる。なお、同論文では、前

⁷¹ なお、ザトラウスキー(1997)では、「かわりあい」という概念から、ザトラウスキー(1993)における12の「発話機能」の分類に対し、Ⅰ.「要求」、Ⅱ.「表示・提供」、Ⅲ.「受容」という、さらなる上位分類を設定している。具体的には以下のように分類されている:

Ⅰ.「要求」(1. 注目要求、5. 同意要求、6. 情報要求、7. 共同行為要求、8. 単独行為要求、9. 言い直し要求)

Ⅱ.「表示・提供」(7. 談話表示、8. 情報提供、9. 意志表示、10. 言い直し)

Ⅲ.「受容」(11. 関係づくり・儀礼、12. 注目表示)

この3つの分類は、発話そのものが単独で持つ「発話機能」における共通性を抽出する形での命名となっている。ただし、後に李恩美(2008)についてみる際にも述べるように、Ⅱ.の「表示」と「提供」という概念は、談話展開や、発話連鎖という観点からみた場合は、分けて扱う必要があるため、このような分類法は、必ずしも有効とはいえない。

⁷² Searle(1969)のいう命題内容条件(発話の内容が満たすべき条件:propositional content condition)を文末の述語の品詞の文法的範疇(例えば、状態動詞、感情表出動詞など)により同定することも場合によっては、可能であろう。しかし、実際の談話に現れる発話は、そのように単純な分類ができるものばかりではない。例えば、日本語の「いや、私が…」(作例)という述語動詞の現れない発話を(とりあえず文脈を考えずに)分類する場合、それが「意志」であるのか「情報」であるのかの認定は非常に難しい。

原(2001)の概念を参考にし、「働きかけるタイプ」、「反応するタイプ」という分類法を採用し、「自発的に発言する発話」と「要求に答える発話」という観点から、「情報伝達」と「情報応答・情報提供」をそれぞれ区別しており、より正確な言語記述を可能にしている⁷³。

以上、主要な先行研究における「発話機能」の分類、分析についてみてきたが、ここまでみてきた議論の中で問題となった主要な点を改めて整理すると、次のようになる：

【「発話機能」の分類に関する問題点】

- ・異なるレベルのものが、同列の分類に混在している。
- ・「情報」と「意志」の区別をしているが、その認定基準が曖昧かつ恣意的である。
- ・「要求」と「提供」、「表示」の関係が不明瞭である。
- ・「応答」という概念が考慮されていない。
- ・「情報」系と「行為」系が同一項目にまとめられている。

【「発話機能」の分析方法に関する問題点】

- ・「機能」を、発話者の属性や話者間の関係に注目して分析していない。
- ・自然談話における文脈や音声に依拠した発話文の分析が行なわれていない⁷⁴。
- ・朝鮮語談話における「発話機能」に関する記述は、ほとんどない。

次項では、これらの内容をふまえたうえで、本稿における「発話機能」の分類を設定し、談話における言語事実に即したより詳細な記述を試みることにする。

3.2.2. 本稿における「発話機能」の分類と出現様相

3.2.2.1. 「発話機能」の分類

続いて、本稿における「発話機能」の分類と定義についてみることにする。本稿では、3.2.1.でみた先行研究における分類上の不備を補完し、「発話機能」に以下のような下位分類を立てることにする。ここでは、日本語による作例とともに示す：

【本稿における「発話機能」の分類】

⁷³ このように談話展開や、発話連鎖という観点も考慮し、分類に取り入れている点は、注目に値するといえる。なお、このような「応答」という概念自体は、早くは国立国語研究所(1960)における「表現意図」の分類にすでに現れており、その中では、対話における文は「相手に対して、あらたに何かを表現しようとする意図」と「相手のことばに対して、何かを表現しようとする意図」に分類されるとの説明がされている。なお、Halliday(1985)は、Schegloff and Sacks(1973)の隣接ペア(adjacency pair)といった概念を適用し、すべての発話は、要求(demanding)と付与(giving)にまず分けられるとしている。

⁷⁴ 特に朝鮮語の研究においてその傾向が強い。朝鮮語の研究においても임규홍(2010)、박재희(2012)、김수태(2013)などのように特定の形態を扱った研究や、김지현(2002)、정명숙, 최은지(2013)などのように中間言語(学習者言語)を扱った研究においては、それを「機能」という観点からみる試みが行なわれているが、それをより広い「談話」という視座から、捉えた研究は、今もって少ない状況にある。

①「注目要求」

呼びかけなど、発話者や発話、事物の存在・状況への認識を求める発話。

(例)すみません！／あの一…。／ほら、あれ…。／えーつとですね。

②「注目提供」

対話者による「注目要求」に対する直接的な応答発話として、対話者や先行発話、事物の存在・状況への認識を提供する発話。また、「情報要求」(行為要求)に対し、実質的内容を含まない認識のみを提供する発話⁷⁵。あいづちなど。

(例)はい。／ええ。／あー。／うーん。／そうですね。／いえいえ。

③「注目表示」

対話者による、明示的な「注目要求」によらず、対話者や先行発話、事物の存在・状況への認識を表示する発話。あいづちなど。

(例)同上

④「情報要求」

情報や評価、意志などの実質的内容に関する説明などを求める発話。

(例)面白いですね。/あ、名古屋ですか？/それは、どういことですか？/お名前は…？

⑤「情報提供」

対話者による「情報要求」(行為要求)に対する直接的な応答発話として、情報や評価、意志などの実質的内容を提供する発話。

(例)A:お名前は…？ 【情報要求】

B:高木と申します。 【情報提供】

⑥「情報表示」

対話者による、明示的な「情報要求」によらず、情報や評価、意志などの実質的内容を表示する発話。

(例)A:大須観音に一度行ってみたいなあ。 【情報表示】

B:でも、名古屋といえば、やっぱり名古屋城でしょう。開府 400 年の歴史は、一見の価値ありますよ。 【情報表示】(2文とも)

⑦「行為要求」

勧誘、依頼、勧告、命令などをする発話。

⁷⁵ このように「情報要求」(行為要求)に対する応答発話が、この項目に含まれることについては、第6章で扱う。脚注122も参照。

(例)一緒に行こうよ！／ちょっとここに書いてもらえませんか。／早く教えろって…！

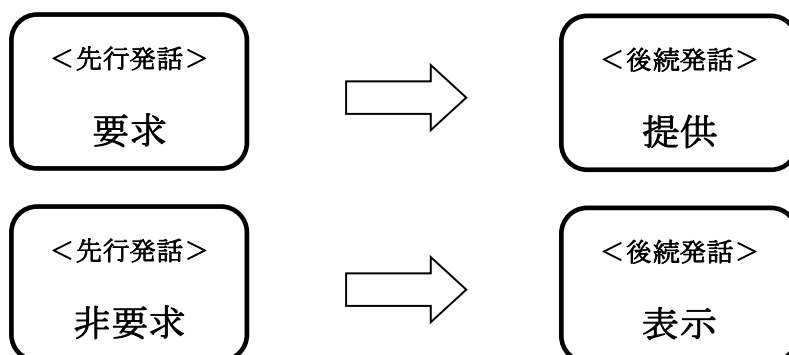
⑧「談話表示」

談話の展開そのものに言及する発話。談話標識 (discourse marker) となる。

(例)あ、だから…。／うーん、でも…。／じゃあ…。

このように、本稿における「発話機能」の分類では、「情報」と「意志」を「情報」項目に合流させたほか、以下のモデルが示すように、「要求」を表す発話に対する発話を「提供」、「要求」を表す発話によらず出現した発話を「表示」として区別することにする。具体的には、①「注目要求」に対する発話を②「注目提供」、④「情報要求」に対する発話を⑤「情報提供」として項目化し、それぞれの「発話機能」間の関係を明確にする：

【本稿における「要求」、「提供」、「表示」認定の基本的モデル】



なお、本稿では、上述のとおり、「発話機能」の分類において、「注目」、「情報」、「行為」を区別しているが、「意志」については、「情報」項目の中に含めており、この両者を区別していない。ただし、このうち「情報要求」を表すものについては、第4章で「談話機能」という観点から、さらなる細分化をすることにする。

3.2.2.2.「発話機能」による発話文の出現様相

続いて、「発話機能」の各項目が、3.1.1.3.でみた「発話形式」により、いかなる出現を示すかをみることにする。「発話形式」による「発話機能」ごとの出現状況は、以下のとおりである：

【表 3-14】「発話形式」による「発話機能」ごとの出現数と生起比率

日本語談話

	非中途終了発話文			中途終了 発話文	計
	完全文	終助詞終了 発話文	フィラー		
①注目要求	30 (1.9%)	2 (1.5%)	3 (0.3%)	17 (1.2%)	52 (1.2%)
②注目提供	51 (3.2%)	0 (0%)	163 (17.2%)	34 (2.3%)	248 (6.0%)
③注目表示	167 (10.4%)	5 (3.7%)	767 (81.1%)	92 (6.2%)	1,031 (24.8%)
④情報要求	500 (31.2%)	6 (4.4%)	7 (0.7%)	343 (23.2%)	856 (20.6%)
⑤情報提供	157 (9.8%)	11 (8.1%)	5 (0.5%)	227 (15.4%)	400 (9.6%)
⑥情報表示	690 (43.0%)	110 (80.9%)	1 (0.1%)	739 (50.0%)	1,540 (37.0%)
⑦行為要求	8 (0.5%)	0 (0%)	0 (0%)	11 (0.7%)	19 (0.5%)
⑧談話表示	0 (0%)	2 (1.5%)	0 (0%)	14 (0.9%)	16 (0.4%)
計	1,603 (100 %)	136 (100 %)	946 (100 %)	1,477(100 %)	4,162 (100%)

朝鮮語談話

	非中途終了発話文			中途終了 発話文	計
	完全文	丁寧化のマーカ ー終了発話文	フィラー		
①注目要求	9 (0.5%)	0 (0%)	1 (0.1%)	19 (1.7%)	29 (0.7%)
②注目提供	21 (1.2%)	0 (0%)	136 (13.5%)	23 (2.0%)	180 (4.5%)
③注目表示	95 (5.6%)	9 (7.4%)	839 (83.5%)	59 (5.2%)	1,002 (25.3%)
④情報要求	510 (29.9%)	72 (59.0%)	20 (2.0%)	228 (20.2%)	830 (21.0%)
⑤情報提供	192 (11.3%)	24 (19.7%)	7 (0.7%)	160 (14.2%)	383 (9.7%)
⑥情報表示	837 (49.1%)	17 (13.9%)	2 (0.2%)	610 (54.1%)	1,466 (37.0%)
⑦行為要求	41 (2.4%)	0 (0%)	0 (0%)	18 (1.6%)	59 (1.5%)
⑧談話表示	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	10 (0.9%)	10 (0.3%)
計	1,705 (100%)	122 (100 %)	1,005 (100%)	1,127 (100%)	3,959 (100%)

各セル内: 当該発話文の出現数(生起比率)

発話機能の出現分布を形式ごとにみると、まず、完全文は、両言語ともに⑥「情報表示」、④「情報要求」で高い生起比率を示していることがわかる。両言語の比較では、⑥「情報表示」は朝鮮語で特に高い比率をみせており、カイ二乗検定の結果でも 0.1%水準の有意差がみられることが確認された ($p<0.001$)。

次に、終助詞終了発話文／丁寧化のマーカ―終了発話文は、形態論的な特徴においては類似した特徴をもつ一方で、「発話機能」という観点からみた場合には、大きく異なる特徴を持つことが確認される。つまり、日本語の終助詞終了発話文は、⑥「情報表示」で高い生起比率をみせる一方で、朝鮮語の丁寧化のマーカ―終了発話文は、④「情報要求」で高い生起比率をみせており、カイ二乗検定の結果でもそれぞれ 0.1%水準の有意差がみられることが確認された ($p<0.001$)。

さらに、フィラーについてみると、両言語ともに、③「注目表示」で圧倒的に高い生起比率を示していることが確認される。また、両言語の比較では、②「注目提供」は、日本語で高い生起比率をみせており、カイ二乗検定の結果では、5%水準の有意差がみられることが確認された ($p<0.05$)。

最後に、中途終了発話文であるが、この発話形式は、日本語 1,477 発話に対し、朝鮮語 1,127 発話

と、他の発話形式に比べ、その出現数に大きな差があるため、出現実数という観点からデータをみると、両言語ともに、⑥「情報表示」、④「情報要求」で高い出現数の数値を示していることがわかる。また、両言語の比較では、⑥「情報表示」、④「情報要求」、⑤「情報提供」において、日本語で高い出現数の数値を示すことも確認される。このように日本語談話で「中途終了発話文」が選択されやすい要因については、本稿における分析内容とも大きく関わるもので、第4章から第8章において詳細な議論を行なっていくことにする。

以上、発話形式による発話機能の出現様相をみてきたが、これらの中でも、⑥「情報表示」、④「情報要求」、⑤「情報提供」の出現数に注目してみると、日本語談話では 2,796 発話(67.2%)、朝鮮語談話では 2,679 発話(67.7%)の出現が確認されており、それぞれ総発話文数の 7 割弱を占めていることがわかる。これらはいずれも「情報の授受」に関わる項目であり、両言語の談話における発話文の「機能」が、相互作用の本質と大きく関わっていることを示すものである。本稿では、次章以降において、本項でみたデータがいかなる意味を持つのかを解明するために、「情報の授受」における「形式」と「機能」の関係について、より詳細な議論を行なっていくことにしたい。

3.3. まとめ

本章では、日本語と朝鮮語の談話における品詞分類、用言の活用形、「発話形式」に関する理論的枠組みを構築した後、主要な先行研究において、「中途終了発話文」、「発話機能」がどのように論じられてきたかを概観し、それらに対する本稿の定義、下位分類を示した。また、それだけでなく、それぞれの出現状況について、計量化したデータもともにみた。

本稿における「中途終了発話文」の定義は、形態・統語論、話者交替と音声、発話意図伝達という3つの観点を取り入れており、発話に関わるより広い要素を考慮した精密な同定を可能にするものである。

データの分析では、「中途終了発話文」の談話全体における生起比率は、日本語では 35.5%、朝鮮語では 28.5%を示し、日本語でより高い数値をみせること、形態論的下位分類は、日本語で 19 種、朝鮮語で 16 種の類型が確認され、日本語においてより多くの類型が存在することが明らかになった。また、談話における中途終了発話文の出現は、発話者の属性や、対話者との関係という観点からみたときには、日本語談話で相対的に広い使用域を持つということも確認された。これは、日本語談話では、40 代の話者や、初対面、対年上／年下といった関係において、「中途終了発話文」が多く出現することと関係するものである。

さらに、本稿における今一つの分析項目である「発話機能」については、8種の機能項目が確認され、日本語と朝鮮語の発話文が、相互作用において「情報の授受」に関わる発話機能を強く有していることも確認した。

以上のように、本章では、本稿における分析項目について、理論の前提を確立するとともに、具体的データを概観してきた。このうち、3.2.2.2.では、談話における発話文は、「情報の授受」という相互作用の根幹に関わる機能を相対的に多く持つことを確認したが、このことは、つまり発話文の分析にあたって

は、「情報の授受」に関する機能項目に特に注目することで、両言語の談話の本質に接近することが可能になるということを意味するものである。本稿では、こうしたことをふまえたうえで、第4章では、情報の授受のうち、「情報要求」を表す発話について、それに続く第5章では、「情報要求」発話と先行発話との関係について、さらに第6章では、「情報要求」(質問)発話と、それに後続する「応答」発話との関係について分析を行なうことで、中途終了発話文をはじめとする「発話文」が、両言語の相互作用において、いかなる発話装置として機能しているかを探っていくことにする。

本章で先行諸研究についてみた際にも述べたように、これまでのところ、日本語と朝鮮語の「談話」を扱った対照研究は、まだそう多くないのが現状である。また、研究が少ないこととも関連して、日本語と朝鮮語の中途終了発話文を分析する際に、「発話形式」と「発話機能」の関係について、詳細な記述を行なった論考や、発話者の属性(年代、性別など)や、対話者との関係(親疎、年齢差など)と発話の出現について分析を行なった論考も、ほとんど存在していない状況にある。本稿では、これらの既存の研究の問題点を補完しうる、実証的かつ、体系的な言語記述を行なっていくことにしたい。

第4章 「形式」と「機能」の関係

－「情報要求」発話を中心に－

本章では、第3章でみた「発話形式」と「発話機能」の定義を前提として、日本語と朝鮮語の談話における両者の関係についてみていく。具体的には、「形式」は、談話に特徴的な形式である「中途終了発話文」を、「機能」は、「情報の授受」に関わる発話として、両言語の談話に多く現れ、また対話者に対する働きかけが強い「情報要求」発話を取り上げ、その出現様相を対照することにする⁷⁶。

分析に際しては、(1)発話者の属性、および対話者との関係によって、「形式」と「機能」は、いかなる出現の差異をみせるのか、(2)それらの発話におけるポライトネス(発話意図)は、いかなる特徴を持つのか、という2つの観点を取り入れる。本章の分析を通じて、日本語と朝鮮語の談話に現れる発話文の「形式」と「機能」がいかなる関係を持ち、相互作用の促進に貢献しているのか、その一端を示すことが可能になるはずである。

※本章の内容は、著作権の許諾が得られていないため、以降の公開を行なわない。

⁷⁶ Fishman(1978)や細川(1987)、増田(2006)などでも、「情報要求」(質問)は、対話者を対話、あるいは相互作用に巻き込む強力な手段として機能する発話であるとの指摘がある。本稿で「情報の授受」に関する発話を分析するに際して、まず「情報要求」に注目したのも、この発話が「他者への働きかけ」を最も強く持つものであるからに他ならない。

第5章 談話構成と発話文生成メカニズム

ー先行発話と「質問」⁷⁷を表す「中途終了発話文」出現の関係を中心にー

「質問」→「応答」という発話連鎖は、言語を媒介とした相互作用においては、普遍的に存在するもので、「情報の授受」という言語そのものの存在の根幹にかかわる最も基本的な談話構成である。本稿でも、第4章において、日本語と朝鮮語の談話に現れる「質問」(情報要求)発話について考察を試みており、その結果、日本語では朝鮮語に比べ、「質問」(情報要求)の「中途終了発話文」がより多く出現すること、その違いは発話者のポライトネスレベルにおける「ストラテジー」の相違に起因するものであることなどが明らかになった。これらの分析を通じて、両言語の自然談話では、「完全文」のみならず、「中途終了発話文」による「質問文」が発話装置として存在しており、それらは、言語により異なった機能を担っていることが示されたが、その分析過程においては、主に発話を産出する話者の「意図」に焦点が当てられており、任意の発話が産出される文脈的環境との関係については、十分な分析を行なうことができなかったという課題も残った。また、既存の研究をみても、日本語と朝鮮語の談話における「中途終了発話文」をはじめとする発話文の生成について、先行発話、後続発話との関係から扱ったものは、ほとんど存在していないようである。そこで、本章以降では、相互作用における「質問」発話を周辺発話という、より大きな枠組みの中で捉えなおすことで、その動的な特性を解明してみようと思う。具体的な手順としては、以下の2つの<課題>を設定し、<課題1>を第5章で、<課題2>を第6章でそれぞれ扱うことにする：

<課題1> 「質問文」としての「中途終了発話文」の生成メカニズムに関する分析

「中途終了発話文」がターンの交替を促進し、「質問文」として機能することを可能にする装置は何であるかを解明する。その際に先行発話との関わりにも着目し、それらの装置の出現が、日本語と朝鮮語の談話において、いかなる特徴をみせるかを明らかにする。

<課題2> 「質問文」から始まる発話連鎖に関する分析

日本語と朝鮮語の談話において、「質問」から始まる発話連鎖が、いかなる出現様相をみせるかを明らかにする。具体的には、両言語の「質問」に対する「応答」発話は、「形式」や「機能」という観点からみたときに、いかなる出現の差異をみせ、相互作用の中で周辺発話と有機的関係を構築しているのかを示す。

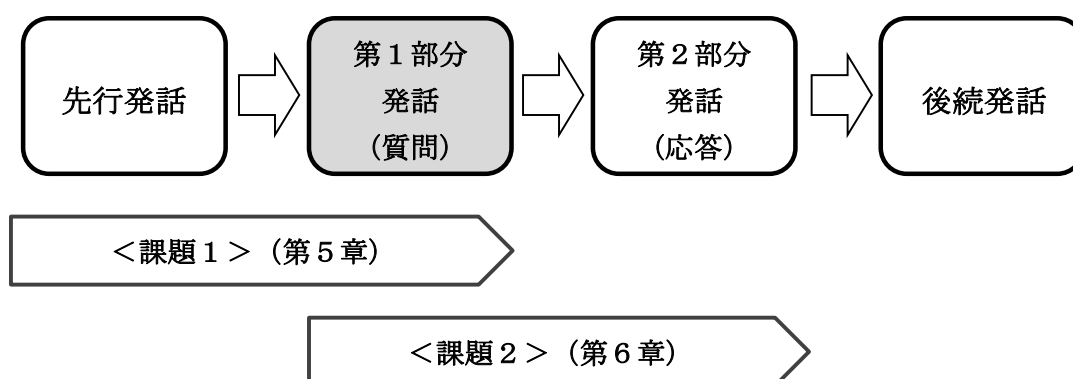
<課題1>は、「中途終了発話文」の出現に注目し、「質問」の要素を持たない発話文がいかに「質問文」として機能することが可能になるのかを、発話文そのものの特性のみならず、「先行発話」との関係も視野に入れて分析しようとするものである。また、<課題2>は、「質問」発話とそれに対する「応答」発話

⁷⁷ 第3章、第4章では、主に単独の発話文が持つ「発話機能」について分析を行なったため、「情報要求」という術語を用いたが、本章以降で「発話連鎖」(周辺発話との関係)について分析を行なう際には、慣例に従って「質問」という語を用いることにする。

の出現を、「形式」や「機能」の連鎖という観点から分析し、「質問」文が以降の談話展開にいかなる影響を与えているかを分析するものである。

第5章、第6章で行なう<課題>のモデルを、整理すると、以下のようになる。なお、以降では、「質問」の発話を「第1部分」(first pair part)、第1部分に直接後続する「応答」の発話を「第2部分」(second pair part)、さらにそれに続く発話を「第3部分」(third pair part)として論を進めていくことにする。:

【第5章、第6章における<課題>のモデル】



このモデルが示すとおり、<課題1>は[先行発話～第1部分(質問)]に関する研究、<課題2>は[第1部分(質問)～第2部分(応答)]に関する研究である。これら2つの課題に取り組むことにより、「質問」を表す発話が、「談話」という動的な相互作用の中で、先行発話、後続発話とどのような有機的関係を持ち、機能しているのかを、より正確に記述することが可能になるものと期待される。

5.1.「質問文」生成に関する先行研究

冒頭で示したように、本章では、談話において文末に終止形語尾を持たない「中途終了発話文」が「質問文」として機能するとき、その発話の出現にあたっては、どのような条件、特徴を持つのか、また、それらは日本語と朝鮮語においてどのような差異をみせるのかについて分析を行なっていく。まず、本節では、議論の前提として、日本語の談話を対象とした先行研究において、「質問文」生成の条件が、どのように扱われてきたかを概観しておくことにしよう。なお、本稿では、「質問文」の中でも「中途終了発話文」という、文末に終止形語尾が現れない発話の出現に注目して分析を行なうため、「質問文」の生成がターンの終了とどのような関係を持つのかにも注目しておく必要がある。そこで、ここでは、金珍娥(2006)で「文の完結条件」とされる3つの条件、すなわち、音声的条件(phonetic condition)、形態論的条件(morphological condition)、統辞論的条件(syntactical condition)を援用し、いくつかの先行研究における「質問文」の生成条件に関する記述が、この「完結条件」といかなる関係を持つのか(一致するのか)を整理することにする。既存の研究における「質問文生成」に関する記述を表にまとめると、以下の【表 5-1】のようになる。なお、この表では、縦の欄に示されたいくつかの先行研究における「質問文生成」に関する条件が、横の欄に示した金珍娥(2006)の「文の完結条件」のうち、いずれに該当する

かを表示しているが、この3つの条件のうち、いずれにも該当しないものについては「その他」に分類している:

【表 5-1】主要先行研究における「質問文」の生成条件に関する記述

		金珍娥(2006)の分類			その他
		音声	形態	統辞論	
斉藤 (1989)	1. 文末に特定の助詞「か」を添える		○		
	2. 文中に疑問詞を用いる				○
	3. 文末の音調を上げる	○			
	4. 終助詞「な」「ね」を文末に追加して確認要求を表す		○		
	5. 「かしら」「かな(あ)」を文末に添える		○		
田中 (1998)	1. (疑問詞+) ~カ、~ノ(カ)? : 一般的な質問		○		(○)
	2. ~カシラ、~カナ、~ダロウカ: 疑い		○	○	
	3. ~デハナイカ、~(ヨ)ネ、~(ヨ)ナ、~ダロウ? : 同意要求・確認要求		○	○	
	4. ~カ(↓): 納得・詠嘆		○		
	5. 繰り返し				○
	6. 聞き返しのための感動詞				○
	7. 話を促すための接続詞			○	○
	8. 間接的な質問発話				○
中井 (2003a)	1. 「~か?」 (発話+終助詞「か」+上昇イントネーション)	○	○		
	2. 「~ね?」「~な?」 (発話+終助詞「ね」「な」+上昇イントネーション)	○	○		
	3. 「~かしら」「~かな(あ)」 (発話+終助詞「~かしら」「~かな(あ)」+下降イントネーション)	○	○		
	4. 「~でしょう/だろう?」 (発話+「~でしょう」+上昇イントネーション)	○		○	
	5. 疑問詞+「~でしょう/だろう。」+下降イントネーション	○		○	
	6. 文中に疑問詞を用いる				○
	7. 文末上昇イントネーション	○			
	8. 言い差しの文で、文末が平坦なイントネーション	○		○	
黄英哲 (2003)	1. 発話の末端で「ね/よね」が付く場合。		○		
	2. 発話の末端で「だろう↑/でしょう↑/でしょうか↑」が付く場合。	○		○	
	3. 発話の末端で「じゃない↑/じゃないですか↑/~はなかったんですか↑」などのような否定の形が付く場合。	○		○	
	4. 発話の冒頭に「じゃ/じゃあ/つまり」などの標識が用いられ、それに続いて情報要求者が応答者のことについて、推測や確認の発話を提示する場合。			○	○
	5. 疑問詞の付かない「~んですか」という疑問発話。			○	

斉藤(1989)は、日本語教育における「疑問文・質問文」をコミュニケーション上の機能という観点から分析したものである。この中では、ある「文」が、表中の5種の要素のうち1つ以上を持つ場合、「疑問文・質問文」として認められるとしている。ただし、この5つの項目をみると、南(1983、1985)など、国語学の論考にみられる「文文法」の「質問文」の分類を踏襲したものとなっており、「談話文法」として、発話文の特性を十分に反映したものとはなっていない。

田中(1998)は、会話における「質問発話」の効果について「対人的効果」と「会話発展上の効果」に分けて分析したものである。この中では、8種が示されているが、「感動詞」や「接続詞」という項目を新た

に導入したという点が注目される。そもそも「疑問・質問」の要素を持たない発話がなぜ「質問文」として機能しうるのかは、本稿における分析とも大きな関わりを持つものである。ただし、これらの品詞の具体的な出現項目については、明確な記述がないので、より体系的な記述をする必要があるともいえる。

中井(2003)は、話題開始部で用いられる「質問表現」について分析したもので、南(1985)、斎藤(1989)などにおける分類をふまえ、「質問文」を8種に再分類している。この中で8.「言い差しの文」は、中井(2003)で新たに加えられた項目で、「じゃ、今は一、有給で一、」(p.40)といった用例があげられている。このように「完全文」以外の発話形式を分類項目に取り入れたことは、言語事実の正確な記述に資するものと考えられるが、「言い差しの文」の定義や範囲については、詳細な記述がされていないため、さらなる分析が必要だともいえる。

黄英哲(2003)は、「情報要求」に対する応答発話の出現を「準備」と「展開」という点から分析したもので、5種が示されている。この分類をみると(インタビューという特殊な談話状況を分析対象としているためだと考えられるが)、基本的に「完全文」を前提としたものとなっており、本稿で分析対象としている「中途終了発話文」に相当する発話に関する記述はみられない。

以上、既存の研究における「質問文」生成に関する記述を概観した。一連の研究は、基本的に共通して、1回性のターンとしての発話文に観察される特徴に着目したものが多く、金珍娥(2006)で「文の完結条件」としている「音声」、「形態論」、「統辞論」という観点のいずれかに分類されるものがほとんどであった。また、分析対象が「完全文」や「終助詞」で終わる発話文に限定されがちで、「中途終了発話文」を分析したものや朝鮮語との対照を行なった研究は、ほとんど存在していない。第4章で述べたように、「質問」(情報要求)を表す発話は、日本語では40.1%、朝鮮語では27.5%が「中途終了発話文」により現れている。本稿では、こうした言語事実をふまえて、両言語に現れる「質問」の「中途終了発話文」を談話という枠組みの中で捉えなおし、その生成を可能にする要因について、詳細な分析を行なっていきたい。

5.2. 「中途終了発話文」が「質問文」として機能する要因

本節では、「中途終了発話文」が、「質問文」として機能することを可能にする要因について分析していく。これらの要因は、実現体としての発話文が持つ何らかの要素に見出されることになるが、こうした要素のことを本稿では「質問表示」と称することにする。本稿では、この「質問表示」を①発話文の表層に「質問」を表す要素が現れる「明示的な質問表示」と、②発話文の表層に「質問」を表す要素が現れない「非明示的な質問表示」に分類し、両言語において、それぞれの質問表示が、いかなる出現をみせるかを分析していくことにする⁷⁸。

5.2.1. 「明示的な質問表示」

⁷⁸ なお、本稿では、音声言語を媒介とした「言語行動」による相互作用の分析を主たる目的としているため、「非言語行動」についての項目は立てていない。

まず本項では、「明示的な質問表示」についてみることにする。これは、発話文のなんらかのレベルに「質問」を表す要素を表示することにより、対話者への明確な「発話意図」の伝達を志向するものである。この「明示的な質問表示」には、①「倒置」、②「疑問詞」、③「イントネーション[上昇]」が確認されたが、以下の【表 5-2】により、これらの出現様相をみてみると、①「倒置」は日本語で生起比率が高く、②「疑問詞」、③「イントネーション[上昇]」は朝鮮語で生起比率が高いこと、全体として「明示的な質問表示」は、朝鮮語談話において現れやすいことがわかる：

【表 5-2】「質問」を表す「中途終了発話文」における質問表示<1>
(明示的な質問表示)⁷⁹

	日本語	朝鮮語
①倒置	110 (32.1%)	60 (26.3%)
②疑問詞	46 (13.4%)	48 (21.1%)
③イントネーション[上昇]	103 (30.0%)	110 (48.2%)
①～③の合計発話文数/分析発話文数	259/343	218/228

各セル内: 当該発話文の出現数(分析発話文数に対する生起比率) ※重複あり。

以降では、①～③の「質問表示」ごとに用例をみながら、各項目の特徴について、さらなる分析を加えていくことにする。

まずは、①「倒置」についてみてみよう。倒置は、発話文の表層に疑問形の語尾が現れる場合を含むもので、日本語談話で朝鮮語談話の約2倍の出現を示しており、日本語談話における特徴的な質問表示となっている：

[例 5-1] (日本語談話)

JNB: 2つ年上ですね。

→JNB: そっか、じゃ、大台じゃないですか、今年…。[→]

JN8: そうです。大台ですけど、何か…<笑い>？。

次に、②「疑問詞」についてみる。発話文の表層に疑問詞を用いることによって、質問表示を行なうという、最も明示的な表示方法である：

[例 5-2] (朝鮮語談話)

KNB: 뭐, 처음 보는 사람을 찾느라고, 차라리 저랑 아는 사람이면 쉬운데(아-.),

처음 보는 사람 찾아야 돼서(아-.) 어렵게 연구하고 있어요<웃음>.

→KN4: 몇명이나…?. [→]

⁷⁹ 表中の最下段、「分析発話文数」は、分析対象となる「中途終了発話文」の総発話文数を示し、「①～③の合計発話文数」は、表中の各項目に含まれる発話文の重複を問わず、すべてを合計した数を示している。また、各項目の生起比率は、「①～③の合計発話文数」に対するものではなく、「分析発話文数」に対する比率により算出したものである。なお、本章では、この後で提示する【表 5-3】、【表 5-7】においても同様の方法で数値を示すことにする。

KNB: 예, 지금은 2 번째….

KN4: 아, 2 번째요?.

(日本語訳)

KNB: あの、初対面の人を探すのに、いっそのこと私の知り合いだったら楽なんだけど(あー)、初対面の人を探さなければならなくて(あー)、苦労して(研究して)います<笑い>。

→KN4: 何人くらい…? [→]

KNB: はい、今は2人目…。

KN4: あ、2人目ですか?

続いて、③「イントネーション[上昇]」は、朝鮮語において、特に高い生起比率をみせる項目である。朝鮮語談話における③「イントネーション[上昇]」の出現の中で特徴的なものとしては、「倒置文」における発話文末の上昇をあげることができる。具体的には、【主節、倒置要素】という統語論的構成における各部分のイントネーションについてみると、朝鮮語においては、日本語でも確認される【上昇[↑]、非上昇[→/↓]】というパターンに加え、【上昇[↑]、上昇[↑]】、【非上昇[→/↓]、上昇[↑]】というパターンが確認されており、発話文末が「上昇イントネーション」により実現されうることが確認された。このように朝鮮語話者は、発話文末において、音声による明示的な質問表示をすることによって、より強く対話者に働きかけ、発話意図の明確化、ターン譲渡の促進を図っているものと考えられる:

[例 5-3] (朝鮮語談話)

KN11: <웃으면서> 저 말고 이전 분하고는 무슨 대화를 하셨어요?.

KNB: 그, 고시에 대한 대화(<웃음>.), 고시….

→KN11: 관심 있으세요[↑], 고시에 대해서…?.[↑]

고시 공부….

KNB: 아니요, 아니요, 전에 대화 했던 분이(네.) 고시생이어서….

(日本語訳)

KN11: <笑いながら> 私の前の方とは、どんな会話をなさったんですか?

KNB: あの一、公務員試験についての会話(<笑い>)、試験…。

→KN11: 興味があるんですか[↑]、試験について…[↑]。試験勉強…。

KNB: いえ、いえ、前に話した方が(はい)、試験を受ける方で…。

以上、「中途終了発話文」に「明示的な質問表示」がなされ、「質問」の発話文が生成される場合について概観した。これらはいずれも発話文を「質問文」として機能させるため、より明確な質問表示をする発話装置であるが、上記の項目だけで、談話に現れるすべての分析発話形式の質問表示について説明ができるわけではない。すなわち、文の表層に「質問」を表示する何らかの装置を持たない「中途終了

発話文」については、依然として説明ができないままになる。そこで、次項では、これを解明するための、今ひとつの観点として「非明示的な質問表示」により「質問」を表す「中途終了発話文」が生成される場合を取り上げ、さらなる分析を行なうことにする。単独の発話文は、相互作用という文脈の中で、その意味が規定され、機能するものである。そのため、分析発話を先行発話との関係の中で捉えることによって、文法的には必ずしも「質問文」としての機能を持たない発話が、相互作用の中で「質問文」として機能することが可能になる要因は何であるかを探ることが可能になるはずである。

5.2.2.「非明示的な質問表示」

続いて、本項では、「非明示的な質問表示」についてみることにする。これは、本来、形式としては、「質問」の意味が付与されていない発話であるにも関わらず、相互作用において、「質問文」として機能することを可能にする要素で、具体的には、④「言いよどみ」、⑤「イントネーション[非上昇]」、⑥「間投詞」(フィラー)、⑦「接続詞」、⑧「指示代名詞」、⑨「先行発話の言い換え」、⑩「先行発話のくり返し」、⑪「とりたて助詞」、⑫「含意」の9項目が確認された。【表 5-3】により、これらの出現状況をみてみると、⑤「イントネーション[非上昇]」、⑥「間投詞」(フィラー)、⑦「接続詞」、⑧「指示代名詞」、⑨「先行発話の言い換え」、⑪「とりたて助詞」の6項目は、日本語で高い生起比率、出現実数の数値を示しており、「非明示的な質問表示」は、全体として、日本語談話で現れやすいことが確認できる：

【表 5-3】「質問」を表す「中途終了発話文」における質問表示<2>
(非明示的な質問表示)⁸⁰

	日本語	朝鮮語
④言いよどみ	19 (5.5%)	4 (1.8%)
⑤イントネーション[非上昇]	40 (11.7%)	9 (3.9%)
⑥間投詞(フィラー)	139 (40.5%)	64 (28.1%)
⑦接続詞	53 (15.5%)	17 (7.5%)
⑧指示代名詞	49 (14.3%)	22 (9.6%)
⑨先行発話の言い換え	37 (10.8%)	9 (3.9%)
⑩先行発話のくり返し	34 (9.9%)	28 (12.3%)
⑪とりたて助詞	28 (8.2%)	7 (3.1%)
⑫含意	23 (6.7%)	17 (7.5%)
④～⑫の合計発話文数／分析発話文数	422/343	177/228

各セル内：当該発話文の出現数（分析発話文数に対する生起比率） ※重複あり。

以降では、④～⑫の「質問表示」ごとに用例をみながら、各項目の特徴について、さらなる分析を加えていくことにする。

まず、④「言いよどみ」についてみてみよう。これは、「つかえ」(定延、中川(2005))などともよばれ、流暢な発話を妨げる非流暢性(disfluencies)を持つ発話であるとされるが、その一方で、先行発話者

⁸⁰ ③「イントネーション[上昇]」に関しては、すべての発話を計量化したが、⑤「イントネーション[非上昇]」に関しては、他の「質問表示」とともに選択され、必ずしも明確に「質問・疑問」を表す装置として機能しているとは言いきれないものもあるため、その他のいずれの項目にも当てはまらないもののみをここに入れてある。

が、ターンを保持することが困難な状況に陥った場合に使用されると、結果としてターンの交替を促進し、命題についての対話者の発話を誘発する機能を持つことがある。この「言いよどみ」には、発話者が、(1)発話につまりつつもターン保持への意志を示している場合、(2)言いかけて発話につまった場合、が特徴的に確認された。本稿で分析対象としたデータでは、若干ではあるが、日本語において多く出現している：

[例 5-4] (朝鮮語談話：言いよどみ①－ターン保持への意志⁸¹)

KNB: 아-, 정말요?.

KN3: 네<웃음>.

KNB:<웃음>.

KNB: 기자는 분야 있어야 되잖아요?.

→ 어떤, 그 - … . [→]

KN3: 대체로 기자는 전문 분야가 있다기 보다는(네 - .), 들어가서 여러가지 분야를 다….

(日本語訳)

KNB: あー、本当ですか？

KN3: はい<笑い>。

KNB: <笑い>。

KNB: 記者は分野がなくてはならないじゃないですか？

→ : どういう、その - … . [→]

KN3: だいたい、記者は専門分野があるというよりは(はい)、色々な分野を全部…。

[例 5-5] (日本語談話：言いよどみ②－言いかけて発話につまる)

JNB: 】【<あー、なるほどー>{>}。

JN3: まー。日常生活を送ってこうって感じです。

→ JNB: バイトとかも始め…?。[→]

JN3: バイトはことし今年'の夏[↑]、っていうか、もうアルバイト情報誌読んで…。

JNB: あー、これから…。

[例 5-4] (①)、[例 5-5] (②)におけるターン移行関連場所 (TRP: Transition Relevance Place) は、3.1.3.3.2. で示した本稿における「中途終了発話文」の形態論的下位分類の中では、①は「間投詞」、②は「非境界」⁸²で終わる発話に該当するが、これらの形式で終わる「中途終了発話文」が談話全体においてどの程度、現れているかを【表 3-9】により確認した結果、以下のような数値を示すことがわかった。

⁸¹ 朝鮮語で確認された例をみると、全4例とも[例 5-4]の例にみられるように疑問詞と共起したものであった。

⁸² 3.1.3.3.2. でも述べたように「間投詞」の中には、「はい」、「ええ」や、「네」(はい)、「응」(うん)といった「単純応答」、「あいづち」は含まれていない。また、「非境界」は、形態論的、統語論的区切りで終わらない発話をさす。

このデータをみてわかるように、日本語では朝鮮語に比べ、そもそも「言いよどみ」によるターンの交替が多く起こりやすいことが確認される：

【表 5-4】談話全体における「間投詞」、「非境界」で終わる「中途終了発話文」の出現数⁸³

	日本語	朝鮮語
間投詞	46	39
非境界	40	24
合計	86	63

各セル内：当該発話文の出現数

次に、⑤「イントネーション[非上昇]」についてみてみよう。これは、本来、「質問文」としての音声的特徴を持つものではないが、ターンを対話者に譲渡し、さらなる発話を引き出そうとする際に用いられるものである。このような質問表示は、日本語談話における「形式は「ダ体」発話だが、音声的には「ダ体」と認められない発話」(陳文敏(2000))に特徴的に認められる。以下の[例 5-6]は、日本語の初対面談話からの引用であるが、「→」で示された「質問」の「中途終了発話文」は、ためらいや遠慮を示すと同時に、あえて文末語尾による敬体表示を避けることにより、対話者との心的距離を縮めることにも貢献しており、ストラテジーとしての、ネガティブ・ポライトネス、ポジティブ・ポライトネスに同時に関与しているといえる：

[例 5-6] (日本語談話：初対面)

JNB: あー、ちなみに、こう、何をやられるんですか、こう、事務員をされて…。

JN10: あー、私はじ、人事なんく笑いながら＞ですよ。

JNB: あー、人事なんですね。

JN10: ええ、あんまり、あれなんですけど…。

→JNB: <笑い> 人をこう、異動させて…？。[→]

JN10: とか、採用とか、いろいろですね。

JNB: あー、そうなんですか。

ここから先、⑥「間投詞」(フィラー)から⑫「含意」の7項目では、「非明示的な質問表示」の中でも、先行発話との一貫性(coherence)⁸⁴を持ち、文脈からの意味的つながりに依存して、「質問文」の生成がなされる場合についてみていく。

まず、⑥「間投詞」(フィラー)についてみてみよう。杉戸(1987)で「実質的な発話中にあらわれる感動詞類」とされているもので、発話者自身の談話への関心や参与といった積極的態度的みならず、「情報

⁸³ 「非境界」は、特定の形態により分類された項目ではないため、ここでは、一定時間における出現をみるために、出現の実数基準により示している。

⁸⁴ 「結束性」に関する解釈は、研究者により様々である。例えば Halliday and Hasan(1976)では、それを意味論上の概念であるとしているが、本稿では、児玉(2004)に従い、「結束性」(cohesion)を統語論上の概念、「一貫性」(coherence)を意味上の概念として捉え、論を進めることにする。

要求」行為へのためらいや、遠慮をもマークしうるものである⁸⁵。日本語においては、全 12 項目中、最も出現の多い項目で、全体の約4割は何らかの間投詞(フィラー)を伴うという結果となった。発話開始部に現れる間投詞(フィラー)の出現様相を整理すると、以下のようになる:

【表 5-5】「質問」を表す「中途終了発話文」開始部における「間投詞」(フィラー)の出現数

日本語談話 (139)	あ、あー(66)、え(34)、う(一)ん(7)、へー(6)、 あの(一)(5)、ね(4)、はあ(4)、いや(4)、ふーん(3)、 あれ(2)、えっと(1)、おっ(1)、ほう(1)、まあ(1)
韓国語談話 (64)	아, 아-(38)、네(5)、 뭐(4)、그(4)、아니(3)、음(3)、 저기(3)、어(1)、응(1)、오(1)、하(1)
	あ、あー(38)、はい(5)、なんか(4)、その(4)、いや(3)、うーん(3)、 あの(3)、あ(1)、うん(1)、おー(1)、はあ(1)

():出現数

表をみると、「中途終了発話文」内部における質問表示としての「間投詞」(フィラー)の出現は、日本語談話において多く、特に「あ、あー」、「え」という2つの「間投詞」(フィラー)の出現が目立って多いことがわかる:

[例 5-7] (日本語談話)

JN19:それまで、今の環境で、<精一杯しなくっちゃいけないなと(なんか、うん。)は思って…>{< }
【】。

JNB: 【】<ひ、ひみつ主義じゃないけど…>{> }。

なんか、うん、うん、なんかこう組み入れない、<笑い>、感じがあるじゃない。

→JN19:あ、私…?。[↑]

JNB:うん。

次に、⑦「接続詞」についてみる。「文」と「文」を結びつける文法的機能を担う接続詞が、発話文中の任意の位置で使用されると、意味的機能としての「談話標識」機能が強く作用することにより、発話者の先行発話への態度、以降の談話展開への意図が推測可能になり、「応答」発話の出現を促進する場合がある。実際の談話データをみると、「中途終了発話文」に以下のような接続詞が用いられ、質問表示がされていることが確認された:

⁸⁵ ④「言いよどみ」で取り上げた「間投詞」(フィラー)は、発話文末における出現をみたものであったのに対し、本項目で取り上げる「間投詞」(フィラー)は、先行発話との関係を示すものに限定するために、発話開始部に現れるもののみを分析対象としている。

【表 5-6】「質問」を表す「中途終了発話文」内部における「接続詞」の出現数

日本語談話 (53)	じゃあ(21)、でも(14)、で／それで(9)、だから(5)、 だって(2)、そして(1)、だけど(1)
韓国語談話 (17)	그럼/그러면(9)、근데/그런데(6)、그러니까(2)
	じゃあ/それなら(9)、ところで(6)、だから(2)

():出現数

この表をみてわかるように、「中途終了発話文」内部における質問表示としての接続詞の出現は、日本語談話において多くなっており、出現項目の数も日本語の方で多く確認されている。なお、日本語談話では、以下の[例 5-8]のように接続詞が2つ現れる用例が確認されたのに対して、朝鮮語談話では、そのような例は確認されないという違いもみられた:

[例 5-8] (日本語談話)

JNB: いやー、別にあんま、そんな<おめでとうって感じです>{<}【。

JN7: 【】<でも… >{>}

あー、あー。

JNB: はい。

JN7: 優しいねー。

JNB: 正直…。<笑い>

→JN7: でも、じゃあ、お母さんと、お父さんと…?。[→]

JNB: そうです、3人暮らしで(ふーん。)、とりあえず…。

JN7: あー。

JNB: でも、何かちよいちよい帰って来るらしいですけどね…。

次に、⑧「指示代名詞」についてみてみよう。これは、「名詞」の一部を成す「指示代名詞」が発話文中で使用され、先行発話の内容に関し、言及するというものである。指示代名詞により、先行発話との「一貫性」を強く示すとともに、期待される後続発話の話題を提示し、結果として対話者から命題に関わる情報を引き出すことに貢献するものである:

[例 5-9] (日本語談話)

JNB: ご飯、ご飯も出る？。

JN3: ご飯はありとなしで別れるんですけど…。

→JNB: へー、え、それは、個人でやってる…?。[→]

JN3: いや、おっきな会社…。

JNB: おっきな会社がやってる。

JN3: はい。

次に、⑨「先行発話の言い換え」は、日本語において高い生起比率を示しているが、これは文法化が進んでいるといってもよいような形式が多く出現することに起因するものである。すなわち、日本語では、「-みたいな…?」、「-とか?」、「-ってこと?」などの比較的、固定化された文末形式が多く使用されるのに対し、朝鮮語ではこのような固定化された形式が多く使用されないという違いをみせている⁸⁶。以下は、友人同士の談話からの引用であるが、「-みたいな…?」が連続して使用されることにより、一定のリズムを創り出し、円滑な談話展開を促進していることがわかる：

[例 5-10] (日本語談話: 友人)

JNB: え、なんか、さよならっていうかー(うん。)、なんか、シフト決まなくて一、行けなくて…。

JN13: うん。

JNB: 行って、行きづらくなって(うん。)、みたいな…。

→JN13: あ、もうそのまま連絡取ってない、**みたいな…?**。[↑]

JNB: そうそう。

JN13: え、3回分の給料もらった？。

JNB: まだ5月のはもらってないけど(あー。)、15日だから、入ってたらうれしいなって感じ…。

続いて、⑩「先行発話のくり返し」についてみてみよう。これは、対話者による任意の先行発話内容を「くり返し」により取り出すことにより、当該内容に関する追加の説明、言及を対話者に求めるものである。後に第7章でもみるように、「くり返し発話」の中で「説明・確認要求」を表すものは、日本語より朝鮮語でより多く現れることが確認されているが⁸⁷、「中途終了発話文」の場合も、若干ではあるが朝鮮語の方で高い生起比率を示すという結果になった：

[例 5-11] (朝鮮語談話)

KN6: 저 같은 경우는 그(네.), 그 **심리학**과에(네.) 또 아는 누가 있어 가지고….

→KNB: **심리학**과…?. [↑]

KN6: 예, 심리학과요, 심리학과….

KNB: 아-.

⁸⁶ 「-みたいな」(「-みたいだ」の連体形)で終わる発話文について、金珍娥(2013)では、「みたいな文」と名付け、「緩衝表現」(buffering expression)を生成する1つの装置であると位置づけている。この他にも、加藤(2005)では、「-みたいな」に前接しうるものとして、(1)名詞、(2)述語を備えた文相当の発話、(3)文には満たないが、文の構成要素となる名詞以外の単位(節や補語や感動詞等)の発話があることを述べている。なお、この「-みたいな」という発話は、前接部分が持つ命題内容、および、その発話全体が持つ表現効果によって、ある時点における発話者の命題に対する心理状態を示そうとする表現であり、一種の語用論的な効果を狙った発話であると解釈することができる。このように命題(X)を表すために、ある言語形式(Y)の形を借りることは「仮託」とよばれており、藤田(2000)や加藤(2005)などに詳しい分析がある。

⁸⁷ 「非中途終了発話文」、「中途終了発話文」を問わずに分析している。

(日本語訳)

KN6:私の場合は、その(はい)、あの心理学科に(はい)、他に知っている人がいて…。

→KNB:心理学科…?[↑]

KN6:はい、心理学科です、心理学科…。

KNB:あー。

次に、⑪「とりたて助詞」は、日本語では「-は」、「-では」、「-って」など、朝鮮語では「-으/는」(・は)、「-에는」(・には)などを含む発話文である。特定の事物をとりたてて述べることにより、談話文脈に支えられながら、新たな話題が提示され、結果としてターンの交替が促進する場合である：

[例 5-12](日本語談話)

JN7:いやでも、やっぱし、でもやっぱし、やっぱし大学行ってるからそういうところに行ける(いやいやいやいや。)んでしょうねー。

JNB:どうなんですかね、うーん(ふーん。)やっぱでも、高卒とかですと、やっぱ工場とかが多いですね(あー。)、男の場合は…。

→JN7:あー、じゃあ、女子は…?。[→]

JNB:女子はどうなんですかね、あんま分かんないですけど…。

JN7:うん、＜笑い＞へえ。

最後に、⑫「含意」である。含意については、言語的な文脈というよりは、談話が展開する場における前提となる文脈や状況(例えば、談話参加者は大学の教室に対話者と2人でいて、これから数分間、話し続けなければならない、といった)、談話参加者間の関係などを語の選択に反映させたものである。談話が展開する特定の状況で、ある発話が現れた場合、そこにいる談話参加者にとっては、それが誰に對し、何を意味するものであるかが把握可能な発話のことである。これには、以下の[例 5-13]におけるJN2 の発話のように、明確な待遇表現(本例では「お名前」)を発話文中において使用することにより、対話者にある種の質問をしていることを明示する場合などがある⁸⁸：

[例 5-13](日本語談話：初対面談話の冒頭部分)

JN2:どうも、はじめまして。

JNB:あ、はじめまして。

→JN2:あ、えっとー、あの一、じゃあお名前、名前から…。

JNB:あ、えー、「JNB 姓」と申します。

JN2:あ、「JNB 姓」さんですか。

⁸⁸ 上掲の例では、「お名前」という「待遇マーカ」が、スピーチレベルを調節するとともに、対話者の私的領域に関わる「質問」であることをより明確に伝達する役割を果たしている。

JNB:はい。

JN2:あ、じゃあ「JN2 姓」と申します。

JNB:「JN2 姓」さん…。

JN2 はい。

5.3. まとめ

本章では、「質問」(情報要求)を表す「中途終了発話文」の出現について、周辺発話との関係という枠組みの中で分析を行なった。具体的には、任意の発話文が「質問」文として機能することを可能にする要素を「質問表示」と称し、この質問表示が両言語の「中途終了発話文」にいかに関与しているかを談話文脈の中で分析することにより、文末に終止形語尾を持たない発話文や、そもそも明示的な「質問」要素を持たない発話文が、ターンを構成し、「質問」文として機能する要因を探った。

質問表示には、「明示的な質問表示」、「非明示的な質問表示」という観点から抽出された 12 の項目が確認された。本章の分析で明らかになった全 12 の項目の出現を改めて整理するとともに、本章冒頭で示した金珍娥(2006)の「文の完結条件」との関係を整理すると、以下のようになる:

【表 5-7】「質問」を表す「中途終了発話文」生成における質問表示<3>

(【表 5-2】、【表 5-3】を合成)

		日本語	朝鮮語
明 示 的	①倒置	110 (32.1%)	60 (26.3%)
	②疑問詞	46 (13.4%)	48 (21.1%)
	③イントネーション[上昇]	103 (30.0%)	110 (48.2%)
非 明 示 的	④言いよどみ	19 (5.5%)	4 (1.8%)
	⑤イントネーション[非上昇]	40 (11.7%)	9 (3.9%)
	⑥間投詞(フィラー)	139 (40.5%)	64 (28.1%)
	⑦接続詞	53 (15.5%)	17 (7.5%)
	⑧指示代名詞	49 (14.3%)	22 (9.6%)
	⑨先行発話の言い換え	37 (10.8%)	9 (3.9%)
	⑩先行発話のくり返し	34 (9.9%)	28 (12.3%)
	⑪とりたて助詞	28 (8.2%)	7 (3.1%)
	⑫含意	23 (6.7%)	17 (7.5%)
①～⑫の合計発話文数/分析発話文数		681/343	395/228

各セル内:当該発話文の出現数(分析発話文数に対する生起比率) ※重複あり。

【表 5-8】「質問」を表す「中途終了発話文」の生成と質問表示⁸⁹

		金珍娥(2006)の分類			一貫性	品詞 (文中)	現れやすい 言語名
		音声	形態	統辞論			
明示的	①倒置		中途終了	○			日本語
	②疑問詞					○	朝鮮語
	③イントネーション[上昇]	○					朝鮮語
非明示的	④言いよどみ	○				○	
	⑤イントネーション[非上昇]	○					日本語
	⑥間投詞(フィラー)				○	○	日本語
	⑦接続詞				○	○	日本語
	⑧指示代名詞				○	○	日本語
	⑨先行発話の言い換え				○		日本語
	⑩先行発話のくり返し				○		
	⑪とりたて助詞				○	○	日本語
	⑫含意				○		

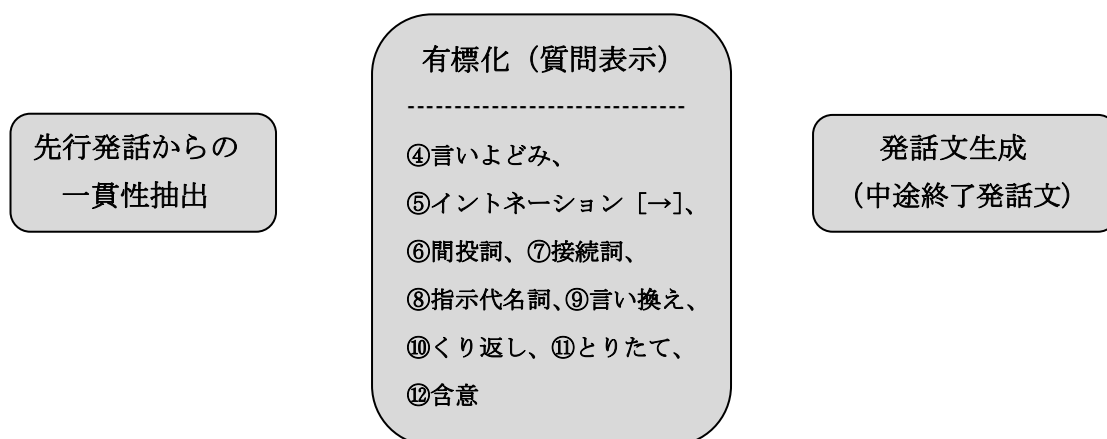
この表をみてわかるように、「中途終了発話文」という、文末に終止形式が現れない発話が「質問文」として機能することを可能にするのは、発話文表層における「明示的な質問表示」(①～③)が現れる場合のみならず、「非明示的な質問表示」(④～⑫)によるところも大きい。また、これら 12 種の「質問表示」は、談話文脈の中で、任意に組み合わせられ選択され、発話文の生成に寄与しており、生成された「質問文」は、ターンを構成し、談話文脈の中で、話題をデザインし、談話を展開していくための装置として機能する。なお、これらの「質問表示」要素の選択にあたっては、日本語では「非明示的な質問表示」を多用するのに対し、朝鮮語では「明示的な質問表示」を多用するという異なった傾向をみせる。こうした傾向は、日本語では、文脈や発話状況に依存した「質問」の「中途終了発話文」の生成がされやすく、反対に、朝鮮語では、形式や音声といったより明示的な要素による質問表示がなされない場合、日本語ほど「質問」の「中途終了発話文」が生成されにくいということを意味しており、両言語の発話文生成メカニズムの差異を示すものとなっている。

さらに、日本語談話においては、特に「非明示的な質問表示」の中でも「一貫性」を持つ「中途終了発話文」(⑥～⑫)が多く現れることが確認されたが、それは、以下のモデルが示すように、日本語では文中に現れる任意の要素(表現や品詞など)が、先行発話との一貫性の表示として機能することにより、発話文を「質問文」として有標化(marking)することが可能であるためである。一方で、朝鮮語では同様の要素に「質問文」としての有標化機能が日本語ほど付与されていない。朝鮮語で、このような有標化機能が相対的に強く機能しないことは、文末形式により「質問表示」がなされる「非中途終了発話文」や、「明示的な質問表示」による「中途終了発話文」が、日本語より朝鮮語で多く出現するという言語事実か

⁸⁹ 実際の談話に現れる個別の発話文をみると、各「質問表示」が、1つのみならず複数の「完結条件」を持つことがあるが、本表では、各項目において、特徴がよく現れていると考えられる項目を示してある。また、表中の③「言いよどみ」は、その類型によって、完結条件は異なる。なお、【表 5-7】に示した「質問表示」について、「①～⑫の合計発話文数」(重複を含めた述べ発話文数)に対する生起比率を算出し、カイ二乗検定を行なった結果、日本語では、⑤「イントネーション[非上昇]」($p<0.05$)、⑦「接続詞」($p<0.05$)、⑨「先行発話の言い換え」($p<0.05$)といった「非明示的な質問表示」の項目で、朝鮮語では、②「疑問詞」($p<0.01$)、③「イントネーション[上昇]」($p<0.001$)といった「明示的な質問表示」の項目で有意差を示すことが確認された。

らも窺え、日本語と朝鮮語における「発話(文)」を介したコミュニケーションスタイルの違いの一部を構成するものとなっている:

【「一貫性」表示による「質問」の「中途終了発話文」生成のメカニズム】



以上の分析から、両言語における「中途終了発話文」の生成は、必ずしも「音声」、「形態」、「統語」といったレベルのみによって規定されるものではないことが確認された。こうした発話文生成メカニズムの差異は、本章で行なったように実現形態としての発話文を、単独の発話文レベルのみならず、先行発話との有機的な関係に注目して分析することによってはじめて、解明が可能になるものである。本章では、文法体系が並行する両言語にあっても、談話における発話文の生成メカニズムは異なるという言語事実を示したが、今後はこのような事実に立脚して、「発話文」を「談話」という枠組みの中でさらに分析しながら、その存在の本質を記述していく必要があるだろう。

第6章 発話連鎖と談話構成

－「質問」と「応答」の連鎖を中心に－

第5章では、談話に現れる「中途終了発話文」を分析する際には、周辺発話の中でそれを捉えるという方法が有効であることを述べたうえで、その中でも特に「質問」を表す「中途終了発話文」について、先行発話との関わりから分析を行なった。しかし、考えてみれば、一連の相互作用の中で、ターンを引き取った後に産出される後続発話としての「質問」発話もまた、連鎖の開始点となるものである。そこで、本章では、「質問」を表す発話文を後続発話との連鎖組織(sequence organization)の中で捉えなおし、それらが日本語と朝鮮語の談話において、いかなる出現の差異をみせるかを分析することにより、「質問」発話のさらなる動的機能について解明することにした。第5章の冒頭で示したとおり、本章における研究課題は、以下のようなものである：

＜第6章 研究課題（再掲）＞

日本語と朝鮮語の談話において、「質問」から始まる発話連鎖が、いかなる出現様相をみせるかを明らかにする。具体的には、両言語の「質問」に対する「応答」発話は、「形式」や「機能」という観点からみたときに、いかなる出現の差異をみせ、相互作用の中で周辺発話と有機的関係を構築しているのかを示す。

このように本章において、発話連鎖という概念を導入するのは、対話者による応答発話の計量化データをみることで、「質問」発話の話者の意図がどのように実現されているのか、以降の発話にどのような影響を与えているのかを客観的にみることが可能になるためである。以降では、まず、主要な先行研究における「質問」→「応答」連鎖に関する記述を概観した後で、実際に両言語の談話において当該連鎖が、いかなる出現をみせるのかを分析していくことにする。

※本章の内容は、5年以内に刊行の可能性があるので、以降の公開を行なわない。

第7章 発話連鎖と「くり返し発話」

第5章、第6章では、「中途終了発話文」を先行発話や、後続発話との関係の中で分析することを通じて、談話における任意の発話文を分析するにあたっては、周辺発話の中でそれを捉えることが有効であることを論じてきた。中でも第5章では、「質問」を表す「中途終了発話文」の生成メカニズムについて分析を行ない、同発話文の出現にあたっては、先行発話からの「非明示的な質問表示」が大きな役割を担っていることを示した。本章では、それらの中でも特に「先行発話のくり返し」を取り上げ、発話文の出現をより多角的な観点から分析することにより、談話における動的機能について、さらなる特徴を解明することにする⁹⁰。

7.1. 「くり返し発話」とは

本章で分析対象とする「くり返し発話」(repetition)は、先行発話を意図的にくり返すことにより、一定の効果を狙った発話である。ここでは、まず議論の前提として、「くり返し発話」に関する先行研究を概観した後で、本稿における詳細な定義を示すことにする。

7.1.1. 「くり返し発話」に関する先行研究

くり返し発話に関する研究成果の蓄積は、日本語を対象としたものは比較的多い一方で、朝鮮語のそれは圧倒的に少ないという状況にある。このような状況に鑑みて、本項では、日本語に関する先行研究を中心に整理することにする。くり返し発話について分析する際に、問題となりうるものとしては、中田(1992)、岡部(2003)などでも指摘されているように、以下の5点が考えられる：

1) 誰の発話をくり返すか？

自分の発話のくり返しか、他者の発話のくり返しか、両方を含めるか。

2) どこ発話をくり返すか？

直前の発話のくり返しのみとするか、以前の発話のくり返しも含めるか。

3) どのような単位でくり返すか？

話段、文、節、句、語、音素のうち、どこからどこまでを対象とするか。また、あいづち発話や、フィラーのくり返し、実質的発話のあいづち的なくり返しをどのように同定するか。

4) どの程度くり返すか？

先行発話の完全なくり返し(再現)のみとするか、言い換え、要約も対象とするか。

5) どのような戦略として使用されているか？

⁹⁰ なお、ここで、複数ある「非明示的な質問表示」の中から、特に「くり返し発話」を取り上げたのは、「くり返し」発話が、(1)「形式」や「機能」という点からみたときに、先行発話との関係、「一貫性」が、より明確であること、(2)他の「一貫性」を持つ「質問表示」項目(5.2.2.参照)とは異なり、朝鮮語でも比較的、多い出現数をみせていることによるものである。

上記5項目のうち、1)から4)は、分析対象となる「くり返し発話」の認定範囲に関する項目で、5)はその分析における下位分類に関する項目である。以上のような観点をふまえ、既存の主要研究におけるくり返し発話の認定基準と、機能(ストラテジー)⁹¹に関する記述を整理すると、【表 7-1】のようになる。これをみると、ひとくちに「くり返し発話」といっても、その認定範囲は、研究者によって様々であることがわかる。そのため、例えば、1)「自分の発話のくり返し」と「他者の発話のくり返し」を合わせて扱った場合とそうでない場合では、その出現数や生起比率はもちろん、相互作用における機能(ストラテジー)にも違いが生じてくることが予想される：

【表 7-1】主要先行研究における「くり返し発話」の認定範囲と機能

	中田(1992)	田中(1997)	岡部(2003)	福富(2010)
1) 誰の発話を	自分+他者	他者	他者	他者
2) どの発話を	直前+以前	直前+以前	直前	直前+以前
3) どのような単位で	文・節・句・語	文・節・句・語	文・節・句・語	文・節・句・語
※あいづちに 関する記述	(記述なし)	「くり返し発話」をあいづちから切りはなして、独立した表現方法の一つとして扱う。	あいづちの「くり返し」も対象とする。	フィラーやあいづちの「くり返し」は認めない。ただし、何らかの意図を持ってくり返されたとみなされる場合は、対象とする。
4) どの程度	一言一句違わぬ再現だけでなく、意味を保持した言い換えや要約も下敷となった発話が特定できれば認める。	語形・意味の面で先行発話とほぼ同一のもの。	「直前の発話のすべてのくり返し」、「一部のくり返し」を含む(ただし、同じイントネーションであるものに限る)。	多少の言い換え(語順や発話末の変更)は許容するが、外来語や外国語から日本語、漢語から和語へのパラフレーズは含まない(逆の場合も同様)。
5) どのような機能(ストラテジー)	(大分類項目) 1. 関說的機能 2. 心情的機能 3. 動能的機能 4. 交話的機能 5. 詩的機能 6. メタ言語的機能 7. 談話構成的機能	1. 感想の表現 (驚き・感動・興味・不満・疑い・皮肉等) 2. 思考・感情の共有 -- 同じ思考・感情 -- 一体感 -- テーマに対する興味 -- 同様の知識 3. 発話を肯定する 4. からかい・遊び	1. 思考の共有 -- 意思決定の共有 -- 判断理由の共有 2. 感情の共有 -- 喜びの共有 -- 不満の共有 -- 驚きの共有 3. 情報の共有 -- 状況の共有 -- 信頼度の共有	1. 強調 2. 受信応答 3. 説明要求 4. 確認要求 5. 感情表出 6. 共感・一体感表出 7. 反論のやわらげ 8. 間つなぎ・時間稼ぎ 9. ことばのリズム・テンポ 10. 談話構成

中田(1992)は、日本語談話における「くり返し」発話のコミュニケーション機能を分析したものである。同論文では、7種の機能項目を設定し、用例とともに分析を行なっているが、これらは、Jakobson(1960)で示された「言語の6機能」に基礎を置くものであり、その枠組みは「くり返し発話」に特化したものというよりは、言語コミュニケーション全般に関する機能を還元したものになっている。また、この論文

⁹¹ 「くり返し」は、「発話連鎖」(生成)に関わる項目であるため、本稿では、「くり返し」という発話行為そのものに、3.2.2.1.において示した「発話機能」が付与されるとは考えない。そのため、本章では、後に示すように「談話展開機能」による「ストラテジー」という名のもとにこれを扱うことにするが、先行研究についてみるに際しては、慣例に従って、「機能」という術語を使用しておくことにする。

では、ターンの交替に大きな影響を果たすフィラーや、あいづち発話に関する記述がないため、相互作用における「くり返し」全般を扱うことが難しくなっている。

田中(1997)は、テレビのトーク番組における談話を分析したものである。この中では、4種の機能の大分類を立てているが、これは、編集がされた、連続性のない談話における「くり返し」発話の出現を扱ったものであるため、自然談話全般の「くり返し発話」の機能を示したものではない。

岡部(2003)は、課題解決場面における談話を対象とし、「くり返し」発話の出現を分析したものである。この中では、3種の機能の大分類が立てられている。この論文では、「直前」の発話に対する「くり返し」のみを扱っているため、談話文脈におけるその機能を分析しにくくなっているほか、ゲームの進行という、特定の課題解決場面における「くり返し」のみを扱っているため、やはり自然談話全般の「くり返し発話」の機能は示されていない。

福富(2010)は、「くり返し」発話を「コミュニケーションストラテジー」の一種と位置づけ、それが、日本語母語話者同士の談話、日本語学習者の接触場面における談話において、いかなる出現をみせるかを分析したものである。同論文では、機能の下位項目として10種を定め、比較的、精密な分類しているが、この論文の筆者も指摘するように、「複数の機能を同時に実現している例も少なくない」(p.117)という問題を抱えており、各項目の定義が厳密になされないと、分類が恣意的になりやすいという課題を残している。

以上、主要な先行研究における「くり返し」発話に関する記述を概観したが⁹²、これらの検討を通じて、フィラーや、あいづち発話の扱いに関する問題や、「くり返し発話」の再現位置や機能(ストラテジー)の同定に関する問題が確認された。また、分析対象となる言語資料の同定が重要であること、朝鮮語談話を扱った研究は、今のところほとんど存在していないことも確認した⁹³。本章では、こうした点をふまえ、両言語の自然談話に現れるくり返し発話について、「発話形式」と「(談話展開)機能」におけるストラテジーという観点から分析することにより、日本語と朝鮮語の発話文生成と、談話展開に関わるさらなる特徴を明らかにすることにする。なお、本章で分析対象とするくり返し発話の実現体は、「発話形式」としては、「中途終了発話文」のみならず「非中途終了発話文」も、「発話機能」としては、「要求」項目のみならず、その他の機能を有する場合も含めることにする。これらについても併せてみることで、談話全体におけるくり返し発話と、発話文の生成メカニズムについて、より体系的な記述が可能になるものと期待される。

7.1.2. 本稿における「くり返し発話」の定義

⁹² この他にも、中田(1991)、佐久間他(1997)、杉山(2002)、落合他(2006)、熊谷、木谷(2009)などにおいて「くり返し」に関する言及がみられる。

⁹³ 筆者は、高木(2008a、2010、2012)、다카기[高木](2008b)において、日本語と朝鮮語の自然談話に現れる「中途終了発話文」をザトラウスキー(1993)の「発話機能」の分類を援用して分析し、その中で「言い直し」(ザトラウスキーの術語)は、日本語でより多く現れると報告をしたことがある。ただし、これは初対面談話に現れる「中途終了発話文」に限定して分析を行なったものであるとともに、「言い直し」を発話機能に含めてもよいのかという問題も存在するため、談話全体における記述のためには、再考、修正の余地があると考えている。また、朝鮮語談話における「くり返し(発話)」は「반복」(反復)とよばれ、전영옥(1999)、이기갑(2006)などに記述がある。

本項では、7.1.1.でみた「くり返し発話」の分析に関わる5つの視点をふまえ、本稿における「くり返し発話」の認定範囲を提示する。なお、以下では、便宜上「くり返し」の対象となる先行発話を「被くり返し発話」とよぶことにする。本稿における「くり返し発話」の範囲とストラテジー項目は、以下のとおりである：

【本稿における「くり返し発話」の認定範囲とストラテジー項目】

1) 誰の発話をくり返すか？

相互作用における「くり返し発話」の出現をみるために、他者の発話のくり返しのみを分析対象とする。

2) どこ発話をくり返すか？

被くり返し発話の特定が可能であれば、直前の発話のくり返し、以前の発話のくり返し、共に分析対象とする。

3) どのような単位でくり返すか？

ターンを構成する主要要素である、文、節、句、語レベルのくり返しを分析対象とする。また、あいづち発話や、フィラーの意図的なくり返しも含めるほか、実質的発話のあいづち的なくり返しも分析対象とする（→下記5）－③）。

4) どの程度くり返すか？

対話者による先行発話の完全なくり返しのみならず、一部のくり返しも分析対象とする。また、「くり返し発話」の前にフィラーが挿入された場合や、A「明日行くの[→]」、B「明日行くの？[↑]」のように直前の発話のイントネーションのみを変え、そのままくり返した発話についても、分析対象に含める。ただし、先行発話内容を要約したものは含めない。

5) どのようなストラテジーとして使用されているか？

「くり返し発話」の「ストラテジー」を、第6章でみた「談話展開機能」に基づき細分化すると、以下の5項目が抽出された。ここでは、日本語による作例とともに示す：

I. 円滑な談話展開の志向／II. 対話者への配慮

①「感想・感情の共有(表示)」

先行発話に対する、喜び・驚き・不満といったある種の感情を表明する発話。

(例) A: あそこの店は、時給が 2,000 円なんだって…。

B: 2,000 円…！

②「情報・思考の共有(表示)」

先行発話に対する肯定、判断への同意、信頼を表す発話。

(例) A: 織田さんって、すごく面白い人で…。

B: うん、すごく面白い人で…。

③「認識・受信提供(表示)」⁹⁴

⁹⁴ 談話構成としては、杉戸(1987)で「あいづち的な発話」とされているもので、「先行する発話をそのままくりかえす、

先行発話への認識や情報受信を表す発話。一種のあいづち的な役割を果たす。

(例) A: 昨日、栄の地下街を歩いていたんですけどー…。

B: あ、栄の地下街…。

Ⅲ. 談話展開へのより強い関与／Ⅳ. 先行発話内容への情報追加

④「説明・確認要求」

先行発話内容に関し、さらなる説明要求を促したり、問い返したりする発話。

(例) A: 岡崎ってことは、三河弁ですか？

B: 三河弁、ですか？

Ⅴ. 時間稼ぎ

⑤「間つなぎ・時間稼ぎ」

円滑な発話遂行は行なえないものの、ターン保持への意志を示す発話。

(例) A: 豊橋も三河弁ですよ？

B: えーっと、豊橋も三河弁…。

以上、「くり返し発話」に関する理論的枠組みの構築を行なった。次節以降では、分析発話が、両言語の談話においていかなる出現をみせるかを分析していくことにする。

7.2. 「くり返し発話」の「形式」と「談話展開機能」

7.2.1. 「くり返し発話」の「形式」

本項では、日本語と朝鮮語の「くり返し発話」を「形式」という観点から分析し、「被くり返し発話」がいかなる形態・統語レベルで再現されているかを明らかにする。具体的には、2つの発話の関係を、①ターンとしての「被くり返し発話」全体をくり返しているかどうか、②完全にくり返しているかどうか、③「くり返し」発話が、どのような文法レベルで実現されているか、という観点から、以下の9種に分類し、その出現様相を分析する：

(1)「被くり返し発話」全体の完全な「くり返し」

a: 文レベル、b: 節・句レベル、c: 語レベル

(2)「被くり返し発話」一部の完全な「くり返し」

a: 文レベル、b: 節・句レベル、c: 語レベル

(3)「被くり返し発話」一部の形をやや変えた「くり返し」⁹⁵

オーム返し」(p.88)である。先行発話内容を受けて対話者へ積極的な働きかけをする、というよりは、あくまで対話者の発話を受け取ったということを示すものである。

⁹⁵ A「かなり暑いんだよね」、B「かなり暑いよね」のように、例えば助詞や助動詞を変えたりすることによって「言い換え」をする発話。ただし、A「デジタル化して文書を保存する機械で」、B「スキャナーですか」のように先行発話内容の語句による「言い換え」(要約)は含まない。当項目の設定に関しては、より詳細な議論の余地があるが、このことについては稿を改めることとし、本稿では田中(1997)に従い、「実質的な発話者の心的態度を示すものではない発話」、「語形・意味の面で『被くり返し発話』とほぼ同一で、新たな情報を付加するものではない発話」と定義しておく。

a: 文レベル、b: 節・句レベル、c: 語レベル

以上のような観点から日本語と朝鮮語の自然談話に現れる、「くり返し発話」の再現レベルを計量化したところ、【表 7-2】、【表 7-3】のような出現様相をみせることが確認された：

【表 7-2】「くり返し発話」の再現レベル —全体か、一部か—

		日本語		朝鮮語	
(1) 全体 完全	a 「文レベル」	42 (17.2%)	18 (7.4%)	23 (13.5%)	9 (5.3%)
	b 「節・句レベル」		8 (3.3%)		6 (3.5%)
	c 「語レベル」		16 (6.6%)		8 (4.7%)
(2) 一部 完全	a 「文レベル」	86 (35.2%)	20 (8.2%)	56 (32.9%)	11 (6.5%)
	b 「節・句レベル」		24 (9.8%)		7 (4.1%)
	c 「語レベル」		42 (17.2%)		38 (22.4%)
(3) 一部 やや変	a 「文レベル」	116 (47.5%)	62 (25.4%)	91 (53.5%)	39 (22.9%)
	b 「節・句レベル」		37 (15.2%)		23 (13.5%)
	c 「語レベル」		17 (7.0%)		29 (17.1%)
合計		244(100%)		170(100%)	

各セル内: 当該発話文の出現数(生起比率)

【表 7-3】「くり返し発話」の再現レベル —いかなる文法レベルか—

	日本語	朝鮮語
a 「文レベル」	100 (41.0%)	59 (34.7%)
b 「節・句レベル」	69 (28.3%)	36 (21.2%)
c 「語レベル」	75 (30.7%)	75 (44.1%)
合計	244 (100 %)	170 (100 %)

各セル内: 当該発話文の出現数(生起比率)

両表の合計欄により、談話全体における「くり返し発話」の出現数をみると、日本語では 244 例、朝鮮語では 170 例が確認されており⁹⁶、分析発話は、日本語においてより多く現れていることがわかる。このことは、談話文脈において発話文が生成される際に、日本語では朝鮮語に比べ、先行発話形式への依存度が高いということを示すものである。

まず、【表 7-2】により、全体、一部による再現レベルの出現分布をみると、両言語ともに(3)「一部をやや変えた」くり返しでもっとも高い生起比率をみせていることがわかる。また、両言語の差異についてみると、(1)、(2)「完全な」くり返しは日本語で、(3)「一部をやや変えた」くり返しは朝鮮語で相対的に高い生起比率をみせていることも確認される。このように異なる出現様相を示すのは、日本語では(2)「一部の完全な」くり返しの中でもb「節・句レベル」によるものが、朝鮮語では(3)「一部をやや変えた」くり返しの中でもc「語レベル」によるものが、それぞれ高い生起比率をみせることに起因するもので、これらはカイ二乗検定の結果でも、(2)bは5%水準の有意差が($p<0.05$)、(3)cは1%水準の有意差が($p<0.01$)

⁹⁶ なお、総発話文数に占める「くり返し発話」の生起比率は、日本語では 5.9%、朝鮮語では 4.3%であった。

確認されている。

さらに、【表 7-3】のくり返しの再現レベルの分布をみると、日本語ではa「文レベル」、b「節・句レベル」における出現が、朝鮮語ではc「語レベル」における出現が、相対的に高い生起比率を示していることがわかり、c「語レベル」については、カイ二乗検定の結果でも、1%水準の有意差が認められた($p<0.01$)⁹⁷。

このように日本語談話では、「完全な」くり返し、または「文／節・句レベル」のくり返しが、朝鮮語談話では「一部をやや変えた」くり返し、または「語レベル」のくり返しが、より多く現れるという傾向が確認されることが明らかになった。このように、日本語談話において、より「忠実」な再現を志向するのは、落合他(2006)で指摘されている、日本語談話における「くり返し」の「即行的、密着的な性格」(p.34)と関係があるとみられる⁹⁸。ここで、日本語談話における典型的な「くり返し発話」の例をみてみることにしよう：

[例 7-1](日本語談話)⁹⁹

JN11: そんな感じ分かります。

JNB: 何か丁寧に対応してくれるだろうっていう…。

JN11: 分かります、無害、＜笑いながら＞無害系…。

JN11: それは良いことですよ、非常に…。

→JNB: ＜笑い＞まあ、それは良いことですよね。① <文レベル>

⇒JN11: まあ、それは良いことですよね＜笑い＞。② <文レベル> ※全体・完全

JNB: ええ。

[例 7-1]は、JNB が＜他人によく道を尋ねられる＞という話をした後で、2人の対話者が互いに＜それは良いことだ＞と同意を表明しあっている場面である。この中で同意を表す部分の発話に注目してみると、例えば「そうですよね」や「そのとおりですね」といった表現ではなく、「まあ、それは良いことですよね」という、先行発話を「文レベル」で(そのまま)くり返した発話が見れていることがわかる。ここで、それぞれの話者は、意図的に言語表現を先行発話に合わせることによって、対話者と言語形式、内容を共有し、協調的関係を築こうとしたものと考えられるが、その後＜笑い＞や「ええ」という発話が見れていることからわかるように、結果としてこれらの発話は「思考の共有」を可能にし、さらには、対話者との距離の短縮、一体感の創出という一定の効果を生み出すことに成功している。

このように、協調的な関係を構築するという目的のもと、談話の現場における即行的な戦略として、先行発話に対するより「忠実」な再現が志向される例がみられるが、こうした戦略は、朝鮮語話者に比べ、日本語話者がより多く用いる傾向にあり、それが1つの要因となって日本語談話におい

⁹⁷ 繰り返しのレベルに関して、堀口(1997)では、くり返しは「発話が短い場合に限られる」(p.64)として、自立構成要素が3未満の場合がほとんどであると述べているが、実際の日本語談話では、この後、[例 7-1]に示すような自立構成要素が3以上の「文レベル」の「くり返し発話」も現れていることが確認されている。

⁹⁸ 同論文では、日本語と英語の談話における「同調促進装置」として、「くり返し」のほか「あいづち」、「テイクオーバー」を取り上げている。

⁹⁹ 本章において用例を提示する際は、「→」により「被くり返し発話」を、「⇒」により「くり返し発話」を示すことにする。

ては「完全な」くり返しや、「文レベル」のくり返しが多く現れるという違いをもたらしている¹⁰⁰。

ところで、日本語の「文レベル」の「くり返し発話」の今ひとつの特徴として、日本語談話における文末形式の構成要素の自由度の高さをあげることができる。例えば、下に示す[例 7-2]では、JN3 の「…現役が普通ですよねー、…」という発話を受けて、対話者である JNB は、先行発話をそのままくり返すのではなく、「ですよねー」のように、述部である文末形式の一部のみをくり返している。このように、日本語談話では、「文文法」において、拘束形態素 (bound morpheme) とされる要素 (本例では「-だ」) が、先行形態素との結合をせずに文頭に現れ、文レベルでの「くり返し」を実現する例が確認された。こうした例は、A「みんな行くらしいですね」、B「らしいですね」(作例)のように「助動詞」や「終助詞」を伴った文末表現において典型的にみられ、日本語談話における文末形式の構成要素の自由度の高さを示すものとなっている：

[例 7-2] (日本語談話)

JNB: 私もー、浪人して入ったクチなんですけど、結構多くないですか?、現役…。

そんなことないですかー?。

→JN3: そうですねー、現役が普通ですよねー、やっぱり…。

⇒JNB: ですよねー。 <文レベル>

なお、くり返しの再現レベルの分類において、b「節・句レベル」とc「語レベル」による実現形式は、本稿の「発話形式」の分類では、「中途終了発話文」の形をとるものであるが、これらの出現の実数を【表 7-3】により確認すると、b「節・句レベル」は日本語で多く、c「語レベル」は両言語で同数の出現を示すという違いをみせていることがわかる。そこで、このような違いをみせる要因を探るために、これらの「くり返し発話」が、談話に現れる「中途終了発話文」全体の中で、どの程度、現れているのかを【表 3-9】により調べてみたところ、以下のような数値を示すことがわかった：

【表 7-4】日本語と朝鮮語の「中途終了発話文」に占める「くり返し発話」の出現数と生起比率

	日本語	朝鮮語
b 「節・句レベル」	69/928 (7.4%)	36/659 (5.5%)
c 「語レベル」	75/509 (14.7%)	75/444 (16.9%)

「くり返し発話」の出現数／中途終了発話文の出現数(生起比率)

¹⁰⁰ こうした「くりかえし発話」は、Brown and Levinson (1987) における「ポライトネス理論」に当てはめてみた場合には、ポジティブ・フェイスに配慮した発話、すなわちポジティブ・ポライトネスであるとみることができよう。なお、「くり返し」という発話行為は、実現されるイントネーションによっては、フェイス侵害行為 (face threatening act: FTA) となることも予想される。ただし、そうした状況は、限定的な場面におけるものであり、本稿で分析対象とする談話には、そうした発話は確認されなかったため、ここでは日本語の「くり返し発話」を主にポジティブ・ポライトネスとの関係が深いものとして扱っておく。

この表をみてわかるように、「節・句レベル」の「くり返し発話」が、日本語で朝鮮語の約2倍の出現数を示すということは、そもそも日本語談話においては「節・句」で終わる「中途終了発話文」¹⁰¹が現れやすいという談話上の特徴と相関があるようである。一方で、「語レベル」の「くり返し発話」が、朝鮮語談話においても多く出現が確認されているのは、もともと朝鮮語談話でも、以下の[例 7-3]にみられるような「語」で終わる「中途終了発話文」¹⁰²が比較的多く現れるということと相関があるとみてよいだろう：

[例 7-3] (朝鮮語談話)

KN9: 몇 번 하셨어요? .

→KNB: 지금 이게 네 번째예요.

⇒KN9: 아, 네 번째... <語レベル> ※中途終了発話文

KNB: 거의 얘기할 것도 다 떨어졌어요.

(日本語訳)

KN9: 何回なさったんですか？

→KNB: 今のこれが4回目です。

⇒KN9: あ、4回目…。

KNB: ほとんど話すこともなくなっちゃいましたよ。

¹⁰¹ 【表 3-9】で示した本稿における「中途終了発話文」の形態論的下位分類の中では、以下の項目を含む：

<日本語>

I. 接続形(接続助詞)で終わるもの

- ①「-テ」、②「-ケド」、③「-ノデ」、④「-カラ」、⑤「-シ」、⑥「-バ」、⑦「-ト」、⑧「中止形」、⑨その他の接続形

II. 接続形(接続助詞)以外で終わるもの

- ⑩名詞＋助詞、⑬「-みたいな」、⑭引用形とその諸形式、⑯「-とか」、⑰連体形

<朝鮮語>

I. 接続形で終わるもの

- ①「-고」、②「-(으)ㄴ데／-는데／-던데」、③「-아/어서」、④「-(으)니까」、⑤「-(으)면」、⑥「-는지／-는지／-던지」、⑦「-지만」、⑧その他の接続形

II. 接続形以外で終わるもの

- ⑩名詞＋助詞、⑬引用形とその諸形式、⑰連体形

¹⁰² 【表 3-9】で示した本稿における「中途終了発話文」の形態論的下位分類の中では、以下の項目を含む：

<日本語>

II. 接続形(接続助詞)以外で終わるもの

- ⑩名詞、⑫副詞、⑮間投詞、⑱接続詞

<朝鮮語>

II. 接続形以外で終わるもの

- ⑨名詞、⑪副詞、⑫間投詞、⑭接続詞

7.2.2. 「くり返し発話」の「談話展開機能」

本項では、両言語の「くり返し発話」を 7.1.2. で示した「談話展開機能」による5種の戦略項目により分類し、両言語における分析発話の出現が、いかなる差異をみせるかを明らかにする。両言語における「くり返し発話」の「談話展開機能」による戦略項目ごとの出現様相は、以下のとおりである：

【表 7-5】「くり返し発話」の戦略項目別出現数と生起比率

	日本語	朝鮮語
①感想・感情の共有（表示）	40（16.4%）	15（8.8%）
②情報・思考の共有（表示）	91（37.3%）	36（21.2%）
③認識・受信提供（表示）	29（11.9%）	29（17.1%）
④説明・確認要求	67（27.5%）	76（44.7%）
⑤間つなぎ・時間稼ぎ	17（7.0%）	14（8.2%）
合計	244（100%）	170（100%）

セル内：当該発話文の出現数（生起比率）

各言語内における5つの戦略項目の出現分布をみると、日本語では②「情報・思考の共有（表示）」で最も高い生起比率をみせ、④「説明・確認要求」、①「感想・感情の共有（表示）」と続くのに対し、朝鮮語では④「説明・確認要求」が最も高い生起比率をみせ、②「情報・思考の共有（表示）」、③「認識・受信提供（表示）」が続くことが確認できる。

また、両言語の差異についてみると、①「感想・感情の共有（表示）」、②「情報・思考の共有（表示）」は、日本語で圧倒的に高い生起比率を示す一方で、④「説明・確認要求」は朝鮮語で高い生起比率を示しており、カイ二乗検定の結果をみても、①では 5%水準の有意差が($p<0.05$)、②、④では 0.1%水準の有意差が($p<0.001$)認められることが確認される。また、③「認識・受信提供（表示）」、⑤「間つなぎ、時間稼ぎ」は、大きな差が認められないということもわかる。

これらのことから、「くり返し発話」の「談話展開機能」と関連した戦略としては、日本語話者は先行発話への理解を示しながら、対話者の発話を引き出し、談話を進めていく「共有型」のスタイル（Ⅰ．円滑な談話展開の志向／Ⅱ．対話者への配慮）を好むのに対し、朝鮮語話者は先行発話内容への積極的な問いかけを行なうことにより談話を進めていく「要求型」のスタイル（Ⅲ．談話展開へのより強い関与／Ⅳ．先行発話情報への補足）を好むというスタイルの大きな違いを見出すことができる。以下は、対話者の先行発話に対する「くり返し」が日本語では「共有型」、朝鮮語では「要求型」として現れている例である。例をみてわかるように、両言語ともに一連の相互作用の中で同一の戦略としての「くり返し」を複数回使うことによって、リズムを作り、円滑な談話展開を可能にしている：

[例 7-4]（日本語談話）

→JN19: ガードが、<あるから…>{<}Ⅱ。

⇒JNB: Ⅱ<うん、ガードがあるから…>{>}。 <情報・思考の共有（表示）>

でも、昔に比べたら変わったよね。

JN19:うーん。

JNB:変わったというか、前はなんかこう、私もそうだけどすごい結構、なんか、あの一。

JN19:なんかこう、ずかずかと自分でも踏み込んで行くのが苦手だしね。

→JNB:踏みこまれるの、苦手だよね。

⇒JN19:踏みこまれてくるの、苦手…。 <情報・思考の共有(表示)>

JNB:なんかこうやってどんどんさ<肩まで>{<}【。

[例 7-5] (朝鮮語談話)

KN4: 언어학자예요?.

→KNB: 어, 어, 예, 언어를 언어쪽을(아-.) 연구하고 있고….

⇒KN4: 연구하고 있어요?. [↑] <説明・確認要求>

→KNB: /대학교명/ 대학교 지금 석사논문 때문에….

⇒KN4: 석사논문…?. [↑] <説明・確認要求>

KNB: 예, 예.

(日本語訳)

KN4: 言語学者ですか？

→KNB: えー、えー、はい、言語を、言語の方を(あー。)研究しています…。

⇒KN4: 研究しているんですか？ [↑]

→KNB: 「大学名」大学で今修士論文のために…。

⇒KN4: 修士論文…？ [↑]

KNB: はい、はい。

また、④「説明・確認要求」の「くり返し発話」は、朝鮮語においてより多く確認されたが、この発話がどのようなイントネーションで実現されるかを調べたところ、以下の【表 7-6】のような数値を示すことがわかった：

【表 7-6】「説明・確認要求」の「くり返し発話」のイントネーション

	日本語	朝鮮語
上昇イントネーション	31 (46.3%)	71 (93.4%)
非上昇イントネーション	36 (53.7%)	5 (6.6%)
合計	67 (100 %)	76 (100 %)

セル内: 当該発話文の出現数(生起比率)

この表をみてわかるように、同じ「説明・確認要求」を表す「くり返し発話」であっても日本語では非上

昇イントネーションによる発話が、上昇イントネーションによる発話より多く表れているのに対して、朝鮮語では上昇イントネーションによる発話のみが圧倒的に多く現れているという違いをみせている。下に示す[例 7-6]の日本語談話の場合をみても、先に[例 7-5]でみた朝鮮語談話における「説明・確認要求」の「くり返し発話」が上昇イントネーションで現れていたのとは異なり、非上昇イントネーションにより現れていることがわかる。このように、日本語では、朝鮮語ほど上昇イントネーションを伴った「確認要求」の「くり返し発話」が現れにくいということが確認されたが、これは日本語話者が、共有型のスタイルを好むことからわかるように、「要求」を明示的に表す発話により、対話者の私的領域に踏み込むことへ一種のためらいを感じることに起因するものだと考えられる。そのため、日本語話者は、非上昇イントネーションにより先行発話をくり返すことにより、対話者へターンの譲渡を促し、結果として「説明・確認要求」を行っているのである：

[例 7-6] (日本語談話)

JN7: ふーん、あ、じゃあ、お姉さまもそちらで…？。

→JNB: いやー、あ、でも、うちの会社なんですけど、表参道じゃなくて<小さな声で>お台場の…。

⇒JN7: お台場…。[→] <説明・確認要求> ※非上昇イントネーション

JNB: はい。

JN7: やっぱ今の子は違うなー。

7.3. まとめ

本章では、日本語と朝鮮語の自然談話に現れる「くり返し発話」を「発話形式」と「談話展開機能」という観点から対照し、その違いを分析した。分析の結果、日本語談話では、朝鮮語談話に比べ、「くり返し発話」が多く出現することが明らかになった。このことは、発話文生成における先行発話への依存度は、日本語談話でより高いということを意味するものである。

また、「発話形式」についてみると、日本語談話では、「完全な」くり返し、または「文／節・句レベル」のくり返し、朝鮮語談話では「一部をやや変えた」くり返し、または「語レベル」のくり返し、より多く現れるという傾向が確認されることが明らかになった。こうした特徴は、日本語話者が言語表現を対話者の発話に合わせた協調的な談話展開をより好むこと、日本語の発話文は、文末形式を構成する形態素の自由度が高いこと、朝鮮語談話では、そもそも「語レベル」で終わる中途終了発話文が現れやすいことなど関係するものである。

さらに、「談話展開機能」についてみると、日本語話者は「共有型」の、朝鮮語話者は「要求型」の談話展開を好むということも明らかになった。これは、「くり返し発話」が、日本語談話では、先行発話に対する感想・感情や、情報を共有し、ターンの譲渡を促すための発話装置として使用されているのに対して、朝鮮語談話では、説明や確認を要求し、ターンの譲渡を促すための発話装置として使用されている、という両言語における談話展開スタイルの違いを反映したものである。

第8章「発話文」に対する意識と談話における使用様相

本稿では、これまで、日本語と朝鮮語の談話に現れる「質問」(情報要求)を表す「中途終了発話文」の出現様相について、単文レベル(第4章)、周辺発話レベル(第5～6章)において分析してきた。また、発話連鎖と「くり返し」発話の機能についても分析を行なった(第7章)。具体的分析を行なう最後の章となる本章では、これまで明らかにしてきた結果をふまえ、日本語と朝鮮語の母語話者を対象とした発話文使用に関する質問紙調査の結果をみながら、言語使用者は、「中途終了発話文」をいかなる発話装置として認識し、使用しているのかを分析することにする。

※本章の内容は、5年以内に刊行の可能性があるので、以降の公開を行なわない。

第9章 結論

以上、本稿では、「日本語と朝鮮語の談話における形式と機能の関係—中途終了発話文の出現を中心に—」という題目のもと、日本語と朝鮮語の談話に現れる「発話文」の「形式」と「機能」について、「談話文法」という観点から分析を行ってきた。本章では、本稿において行ってきた分析結果を改めて整理し、総括をすることにする。具体的には、各章の議論で明らかになったことをふり返り、まとめるとともに、本稿における研究の意義、残された課題について述べる。

9.1. 本稿における議論

9.1.1. 各章における議論

本項では、これまで全8章にわたって展開してきた日本語と朝鮮語の談話に現れる「発話文」の「形式」と「機能」に関する議論をふり返り、各章で示した事項、明らかになった事項について整理することにする。

まず、第1章では、序論として、研究動機と問題の所在について述べるとともに、分析対象と方法論に関する前提を構築した。ここでは、談話と文章の区別や、談話分析と会話分析の方法論の違いについて、明確に示したうえで、本稿における分析対象が、「話されたことば」たる「談話」であること、分析過程においては、言語学における談話分析の手法を基本としながらも、社会学的観点を取り入れた会話分析の方法論も取り入れることを明らかにした。また、この章の最後では、これらの前提事項をふまえたうえで、本稿における議論の具体的展開についても述べた。

第2章では、調査、分析の方法について述べた。具体的には、本稿の研究において主たる分析対象となる各言語 21 語の2者間談話の参加者が、性別(男性・女性)、年代(10代後半・20代後半・40代前半)、親疎関係(初対面・友人)、年齢の上下差(対年上・対同年・対年下)という発話者の属性や、対話者との関係により、統制がなされたものであることを示すとともに、音声資料の文字化方法や、発話文認定の原則についても述べた。また、第8章で行なう、言語使用への意識の分析において用いる、質問紙調査の被験者情報についても述べた。

第3章では、日本語と朝鮮語の談話における品詞分類、用言の活用形、「発話形式」に関する理論的枠組みを構築した後、主要な先行研究において、「中途終了発話文」、「発話機能」がどのように論じられてきたかを概観し、それらに対する本稿の定義、下位分類を示した。また、それだけでなく、それぞれの出現状況について、計量化したデータもともにみた。

本稿における「中途終了発話文」の定義は、形態・統語論、話者交替と音声、発話意図伝達という3つの観点を取り入れており、発話に関わるより広い要素を考慮した精密な同定を可能にするものであ

る。

データの分析では、中途終了発話文の談話全体における生起比率は、日本語では 35.5%、朝鮮語では 28.5%を示し、日本語でより高い数値をみせること、形態論的下位分類は、日本語で 19 種、朝鮮語で 16 種の類型が確認され、日本語においてより多くの類型が存在することが明らかになった。また、談話における中途終了発話文の出現は、発話者の属性や、対話者との関係という観点からみたときには、日本語談話で相対的に広い使用域を持つということも確認された。これは、日本語談話では、40 代の話者や、初対面、対年上／年下といった関係において、中途終了発話文が多く出現することと関係するものである。

さらに、本稿における今一つの分析項目である「発話機能」については、8種の機能項目が確認され、日本語と朝鮮語の発話文が、相互作用において「情報の授受」に関わる発話機能を強く有していることも確認した。

第4章では、日本語と朝鮮語の談話における「形式」と「機能」の関係をみるために、特に中途終了発話文が「情報要求」という発話機能を持つ場合に焦点を当てて分析した。分析の手順としては、まず、情報要求発話を「談話機能」により、①「同意・同調」を求める発話、②「意味交渉・確認」を求める発話、③「情報」を求める発話に分類したうえで、それらの談話における出現様相について、形式と機能という観点から、発話者の属性や、対話者との関係という要因ごとに分析を行なった。

分析の結果、談話における実現形態としての情報要求の中途終了発話文は、両言語の談話文脈の中で、それぞれ異なる発話効果を生み出す装置として機能しており、話者はそれらを相互作用の中でポライトネスやスピーチレベルを調整するための戦略として異なる場面で選択、使用していることが確認された。具体的には、それらの差異を形成する要因として深く関わっているのは、発話者の年代と親疎関係であり、そのあとに年齢の上下差が続き、発話者の性別による違いは小さい、ということが明らかになった。また、非中途終了発話文については、発話者の属性や、対話者との関係といった要因が、発話文の出現に与える影響は弱いということも確認された。上記の結果は、両言語で並行した「形式」であっても、実際の言語使用のレベルにおいては異なる「機能」を持ち、異なる出現を示すということ、言い換えれば、ある場面や状況における発話行為を行なう際に、選択される形式は言語によって異なりうる、ということの意味するもので、両言語の談話の差異を記述するうえで注目すべき現象であるといえる。

第5章では、質問(情報要求)を表す中途終了発話文の出現について、周辺発話との関係という枠組みの中で分析を行なった。分析の手順としては、任意の発話文が質問文として機能することを可能にする要素を「質問表示」と称し、この質問表示が両言語の中途終了発話文にいかんにかに現れているかを談話文脈の中で分析することにより、文末に終止形語尾を持たない発話文や、そもそも明示的な質問要素を持たない発話文が、ターンを構成し、質問文として機能する要因を探った。

分析の結果、中途終了発話文という、文末に終止形式が現れない発話が質問文として機能することを可能にするのは、発話文表層における明示的な質問表示(3種)が現れる場合のみならず、非明示的

な質問表示(9種)によるところも大きいことが明らかになった。なお、これらの「質問表示」要素の選択にあたっては、日本語では非明示的な質問表示を多用するのに対し、朝鮮語では明示的な質問表示を多用するという異なった傾向をみせる。こうした傾向は、日本語では、文脈や発話状況に負った質問の中途終了発話文の生成がされやすく、反対に、朝鮮語では、形式や音声といったより明示的な要素による質問表示がなされない場合、日本語ほど質問の中途終了発話文が生成されにくいということを意味しており、両言語の発話文生成メカニズムの差異を示すものとなっている。

さらに、日本語談話においては、特に非明示的な質問表示の中でも「一貫性」を持つ中途終了発話文が多く現れることが確認されたが、それは、日本語では文中に現れる任意の要素(表現や品詞など)が、先行発話との一貫性の表示として機能することにより、発話文を「質問文」として有標化することが可能であるためである。一方で、朝鮮語では同様の要素に質問文としての有標化機能が日本語ほど付与されていない。朝鮮語で、このような有標化機能が相対的に強く機能しないことは、文末形式により質問表示がなされる非中途終了発話文や、明示的な質問表示による中途終了発話文が、日本語より朝鮮語で多く出現するという言語事実からも窺え、日本語と朝鮮語における発話(文)を介したコミュニケーションスタイルの違いの一部を構成するものとなっている。

第6章では、「質問」を表す発話文の動的機能を解明するために、「発話連鎖」という概念を導入し、質問発話としての中途終了発話文、非中途終了発話文が、いかなる連鎖組織を生み出し、以降の談話展開に影響を与えているのかを分析した。

※本部分の内容は、5年以内に刊行の可能性があるので、以降の公開を行わない。

第7章では、談話展開上の戦略として用いられる「くり返し発話」の出現について「形式」と「談話展開機能」という観点から分析を行ない、日本語と朝鮮語の発話文生成と、談話展開に関するさらなる特徴を明らかにした。また、くり返し発話と中途終了発話文生成の関係についても論じた。

分析の結果、日本語談話では、朝鮮語談話に比べ、くり返し発話が多く出現することが明らかになった。このことは、発話文生成における先行発話への依存度は、日本語談話でより高いということを意味するものである。

また、発話形式についてみると、日本語談話では、完全なくり返し、または、文／節・句レベルのくり返しだが、朝鮮語談話では、一部をやや変えたくり返し、または、語レベルのくり返しだが、より多く現れるという傾向が確認されることが明らかになった。こうした特徴は、日本語話者が言語表現を対話者の発話に合わせた協調的な談話展開をより好むこと、日本語の発話文は、文末形式を構成する形態素の自由度が高いこと、朝鮮語談話では、そもそも語レベルで終わる中途終了発話文が現れやすいことなどに関係するものである。

さらに、談話展開機能についてみると、日本語話者は共有型の、朝鮮語話者は要求型の談話展開を好むということも明らかになった。これは、くり返し発話が、日本語談話では、先行発話に対する感想・感情や、情報を共有し、ターンの譲渡を促すための発話装置として使用されているのに対して、朝鮮語談話では、説明や確認を要求し、ターンの譲渡を促すための発話装置として使用されている、という両言

語における談話展開スタイルの違いを反映したものである。

第8章では、第4章から第7章まで述べてきた内容をふまえ、両言語の母語話者を対象に実施した質問紙調査の結果を分析し、「発話文」に対する意識と、談話における使用様相についてさらなる考察を行なった。

※本部分の内容は、5年以内に刊行の可能性があるため、以降の公開を行なわない。

以上、本項では、第1章から第8章において述べてきた事項を改めて概観した。次項では、これらの事項を有機的に結合し、本稿全体における結論を述べることにする。

9.1.2. 本稿全体における結論

※本部分の内容は、5年以内に刊行の可能性があるため、以降の公開を行なわない。

9.2. 本稿における研究の意義・課題

本節では、本稿で行なってきた一連の研究が、研究史上、いかなる意義を持つのかについて述べた後、本研究において解明しえなかった事項と、今後の研究課題について述べることにする。

9.2.1. 本稿における研究の意義

本稿では、実際の日本語と朝鮮語の談話において「音声」として生成された「発話文」を分析対象とし、その「形式」と「機能」がいかなる差異をみせるのかを、「談話文法」という観点から分析してきた。本項では、本稿における研究の意義を(1)談話分析における貢献、(2)日朝対照研究における貢献、(3)隣接分野における貢献という3つの観点から述べることにする：

(1) 談話分析における貢献—「談話文法」という枠組みにおける言語記述

1つめの意義として、談話分析における貢献があげられる。9.1.1においても述べたとおり、本稿の分析により、「文文法」において類似した文法体系を持つといわれる日本語と朝鮮語にあっても、日常の言語使用において産出される発話文をみると、必ずしも類似した出現をみせるとは限らないという事実が明らかになった。これは、本稿における研究が、実際に「音声」として産出された「談話」を分析対象とし、その実現形態を「談話文法」として帰納的に分析するという方法を採用したからこそ可能になったものである。また、本稿では、分析形式として、「中途終了発話文」を定め、論を展開してきたが、この発話の出現についてみる際にも、単独の「発話文」レベルにおける分析のみならず、先行発話からの発話文生成、後続発話への発話連鎖など、談話を構成するより多角的な視点を導入し、分析することを試みてきた。こうした発話文出現の実態をより深層的に記述することを可能にしたのも、やはり本稿が、この「談話文法」の記述という方法論を導入したことによるところが大きいといえる。先にも述べたことがあるが、「中途終了発話文」という、いわゆる不完全な発話は、ともすれば「非文法的な形式」として、その発話の本質

が見逃されがちである。しかし、本稿の調査により明らかになったように、実際の談話において、例えば「質問」を表す「中途終了発話文」は、日本語では 40.1%、朝鮮語では 27.5%の生起比率を示しており、相互作用における発話装置として、決して無視できるものではない。本稿における分析は、今後の「談話分析」が進むべき1つの方向性を示唆したものであり、「談話」という言語事実に立脚した文法の記述が、言語学によって扱われるべき領域として存在するものであることを示したものであつたといえるだろう。

(2) 日朝対照研究における貢献—日本語と朝鮮語の談話レベルにおける対照

今ひとつの意義として、日韓対照研究における貢献があげられる。第3章から第7章で参考文献を概観した際にも述べたが、日本語と朝鮮語は、しばしば文法体系が類似しているといわれる一方で、談話に現れる発話文を「形式」と「機能」という観点から対照した研究は、これまでのところ、そう多くは存在していなかった。そこで、本稿では、両言語の実現形態としての発話文を談話レベルで対照するという試みを行なったが、その結果、個別の言語の分析では明らかにされない多くの点が浮き彫りとなった。こうした対照研究は、文法体系が類似する言語同士であるからこそ、意味を持つものであるとともに、両言語で均質な談話データの採集が行なわれてこそ可能になるものでもある。以上のような意味で、本稿の研究は、日本語学と朝鮮語学の対照言語学における新たな研究方法を開拓するものとなったといえることができるだろう。

(3) 「隣接分野」における貢献—言語事実の応用へ

最後に隣接分野における貢献についてあげておきたい。本稿における研究は、言語学の一部分を構成する「社会言語学」の中でも、「談話分析」という領域を扱ったものであるが、この領域は、周辺の多様な隣接分野との結びつきを持つものである。こうした観点から見たときに、本稿の研究は、例えば、日本語教育や朝鮮語教育といった言語教育だけでなく、翻訳・通訳論、異文化コミュニケーションといった分野にも資するところが大きいといえる。特に外国語教育においては、「会話」という言語教育の根幹をなす分野における、より実践的な教授法の開発を可能にするほか、言語形式のみによらない発話意図の伝達や、ミス・コミュニケーションといった広義の対人コミュニケーションの問題にまで解決の糸口を与えることを可能にするだろう。今後は、本稿において明らかになった言語事実、およびその分析内容を隣接分野にいかに適用しつつ、貢献していくか、という具体的方法についても、考えを深めていく必要があると考えている。

9.2.2. 本稿における研究の課題

続いて、本稿における研究の課題について述べることにする。具体的には、(1)より多様な「形式」、「機能」に関する分析、(2)より広範囲な枠組みとしての「談話分析」という観点から述べる：

(1) より多様な「形式」、「機能」に関する分析

本稿における研究は、「談話」に現れる種々の発話文の中でも「中途終了発話文」という限定された

発話形式を扱ったものであり、その分析対象となる発話機能も主に「質問」(情報要求)という限定されたものであった。そのため、「中途終了発話文」の「質問」(情報要求)以外の発話機能や、「完全文」、「終助詞／丁寧化のマーカ―終了発話文」、「フィラー」といった発話形式が持つ発話機能についての分析は、十分に行なうことができなかった。さらには、「中途終了発話文」の分析においても、文法化された「接続形」(接続助詞)に関しては、十分な分析が行なえず、課題として残った。今後は、談話という相互作用を構成するより多様な形式、機能についても、丁寧に用例を採集し、発話者の属性や、対話者との関係といった点も含め、さらに精密な分析をしていく必要があると考えている。

(2)より広範囲な枠組みとしての「談話分析」

本稿では、発話文についてみる際に、単独の発話文レベルのみならず、周辺発話との関係という枠組みを導入して分析を行なってきた。これは、発話文をより広範囲な枠組みの中で捉える、という意味においては、既存の研究にみられない独自性を持つものであったといえるが、分析対象としては、第2部分の発話までをみたにすぎず、言語が実際に使用される場面における談話の全体像については、十分に示すことができなかった。また、本稿では、談話に現れる発話文の「形式」と「機能」に注目することにより、発話文生成要因の「多層性」を示したが、生成要因について、決して網羅的な分析が行なえたというわけではない。今後は、上位レベルの談話構成単位も視野に入れつつ、より多角的な視点から発話文の出現を捉え、分析を行なっていきたいと考えている。

本稿では、「談話」という相互作用における言語表現の中で、「完全文」が、必ずしも絶対不可欠なものであるとは限らないという主張を出発点として、「談話文法」という観点から考察を重ねてきた。一連の議論により、言語使用の場面においては、発話文レベルにおける要因、発話連鎖(談話展開)における要因、談話参与者における要因など、様々な要素が関係し合い、種々の「発話形式」、「発話機能」が選択されており、さらに選択された発話自体もまた、後続の発話文の生成に影響を与えるものとして談話内で機能しているということが明らかになった。これらの分析から、談話における発話文は、もはや単一的な「形式」と「意味」の関係によってのみ規定されるものではなく、言語が使用される場としての談話文脈という複雑な体系の中で存在していることが証明できたと考える。

以上のような言語事実は、Hymes がいう「様々な話し方がその地域社会における記号形態の集合の1つとして理解されるような種のもの」を構成する要素となるものである。これまでくり返し述べてきたように、このような言語使用の動的側面の記述は、「談話」という言語事実に真摯に向き合い、それを構成する様々な要素を適切に抽出する方法なくしては、成しえるものではない。本稿における議論では、発話生成要素の「多層性」の存在を示すために、限りなく広がる談話の世界のごく一部をみたにすぎないが、今後は、より多くのサンプル数を確保しつつ、「談話」を構成する「発話文」について、または、任意の「形式」が選択され、「機能」が付与される要因について、さらなる分析と記述を行なっていかなければならないと考える。今後も日朝対照研究という枠組みにおける「談話文法」としての「発話文」の記述を続けていきたい。

参考文献一覧

1. 日本語で書かれたもの(筆者の五十音順)

- 池上嘉彦(1985)『意味論・文体論』東京:大修館書店
- 石川創(2010)「あいづちとの比較によるフィラーの機能分析」『早稲田日本語教育研究』19 東京:早稲田日本語教育学会
- 岩田祐子、重光由加、村田泰美(2013)『概説:社会言語学』東京:ひつじ書房
- 宇佐美まゆみ(1995)「談話レベルから見た敬語使用—スピーチレベルシフト生起の条件と機能」『学苑』662 東京:昭和女子大学 近代文化研究所
- 宇佐美まゆみ(2003)「異文化接触とポライトネス—ディスコース・ポライトネス理論の観点から—」『国語学』54-3 東京:日本語学会
- 宇佐美まゆみ(2007)「改訂版:基本的な文字化の原則(Basic Transcription System for Japanese: BTSJ)」『談話研究と日本語教育の有機的統合のための基礎的研究とマルチメディア教材の試作』平成 15-18 年度 科学研究費補助金 基盤研究 B(2)研究成果報告書 東京:東京外国語大学
- 宇佐美まゆみ、嶺田明美(1995)「対話相手に応じた発話導入の仕方とその展開パターン:初対面二者間の会話分析より」『名古屋学院大学日本語学・日本語教育論集』2 愛知:名古屋学院大学
- 梅木俊輔(2009)「ターン管理と発話連鎖への期待に関する一考察—韓日接触場面における情報要求場面を中心に—」『言語科学論集』13 宮城:東北大学
- 岡部悦子(2003)「課題解決場面における「くり返し」」『早稲田大学日本語研究教育センター紀要』16 東京:早稲田大学日本語研究教育センター
- 荻原稚佳子(2011)「日本語母語話者による自由会話における「言いさし」の使用と解釈」『明海大学外国語学論集』23 千葉:明海大学
- 小田美恵子(2002)「中途終了型発話の横断的研究—中上級韓国人学習者の発話から—」『龍谷大学国際センター研究年報』11 京都:龍谷大学国際センター
- 落合るみ子、植野貴志子、野村佑子(2006)「日本語会話における同調促進装置としてのあいづち、繰り返し、テイクオーバー:米語会話との比較から」『日本女子大学大学院 文学研究科紀要』12 東京:日本女子大学大学院 文学研究科
- 加藤陽子(2005)「話し言葉における発話末の「みたいな」について」『日本語教育』124 東京:日本語教育学会
- 亀井孝、河野六郎、千野栄一編(1996)『言語学大辞典 第6巻 術語編』第1刷 東京:三省堂
- 菅野裕臣(1981)『朝鮮語の入門』東京:白水社
- 菅野裕臣著、浜ノ上幸、権容璟改訂(2007)『朝鮮語の入門 改訂版』東京:白水社
- 菅野裕臣、早川嘉春、志部昭平、浜田耕策、松原孝俊、野間秀樹、塩田今日子、伊藤英人(1988)『コスモス朝和辞典』東京:白水社
- 木暮律子(2001)「表現形式から見た発話権取得の方法—情報要求発話を受け継ぐ場合—」『平成 13 年

- 度日本語教育学会 第9回研究集会 予稿集』東京:日本語教育学会
- 金敬善(1998)「電話会話における終結部展開の韓日対照:一主要部と終結部のかかわりを中心に一」『紀要』28 大阪:大阪女学院大学・短期大学
- 金庚芬(2002)「「ほめに対する返答」の日韓対照研究」『言語・地域文化研究』8 東京外国語大学大学院地域文化研究科
- 金志宣(2000)「turn 及び turn-taking のカテゴリー化の試みー韓・日の対照会話分析」『日本語教育』105 東京:日本語教育学会
- 金智賢(2008)「韓国語と日本語の談話における「無助詞」の対照研究ー現場性と主題を手がかりに」『言語情報科学』6 東京:東京大学大学院総合文化研究科言語情報科学専攻
- 金珍娥(2002)「日本語と韓国語における談話ストラテジーとしてのスピーチレベルシフト」『朝鮮学報』183 奈良:朝鮮学会
- 金珍娥(2004a)「韓国語と日本語の turn の展開から見たあいづち発話」『朝鮮学報』191 奈良:朝鮮学会
- 金珍娥(2004b)「韓国語と日本語の文, 発話単位, turnー談話分析のための文字化システムによせてー」『朝鮮語研究2』東京:くろしお出版
- 金珍娥(2006)「日本語と韓国語の談話における文末の構造」東京外国語大学 博士学位論文(非刊行) 東京:東京外国語大学大学院
- 金珍娥(2010)「〈非述語文〉の現れ方と discourse syntaxー日本語と韓国語の談話から」『朝鮮学報』217 奈良:朝鮮学会
- 金珍娥(2013)『談話論と文法論ー日本語と韓国語を照らす』東京:くろしお出版
- 串田秀也(2007)「第16回ワークショップ 日本語会話における WH 質問ー応答連鎖」『社会言語科学』9-2 東京:社会言語科学会
- 串田秀也、好井裕明(2010)『エスノメソドロジーを学ぶ人のために』京都:世界思想社
- 久野暉(1978)『談話の文法』東京:大修館書店
- 熊谷智子、木谷直之(2009)「発話の繰り返し、語りの重ね合いー三者面接調査における共感表出行動ー」『待遇コミュニケーション研究』6 東京:待遇コミュニケーション学会
- 元智恩(2005)「断わりとして用いられた日韓両言語の「中途終了文」ーボライテネスの観点からー」『日本語科学』18 東京:国立国語研究所『日本語科学』編集委員会
- 嚴廷美(2001)「日本語と韓国語の言いわけ表現の対照研究:依頼談話の場合」言語文化研究 20-2 愛媛:松山大学
- 小泉保編(2000)『言語研究における機能主義』東京:くろしお出版
- 黄英哲(2003)「情報要求に対する応答発話の準備と展開の技術についてー日本語のインタビュー会話をデータにした記述ー」『比較社会文化研究』14 福岡:九州大学
- 河野六郎(1977)「文字の本質」『岩波講座 日本語 8 文字』東京:岩波書店
- 国語教育研究所(1988)『国語教育研究大辞典』東京:明治図書出版
- 国立国語研究所(1951)『現代語の助詞・助動詞』秀英出版(倒産)

- 国立国語研究所(1955)『談話語の実態』秀英出版(倒産)
- 国立国語研究所(1960)『話しことばの文型(1)——対話資料による研究——』東京:秀英出版
- 国立国語研究所(1987)『日本語教育映画基礎編 総合文型表』東京:日本シネセル株式会社
- 児玉徳美(2004)『意味分析の新展開—ことばの広がりに応える—』東京:開拓社
- 斎藤里美(1989)「日本語教育における疑問文・質問文—コミュニケーション上の機能からみた日本語教材の課題—」『日本語学』8・7 東京:明治書院
- 佐久間まゆみ(1987)「文段認定の一基準(Ⅰ)—提題表現の統括—」『文藝言語研究言語編』11 茨城:筑波大学文芸・言語学系
- 佐久間まゆみ(1990)「文段認定の一基準(Ⅱ)—接続表現の統括—」『文藝言語研究言語編』17 茨城:筑波大学文芸・言語学系
- 佐久間まゆみ(1992)「文章と文一段の文脈の統括—」『日本語学』11(4) 東京:明治書院
- 佐久間まゆみ(2003)「文章・談話における『段』の統括機能」佐久間まゆみ編『朝倉日本語講座 7 文章・談話』東京:朝倉書店
- 佐久間まゆみ(2006)『「日本語機能文型」教材開発のための基礎的研究 早稲田大学日本語研究教育センター 2005 年度重点研究 研究成果報告書』東京:早稲田大学日本語研究教育センター
- 佐久間まゆみ、杉戸清樹、半澤幹一(1997)『文章・談話のしくみ』東京:おうふう
- 佐々木由美(1996)「日本人学生の異文化コミュニケーションスタイル:中国人・アメリカ人との日本語会話における「情報要求」発話分析」『言語文化と日本語教育』11 東京:お茶の水女子大学
- 佐々木由美(1998)「初対面の状況における日本人の「情報要求」の発話 同文化内および異文化コミュニケーションの場面」『異文化間教育』東京:異文化間教育学
- 定延利之・中川明子(2005)「非流ちょう性への言語学的アプローチ」, 串田秀也・定延利之・伝康晴編『活動としての文と発話』東京:ひつじ書房
- 佐藤恵理(2005)「スピーチレベルシフトにおける中途終了型発話についての一考察—韓国語との比較から」『일본어문학』31 大邱:일본어문학회(日本語文学会)
- ザトラウスキー・ポリー(1991)「会話分析における「単位」について—「話段」の提案」『日本語学』東京:明治書院
- ザトラウスキー・ポリー(1993)『日本語研究叢書5 日本語の談話の構造分析—勧誘のストラテジーの考察—』東京:くろしお出版
- ザトラウスキー・ポリー(1997)「かかわりあう」『文章・談話のしくみ』東京:おうふう
- ザトラウスキー・ポリー(2005)「談話と文体—感情評価の動的な過程について—」中村明他編『表現と文体』東京:明治書院
- 白川博之(1990)「「テ形」による言いさしの文について」『広島大学 日本語教育学科紀要』創刊号 広島:広島大学教育学部 日本語教育学科
- 白川博之(1995)「タラ形・レバ形で言いさす文」『広島大学 日本語教育学科紀要』5 広島:広島大学教育学部 日本語教育学科
- 白川博之(1996)「「ケド」で言い終わる文」『広島大学 日本語教育学科紀要』6 広島:広島大学教育学部

部 日本語教育学科

申媛善(2006)「情報のやりとりにおける受信者側の働き--日本語話者と韓国語話者の比較」『筑波応用言語学研究』13 茨城:筑波大学

杉戸清樹(1984)「談話の単位について」『言語生活』393 東京:筑摩書房

杉戸清樹(1987)「発話のうけつぎ」『国立国語研究所報告 92 談話行動の諸相―座談資料の分析―』東京:三省堂

杉山ますよ(2001)「対談番組にみられる「中途終了型発話」表現形式, 生起理由, 会話のストラテジー」『別科論集』3 東京:大東文化大学別科日本語研修課程

杉山ますよ(2002)「くり返しの形状・分布と機能」『別科論集』4 東京:大東文化大学 日本語研修課程

鈴木香子(2003)「ラジオの心理相談の談話の構造分析」『早稲田大学日本語教育研究』3 東京:早稲田大学大学院日本語教育研究科

鈴木香子(2007)「機能文型に基づく相談の談話の構造分析」早稲田大学大学院 日本語教育研究科 博士学位論文(非刊行) 東京:早稲田大学

曹英南(2002)「韓国語母語話者における言いさし表現の意識調査―述部まで述べた言い切り表現との比較を通して―」『言語文化と日本語教育』第 23 号 東京:御茶の水女子大学 日本言語文化学会

曹英南(2004)「言いさし表現に関する韓日対照研究」お茶の水女子大学大学院 人間文化研究科 比較文化学 博士学位論文(非刊行) 東京:お茶の水女子大学

高木丈也(2008a)「日本語と朝鮮語の中途終了発話文」東京大学人文社会系研究科修士学位論文(非刊行) 東京:東京大学人文社会系研究科

高木丈也(2010)「日本語と朝鮮語の談話における「中途終了発話文」の出現とその機能」日本言語学会 第 141 回大会 予稿集

高木丈也(2012)「日本語と韓国語の談話におけるいわゆる『中途終了発話文』の出現とその機能」『社会言語科学』15・1 東京:社会言語科学会

高木丈也(2013a)「日本語と韓国語の自然談話に現れる「くり返し発話」」『待遇コミュニケーション研究』10 東京:待遇コミュニケーション学会

高木丈也(2013b)「日本語と朝鮮語の自然談話における「情報要求」を表す「中途終了発話文」」『朝鮮語研究5』東京:朝鮮語研究会(ひつじ書房刊)

高木丈也(2014:forthcoming)「日本語と韓国語の談話における発話文生成メカニズム―「質問」を表す「中途終了発話文」を中心に―」『待遇コミュニケーション研究』11 東京:待遇コミュニケーション学会

高橋太郎(1993)「省略によってできた述語形式」『日本語学』12・10 東京:明治書院

田中妙子(1997)「会話におけるくりかえし―テレビ番組を資料として―」『早稲田大学日本語研究教育センター紀要』9 東京:早稲田大学日本語研究教育センター

田中妙子(1998)「会話における質問発話の効果について」『早稲田大学日本語研究教育センター紀要』11 東京:早稲田大学日本語研究教育センター

- 陳文敏(2000)「日本語母語話者の会話に見られる「中途終了型」発話－表現形式及びその生起の理由－」『言葉と文化』創刊号 愛知:名古屋大学大学院 国際言語文化研究科 日本言語文化専攻
- 津田早苗 (1994)『談話分析とコミュニケーション』東京:リーベル出版
- 鄭賢貞(2004)「日本語と韓国語の談話におけるスピーチレベルシフト」『日本語教育と異文化理解』3 愛知:愛知教育大学国際教育学会
- 戸江哲理(2008)「糸口質問連鎖」『社会言語科学』10・2 東京:社会言語科学会
- 中井陽子(2003)「話題開始部で用いられる質問表現－日本語母語話者同士および母語話者／非母語話者による会話をもとに－」『早稲田大学日本語教育研究』2 東京:早稲田大学大学院日本語教育研究科
- 中田智子(1991)「会話にあらわれるくり返しの発話」『日本語学』10・10 東京:明治書院
- 中田智子(1992)「会話の方略としてのくり返し」『国立国語研究所報告 104 研究報告集 13』東京:国立国語研究所
- 永野賢(1986)『学校文法概説』東京:共文社
- 中村香代子(2007)「日本語の感謝表現と共に用いられるフィラーについて:自由記述式談話完成テストの回答分析から」『語学教育研究論叢』24 東京:大東文化大学
- 名柄迪、茅野直子(1988)『外国人のための日本語 例文・問題シリーズ 文体』東京:荒竹出版
- 西尾実編(1955)『毎日ライブラリー－言葉と生活－』東京:毎日新聞社
- 西阪仰(2005)「複数の発話順番にまたがる文の構築－プラクティスとしての文法 II」『シリーズ文と発話 第1巻 活動としての文と発話』東京:ひつじ書房
- 西阪仰(2006)「反応機会場と連続子一文のなかの行為連鎖－」『研究所年報』36 号 東京:明治学院大学 社会学部附属研究所
- 任炫樹(2002)「日韓断り談話における初出あいづちマーカー」『ことばの科学』15 愛知:名古屋大学言語文化研究会
- 野間秀樹(2000)『至福の朝鮮語』東京:朝日出版社
- 野間秀樹(2006)「現代朝鮮語の丁寧化のマーカー-*yo/iyo* について」『朝鮮学報』199・200 奈良:朝鮮学会
- 野間秀樹(2007)「試論:ことばを学ぶことの根拠はどこに在るのか－韓国語教育の視座－」『韓国語教育論講座』1 東京:くろしお出版
- 橋本進吉(1931)『新文典 初年級用』東京:富山房
- 橋本進吉(1934)『国語法要説』東京:明治書院
- 橋本進吉(1935)『新文典 別記上級用』東京:富山房
- 福富奈美(2006)「日本語会話における情報要求場面の発話交換:母語話者と非母語話者の相違を中心に」『人間社会学研究集録』1 大阪府:大阪府立大学大学院人間社会学研究科
- 福富奈美(2010)「日本語会話における「くり返し」発話について」『言語文化学研究 言語情報編』大阪:大阪府立大学
- 朴承圓(2000)「「不満表明表現」使用に関する研究:日本語母語話者・韓国人日本語学習者・韓国語

- 母語話者の比較』『言語科学論集』4 宮城:東北大学
- 藤田保幸(2000)『国語引用構文の研究』大阪:和泉書院
- 細川弘明(1987)「インタビューによる非対称性」谷泰編『社会的相互行為の研究』京都:京都大学人文科学研究所
- 堀江薫、金延珉(2011)「日韓語の文末表現に見る語用論的意味変化 機能主義的類型論の観点から」高田博行・椎名美智・小野寺典子編『シリーズ言語学フロンティア 03 歴史語用論入門 過去のコミュニケーションを復元する』東京:大修館書店
- 堀口純子(1997)『日本語教育と会話分析』東京:くろしお出版
- 前田正一編(2005)『インフォームド・コンセント—その倫理と書式実例—』東京:医学書院
- 前原里子(2001)「ボライトネス・ストラテジーの日米対照研究—初対面二者間会話の分析より—」東京外国語大学 修士学位論文(非刊行) 東京:東京外国語大学
- 牧野成一(1980)『くりかえしの文法』東京:大修館書店
- 益岡隆志、田窪行則(1992)『基礎日本語文法』東京:くろしお出版
- 増田将伸(2006)「質問を用いた働きかけのストラテジー—質問の二面性の反映として—」『待遇コミュニケーション研究』4 東京:待遇コミュニケーション研究会
- マルコム・クールタード著、吉岡昭市、貫井孝典、鎌田修訳(1999)『談話分析を学ぶ人のために』京都:世界思想社
- 水谷信子(1983)「あいづちと応答」水谷修編『講座日本語と表現 3 話しことばの表現』東京:筑摩書房
- 水谷信子(1988)「あいづち論」『日本語学』7・13 東京:明治書院
- 南不二男(1983)「談話の単位」『談話の研究と教育 I』東京:国立国語研究所
- 南不二男(1985)「質問文の構造」水谷静夫 共編『朝倉日本語新講座 文法と意味 II』東京:朝倉書店
- メイナード・泉子・K (1993)『会話分析』東京:くろしお出版
- 森岡清美、塩原勉、本間康平編(1993)『新社会学辞典』東京:有揖閣
- 文部省(1947)『中等文法』(中等学校教科書)
- 山岡政紀(2008)『発話機能論』東京:くろしお出版
- 楊虹(2012)「初対面会話における「同意要求—応答」の連鎖的分析—共感構築の観点から—」『鹿児島県立短期大学紀要』63 鹿児島:鹿児島県立短期大学
- 吉田睦(2008)「中上級日本語学習者と母語話者の談話展開—会話進行に伴う情報要求表現に着目して—」『筑波応用言語学研究』15 茨城:筑波大学
- 吉田睦(2009)「会話内の質問表現が持つ多義性—応答表現からみる会話構築を中心に—」『筑波応用言語学研究』16 茨城:筑波大学
- 李殷娥(1995)「透明な言語・不透明な言語—韓日の婉曲表現と挨拶表現をめぐって—」『朝鮮学報』157 奈良:朝鮮学会
- 李恩美(2008)「日本語の「中途終了型発話」に関する一考察—表現形式と発話機能を中心に—」『일본어문학』42 大邱:일본어문학회(日本語文学会)
- 李吉鎔(2001)「日・韓両言語における反対意見表明行動の対照研究:談話構造とスキーマを中心とし

て『阪大日本語研究』大阪:大阪大学

李麗燕(1995)「日本語母語話者の会話管理に関する一考察—日本語教育の観点から」『日本語教育』
87 東京:日本語教育学会

2. 朝鮮語で書かれたもの(筆者の가나다順)

강은숙(2005) ‘한국어 모어화자의 화제 변동에 관한 연구—사회적 관계와 친밀도를 중심으로—’ 연세대학교 석사학위논문 서울:연세대학교

고창규(2001) ‘초등학교 수업의 질문—대답 계열 연구’ “교육인류학연구”4·3 서울:한국교육
인류학회

김수태(2013) ‘안맺음씨끝 “-더-”의 기능의미’ “우리말연구”32 부산:우리말학회

김재옥(2007) ‘국어 문법과 한국어 문법의 체계 분석’ “한민족어문학” 51 충남:한민족어문학
회

김지현(2002) ‘학습자 발화의 본질과 기능’ “아시아교육연구” 3·2 서울:서울대학교교육연구
소(아시아태평양교육발전연구단)

김지혜(2004) ‘{는데}의 문법화와 담화기능 연구’ 경희대학교 석사학위논문 서울:경희대학교
국어국문학과 국어학전공

남기심, 고영근(1985:1998) “표준국어문법론 개정판” 서울:탑출판사

노마히데키[野間秀樹](1996) ‘한국어 문장의 계층구조’ “언어학”19 서울:한국언어학회

다카기 타케야[高木丈也](2008b) ‘일본어와 한국어의 소위 중도종료발화문’ 2008 동경한국
어학 학술대회 발표원고

문교부(1963) “학교문법통일안”

박선옥(2003) ‘한국어 교사의 질문 유형과 기능에 대한 연구:외국인에게 한국어를 교육하는
교사의 발화를 중심으로’ “화법연구”5 전북:한국화법학회

박재희(2012) ‘쑈의 성격—그 기능과 의미에 관하여—’ “한국어학”57 서울:한국어학회

백승주(2011) ‘제 2 언어 교실에서의 질문 분류 방식과 기능에 대한 재고 1 —"정보 조회 질
문"과 "정보 확인 질문"을 중심으로—’ “이중언어학” 47 서울:이중언어학회

손옥현, 김영주(2009) ‘한국어 구어에 나타난 종결어미화된 연결어미 양상연구’ “한국어 의미
학”28 서울:한국어의미학회

송경숙(1996) ‘한국어와 영어 대화의 질문에 대한 상호작용 사회언어학적 분석’ “담화와 인지
”3 경기:담화·인지언어학회

신원선(2010) ‘한일 여성 첫만남 대화에 있어서의 발화기능 비교—정보교환을 중심으로—’ “일
본연구”45 서울:한국외국어 대학교 일본연구소

이기갑(2006) ‘국어 담화의 연결 표지 - 완형 표현의 반복’ “담화와 인지”13·2 경기:담화인지
언어학회

이은경(1998) ‘텔레비전 토크쇼 텍스트의 연결어미 분석’ “텍스트언어학” 5 서울:한국텍스트
언어학회

- 이은경(1999) '구어체 텍스트에서 한국어 연결 어미의 기능' "국어학"34 서울:국어학회
- 이준희(2000) '질문의 적정 조건을 위반하는 질문문의 담화 상황' "한국어학" 11-1 서울:한국어학회
- 임규홍(2010) '문말 '-는데'의 담화 기능에 대한 연구' 경상대학교 국어국문학과 국어학 석사학위논문 경남경상대학교
- 임홍빈(2000) '학교 문법, 표준 문법, 규범 문법의 개념과 정의' "새국어생활" 10-2 서울:국립국어연구원
- 전영옥(1999) '한국어 담화에 나타난 반복 표현의 기능' "한국어 의미학"4 서울:한국어 의미학회
- 전영옥, 남길임(2005) '구어와 문어의 접속 표현 비교 연구－ "그런데, -는데"를 중심으로－' "한말연구"17 서울:한말연구학회
- 정명숙, 최은지(2013) '한국인과 외국인의 발화에 나타난 "-잖아"의 기능과 억양 실현 양상' "한국어학"60 서울:한국어학회
- 조민하(2011) '연결어미의 종결기능과 억양의 역할' 고려대학교 국어국문과 박사학위논문 서울:고려대학교
- 주경희(2011) '면접 담화에서의 대답 방법에 대한 연구－스토리텔링을 중심으로－' "국어교육학연구"41 서울:국어교육학회
- 한미경, 강창임(2011) '인터넷상의 '질문'에 대한 '답변'의 담화분석:한일양국 지식검색서비스를 중심으로' "일본연구"47 서울:한국외국어대학교 외국학종합연구센터 일본연구소
- 홍세일(1997) '의문발화의 화용적 기능:비표현 수행력과 사회적 위계' "현대문법연구"11-1 대구:현대문법학회

3. 英語で書かれたもの(筆者の(英語の)アルファベット順)

- Bolden Galina B.(2009) 'Beyond Answering: Repeat-prefaced Responses in Conversation' *Communication Monographs* 76, New York: Routledge, part of the Taylor & Francis Group
- Brown P. and Levinson S.(1987) *Politeness : Some universals in Language Usage*, Cambridge: Cambridge University Press
- Button G. and Casey N.(1985) 'Topic nomination and topic pursuit' *Human Studies* 8-1, Dordrecht : Kluwer Academic Publishers
- Evans Nick.(2009) 'Insubordination and the grammaticalisation of interactive presuppositions' Conference: Methodologies in determining morphosyntactic change 発表原稿
- Ferguson N.(1977) 'Simultaneous Speech, Interruptions, and Dominance' *British Journal of Social and Clinical Psychology* 16, London: British Psychological Society
- Fishman Pamela M.(1978) 'Interaction : The Work Women Do' *Social Problems* 25-4, California: University of California Press

- Freed Alice F.(1994) 'The Form and Function of Questions in Informal Dynamic Conversation' *Journal of Pragmatics* 21, Amsterdam:North Holland
- Goffman E.(1967) *Interaction Ritual:Essay on Face-to-Face Behavior*, NY:Anchor Books
- Grice HP.(1975) 'Logic and Conversation', In Peter Cole. and Jerry L Morgan.(ed.) *Syntax and Semantics3:Speech Acts*,New York:Academic Press
- Halliday M.A.K.(1985) *An introduction to Functional Grammar*,London:Edward Arnold
- Halliday M.A.K. and R Hasan.(1976) *Cohesion in English*,London:Longman
- Harris Z.(1952) 'Discourse analysis' *Language* 28, Washington:Linguistic Society of America
- Hayashi. and R Hayashi.(1991) 'Back channel or main channel:A cognitive approach based on floor and speech acts', In L F Bouton. and Y Kachru.(ed.) *Pragmatics and Language Learning* 2, Illinois:University Of Illinois Press
- Hymes D.(1974) *Foundations in Sociolinguistics:An Ethnographic Approach*, Philadelphia :Uuniversity of Pennsylvania Press
- Jakobson Roman.(1960) 'Linguistics and Poetics', In Thomas A Sebeok.(ed.) *Style in Language*, Boston:MIT Press.
- Jefferson Gail.(1972) 'Side sequences', In D.Sudnow.(ed.) *Studies in social interaction*, New York:Free Press
- Labov. and D Fanshel.(1977) *Therapeutic discourse:Psychotherapy as conversation*, New York:Academic Press
- Levinson Stephen.(1983) *Pragmatics*, Cambridge:Cambridge University Press
- Ohuri Toshio.(2010) 'Beyond suspended clauses:clausehood in discourse' The 6th International Conference on Construction Grammar 発表原稿
- Pomerantz Anita. (1984) 'Agreeing and disagreeing with assessments:Some features of preferred / dispreferred turn shapes', In J M Atkinson. and J Heritage.(ed.) *Structures of Social Action:Studies in Conversation Analysis*, Cambridge:Cambridge University Press
- Sacks. Schegloff. and Jefferson.(1974) 'A simplest system for organization of turn-taking in conversation' *Language* 50, Washington:Linguistic Society of America
- Schegloff Emanuel.(1972) 'Notes on a conversational practice:formulating place', In D. Sudnow.(ed.) *Studies in Social Interaction*, New York:The Free Press
- Schegloff Emanuel. and Sacks. Harvey.(1973) *Opening up closings* Semiotica 8, La Haye:Mouton
- Searle John.(1969) *Speech Acts :An Essay in the Philosophy of Language*, Cambridge:Cambridge University Press
- Stubbs M.(1983) *Discourse Analysis:The Sociolinguistic Analysis of Natural Language*, Chicago:University of Chicago Press
- Tannen Deborah.(1984:2005) *Conversational Style:analyzing talk among friends*,Oxford:

Oxford University Press

Van Dijk T A.(1972) *Some aspects of text grammars:A study in theoretical linguistics and poetics*, The Hague:Mouton

付録

[付録1] フォローアップアンケート (⇒2.1.1.参照)

日本語版

調査日：20__年__月__日
会話番号： J - _____

録音調査にご協力いただき、ありがとうございました。このアンケートは、分析の参考にするために行なうもので、それ以外の目的には使用することはありません。ご協力をお願いいたします。

1. まず、ご自身についてお伺いします。

1) 性別を教えてください。

1. 男性 2. 女性

2) 生年月日と年齢を教えてください。

19__年 __月 __日生まれ、満__才

3) 職業は何ですか？

1. 大学生 (____年生) 2. 大学院生 (修士・博士 ____年生)

3. 会社員 (社会人年数：____年、業種：____)

4. フリーター (主な活動：____)

99. そのほか (____)

4) 主要な生育地はどちらですか？

____都・道・府・県 _____区・市・町・村・郡

5) 外住歴はありますか？ (留学も含む) [無 ・ 有 (→ 以下に記入してください)]

(才～ 才)____都・道・府・県 _____区・市・町・村・郡

(才～ 才)____都・道・府・県 _____区・市・町・村・郡

(才～ 才)____都・道・府・県 _____区・市・町・村・郡

6) お父様の主な生育地はどちらですか？

____都・道・府・県 _____区・市・町・村・郡

7) お母様の主な生育地はどちらですか？

_____都・道・府・県 _____区・市・町・村・郡

8) 外国語の学習・習得歴について教えてください。

(＜2＞、＜3＞は該当するのみ、ご記入願います)

＜1＞ 英語

①学習期間：_____年 _____ヶ月

②主な学習手段：_____

③自己評価： 1. 初級 2. 中級 3. 上級以上

＜2＞ _____語

①学習期間：_____年 _____ヶ月

②主な学習手段：_____

③自己評価： 1. 初級 2. 中級 3. 上級以上

＜3＞ _____語

①学習期間：_____年 _____ヶ月

②主な学習手段：_____

③自己評価： 1. 初級 2. 中級 3. 上級以上

9) 一番話しやすい言語、または方言を教えてください。

1. 共通語 2. _____方言 3. _____語 (日本語以外の言語)

2. 次に、先ほど行なった録音についてお伺いします。

1) 録音されていることを意識しましたか？

1. 非常に意識した (※) 2. 少し意識した (※)

3. ほとんど意識しなかった 4. 全然意識しなかった 99. わからない

※ (1. か2. を選んだ方のみ) 録音が自分の話し方に影響を与えましたか？

1. 非常に影響した 2. 少し影響した

3. ほとんど影響しなかった 4. 全然影響しなかった 99. わからない

2) そのほかに録音について、何か気になったことはありますか？自由にお書きください。

3. 最後に、対話相手についてお伺いします。

1) 相手の年齢について、どう思いましたか？（自分との対比で）

1. かなり年下 2. 少し年下 3. だいたい同じ
4. 少し年上 5. かなり年上 99. わからない

2) 相手の社会的地位について、どう思いましたか？（自分との対比で）

1. かなり下 2. 少し下 3. だいたい同じ
4. 少し上 5. かなり上 99. わからない

3) 相手の話しやすさについて、どう思いましたか？

1. かなり話しやすかった 2. 少し話しやすかった、
4. 少し話しにくかった 5. かなり話しにくかった 99. わからない

4) そのほかに相手について、何か気になったことはありますか？自由にお書きください。

質問は以上です。長い時間、お付き合いいただき、ありがとうございました。

조사일 : 20__년__월__일
대화번호 : K - _____

녹음 조사에 협력해 주셔서 감사합니다. 이 설문 조사는 분석할 때, 참고로 사용하는 것이며, 그 이외의 목적으로 사용되지는 않습니다. 협조하여 주시기 바랍니다.

1. 먼저 본인의 대해 몇 가지 여쭙겠습니다.

1) 성별을 가르쳐 주십시오.

1. 남자 2. 여자

2) 생년월일 / 연령을 가르쳐 주십시오.

19____년 ____월 ____일 만____세

3) 직업은 무엇입니까?

1. 대학생 (____학년) 2. 대학원생 (석사·박사 ____년)

3. 회사원 (근속년수 : ____년, 업종 : _____)

99. 기타 (_____)

4) 주로 자란 지역은 어디입니까?

_____도 / 시 _____시 / 구

5) 출신지 외에 사신 적이 있는 데가 있으면 적어 주십시오.

(살~ 살)_____도 / 시 _____시 / 구

(살~ 살)_____도 / 시 _____시 / 구

(살~ 살)_____도 / 시 _____시 / 구

6) 아버님은 주로 어디서 자라셨습니까?

_____도 / 시 _____시 / 구

7) 어머님은 주로 어디서 자라셨습니까?

_____도 / 시 _____시 / 구

8) 본인의 외국어 학습에 대하여 가르쳐 주십시오.

<1> 영어

①학습기간 : _____년 _____개월

②주된 학습수단 : _____

③평가 : 1. 초급 2. 중급 3. 상급 4. 원어민레벨

<2> _____어

①학습기간 : _____년 _____개월

②주된 학습수단 : _____

③평가 : 1. 초급 2. 중급 3. 상급 4. 원어민레벨

<3> _____어

①학습기간 : _____년 _____개월

②주된 학습수단 : _____

③평가 : 1. 초급 2. 중급 3. 상급 4. 원어민레벨

9) 현재 가장 말하기 편한 언어, 방언을 가르쳐 주십시오.

1. 표준어 2. _____방언 3. _____어 (외국어)

2. 이번에는 지금 한 녹음에 대해 여쭙겠습니다.

1) 대화하다가 녹음이 되어 있다는 것을 어느 정도 의식하셨습니까?

1. 많이 의식했다 (※) 2. 조금 의식했다 (※)
3. 거의 의식하지 않았다 4. 전혀 의식하지 않았다 99. 모르겠다

※ (1. 또는 2. 를 선택하신 분만 대답해 주십시오)

녹음이 되어 있다는 것이 어느 정도 본인의 언어 사용에 영향을 주었습니까?

1. 영향을 많이 주었다 2. 영향을 조금 주었다
3. 영향을 거의 주지 않았다 4. 영향을 전혀 주지 않았다 99. 모르겠다

2) 그 밖에도 녹음에 대해 느끼신 점이 있으면 써 주십시오.

3. 마지막으로 대화 상대에 대해 여쭙겠습니다.

1) 상대방의 연령은 본인과 비교해서 어떻게 느껴졌습니까?

1. 훨씬 더 어리다 2. 조금 어리다 3. 거의 같다
4. 조금 나이가 많다 5. 훨씬 더 나이가 많다 99. 모르겠다

2) 상대방의 사회적 지위는 본인과 비교해서 어떻게 느껴졌습니까?

1. 아주 높다 2. 조금 높다 3. 거의 같다
4. 조금 낮다 5. 아주 낮다 99. 모르겠다

3) 상대방에 전체적인 인상은 어떠셨습니까?

1. 대화하기 아주 편했다 2. 대화하기 조금 편했다
3. 대화하기 조금 힘들었다 4. 대화하기 아주 힘들었다 99. 모르겠다

4) 그 밖에도 대화 상대에 대하여 느끼신 점이 있으면 써 주십시오.

질문은 이상입니다. 협력해 주셔서 감사합니다.

[付録3] フェイスシート（調査整理表）（⇒2.1.1、2.2.参照）

日本語、朝鮮語共通

■ 会話番号： J ・ K -

この被験者の属性： _____代 ／ 男性・女性

対話者の属性：_____代 / 男性・女性

(年上・年下 / 同姓・異性)

■ 調査開始時刻

20 年 月 日 () 時 分 (24 時間制)

■ 調査終了時刻

20____年____月____日 () ____時____分 (24 時間制)

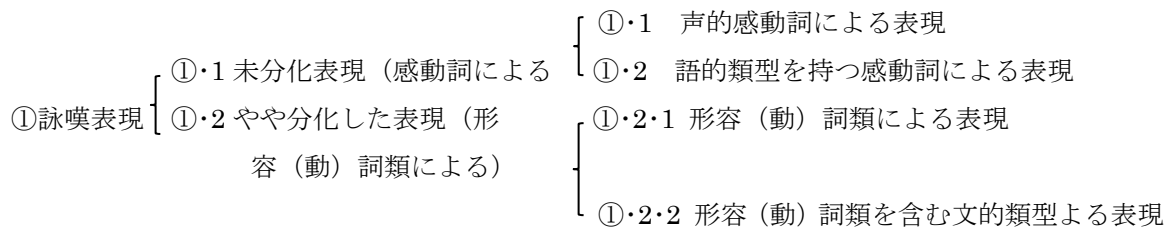
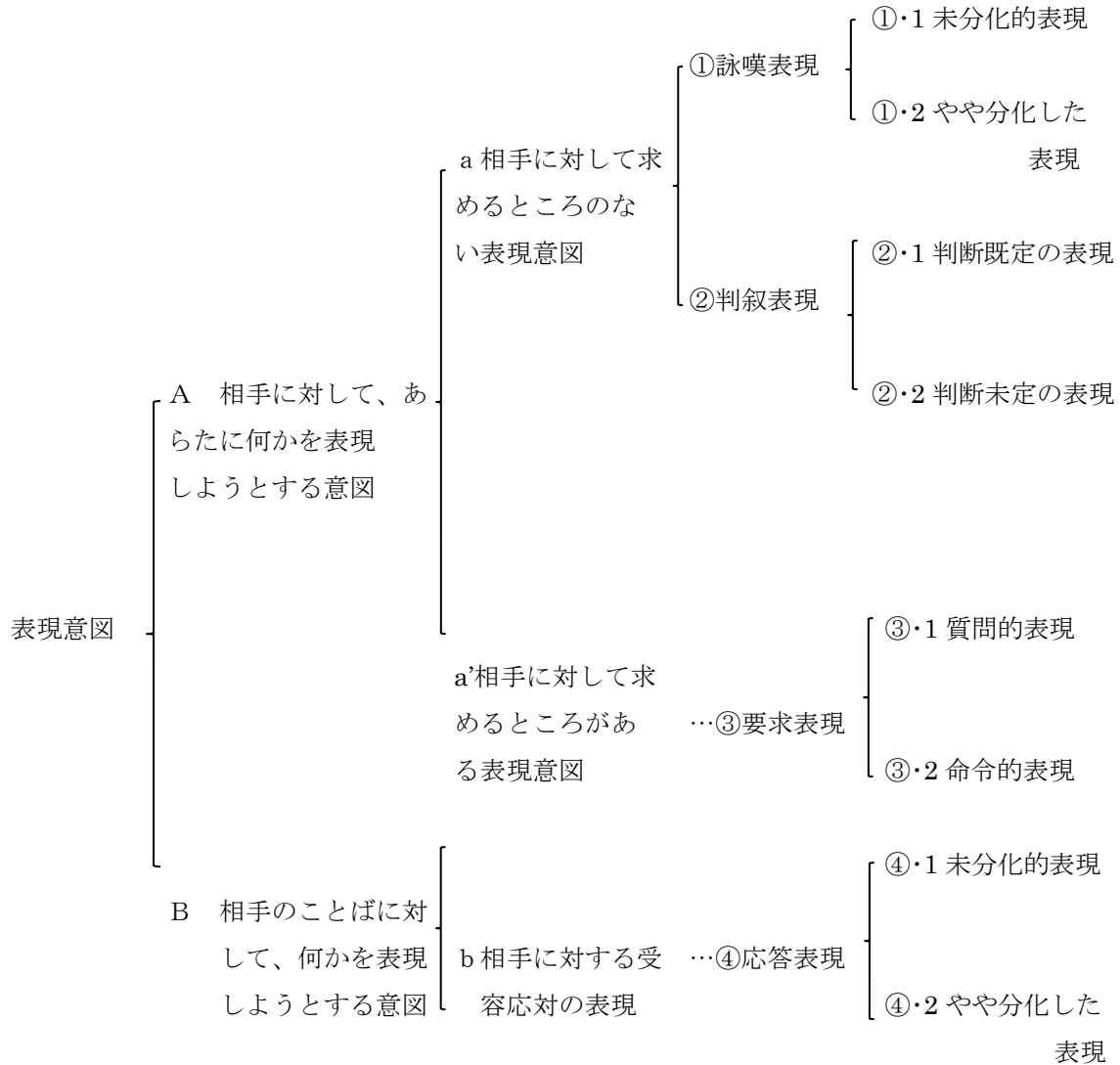
■ 調査場所

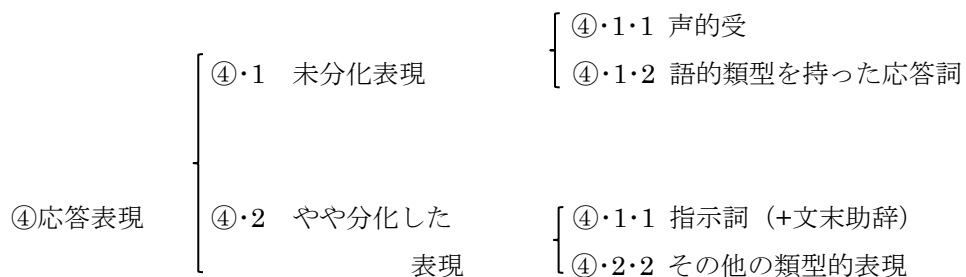
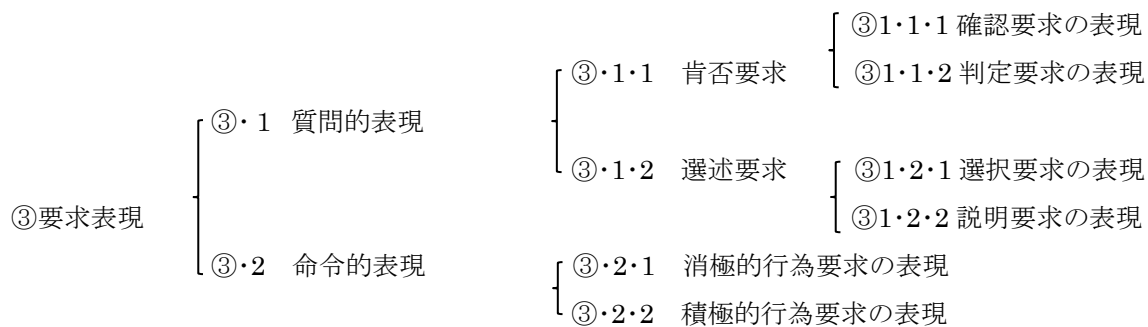
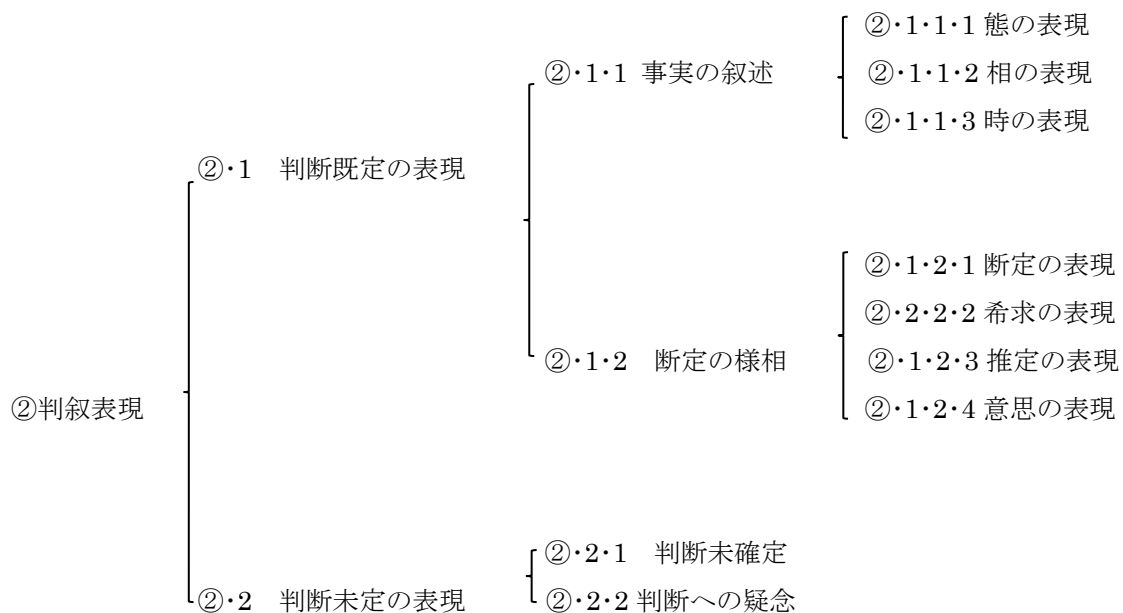
■ 同席者：あり・なし

■ 備考

[付録4] 先行研究における「発話機能」の分類 (⇒3.2.1.参照)

国立国語研究所 (1960 : 88, 90, 92, 109, 127) 「表現意図」 <日>





国立国語研究所（1987：158）「発話機能」＜日＞

文の形式上の特徴	場面を形成する要因		
	(1) 発話の動機 (場面メアテ)	(2) 働きかけの種類 (聞き手メアテ)	(3) 発話内容に対する態度 (素材メアテ)
1. 叙述要素文 2. 伝達要素文 2 1. 終助詞 ネ 2 2. その他の 終動詞 2 3. ノダ 3. 疑問要素文 3 1. 質問 3 2. 納得・詰問 4. 要求要素文 4 1. 命令 4 2. 依頼 5. 意志要素文 6. 単語文 7. 言いさし文	1. 自律的 2. 非言語的文脈への 対応 21. 事態の推移に 対する反応 22. 他の動作・行為 に対する反応 3. 言語による文脈への 対応 31. ワキ的文脈 32. マトモ的文脈	1. 没対者性 11. 独語 12. 聞かせ 2. 対者性 21. 要求 211. 情報要求 2111. 質問 2112. 同意要求 212. 行為要求 2121. 単独行為 2122. 共同行為 213. 注目要求 22. 非要求 221. 情報提供 222. 意思表示 223. 注目表示	0. 中立的 1. 肯定的な評価 2. 否定的な評価

ザトラウスキー（1993：67）「発話機能」＜日＞

①注目要求、②談話表示、③情報提供、④意志表示、⑤同意要求
 ⑥情報要求、⑦共同行為要求、⑧単独行為要求、⑨言い直し要求
 ⑩言い直し、⑪関係作り・儀礼、⑫注目表示

⑫注目表示の下位分類

a. 継続、b. 承認、c. 確認、d. 興味、e. 感情、f. 共感、
 g. 感想、h. 否定、i. 終了、j. 同意、k. 自己

曹英南（2004：30-31）「言いさし表現」の「機能」＜日・朝＞

1. 行為要求、2. 情報要求、3. 情報提供、4. 意志表示

鈴木（2007：40）「発話機能」＜日＞

I－1．注目要求

I－2．間投詞的表現

II．談話表示

（a1 話を始める、b1 話を続ける、b3 話を深める、b5 話を戻す、b8 話をさえぎる、
b10 話をまとめる、c1 話を終える）

III．要求

1．確認要求、2．判定要求、3．選択要求、4．説明要求、
5．単独行為要求、6．共同行為要求

IV．提供

1．事実報告、2．意見説明、3．感情表出、4．意志表明、5．選択情報提供、6．言い直し

V．受容

1．関係作り・儀礼、2．自己注目表示、
3．相手注目表示（a 継続、b 承認、c 否認、d 確認、e 興味、f 共感、g 終了、h 同意）

李恩美（2008：132）「中途終了型発話」の「発話機能」＜日＞

1．情報要求、2．情報伝達、3．情報応答、情報提供、4．あいづち、5．その他

[付録 5] 質問紙調査票（表紙）（⇒8.1.参照）

日本語版

このたびは、アンケートにご協力いただき、ありがとうございます。この調査は、日常生活における「話しことば」に関する意識調査で、お答えいただいた内容は、言語学研究にのみ使用いたします。まず初めに、ご自身の【年代】と【性別】をお教えます。それぞれ該当するものに○をつけてください。

【年代】（ 10 代 ・ 20 代 ・ 40 代 ）

【性別】（ 男性 ・ 女性 ）

質問は、全部で 4 ページあります。気楽に考えて、回答していただければと思います。

< 質問 1 >

では、さっそく質問に入ります。私たちは、日常生活で同じことを尋ねる場合であっても、相手や状況によって微妙に表現を使い分けることがあると思います。例えば、次のような表現は、似た内容を聞くものですが、質問のしかたは微妙に異なっています。これらの質問表現について、あなたはどのようなイメージを持ちますか。知り合って間もない同年代の相手に聞かれた場合を想定したとき、一番近い数字を 1 つ選び、○をつけて下さい。

【表現 1】「ところで、ご出身は、どちらなんですか？」

		そう思わない	あまりそう思わない	どちらともいえない	少しそう思う	そう思う
①	丁寧だ	1	2	3	4	5
②	遠慮がちだ	1	2	3	4	5
③	親しみがある	1	2	3	4	5
④	気軽である	1	2	3	4	5
⑤	わかりやすい	1	2	3	4	5
⑥	自分に対する 関心の強さを感じる	1	2	3	4	5
⑦	質問に答えよう、 と感じる	1	2	3	4	5
⑧	初対面の相手に対する 聞き方としてふさわしい	1	2	3	4	5

【表現 2】「ところで、どちらなんですか、ご出身は…？」

		そう思わない	あまりそう思わない	どちらともいえない	少しそう思う	そう思う
①	丁寧だ	1	2	3	4	5
②	遠慮がちだ	1	2	3	4	5
③	親しみがある	1	2	3	4	5
④	気軽である	1	2	3	4	5
⑤	わかりやすい	1	2	3	4	5
⑥	自分に対する 関心の強さを感じる	1	2	3	4	5
⑦	質問に答えよう、 と感じる	1	2	3	4	5
⑧	初対面の相手に対する 聞き方としてふさわしい	1	2	3	4	5

【表現 3】「ところで、ご出身は、どちら…？」

		そう思わない	あまりそう思わない	どちらともいえない	少しそう思う	そう思う
①	丁寧だ	1	2	3	4	5
②	遠慮がちだ	1	2	3	4	5
③	親しみがある	1	2	3	4	5
④	気軽である	1	2	3	4	5
⑤	わかりやすい	1	2	3	4	5
⑥	自分に対する 関心の強さを感じる	1	2	3	4	5
⑦	質問に答えよう、 と感じる	1	2	3	4	5
⑧	初対面の相手に対する 聞き方としてふさわしい	1	2	3	4	5

【表現 4】「ところで、ご出身は…？」

		そう思わない	あまりそう思わない	どちらともいえない	少しそう思う	そう思う
①	丁寧だ	1	2	3	4	5
②	遠慮がちだ	1	2	3	4	5
③	親しみがある	1	2	3	4	5
④	気軽である	1	2	3	4	5
⑤	わかりやすい	1	2	3	4	5
⑥	自分に対する 関心の強さを感じる	1	2	3	4	5
⑦	質問に答えよう、 と感じる	1	2	3	4	5
⑧	初対面の相手に対する 聞き方としてふさわしい	1	2	3	4	5

<質問2>

以下は、知り合って間もない、あなたと同年代の2人の会話です。Bのような反応をする人がいた場合、あなたなら違和感を持つと思いますか。また、そのように感じる理由があれば、それについても教えて下さい。理由は、客観的に受ける印象に基づいて答えていただいても構いませんし、Aの立場に立った場合、どのような印象を受けるかに基づいて答えていただいても構いません。

会 話	Bの反応に対して受ける印象
【会話1】 A：彼（話題になっている人物）は、名古屋出身なんですよ。 B：名古屋出身…	違和感を（持たない・持つ） ←○をつけて下さい(以下同様) その理由：
【会話2】 A：もうこのバイト、やめようかと思ってるんですね。 B：十分稼いだし、もういいかな、みたいな…	違和感を（持たない・持つ） その理由：
【会話3】 A：今、新しいスマホを買おうか、i-padを買おうか悩んでるんですよ。 B：どっちがいいでしょうねえ。今使ってるスマホは… * ※Bは、Aが今スマートフォンを使っていることを知っているという前提でお考えください。Bの「今使ってる…」の部分の応答について、お答えください。	違和感を（持たない・持つ）※「今使ってる…」の部分の反応について その理由：
【会話4】 A：私、スカイツリーができたことも知らなかったんですよ。 B：それは、東京にずっといなかったから… ※Aは、Bがここ数年、東京以外の地域に住んでいことを知っているという前提でお考えください。	違和感を（持たない・持つ） その理由：
【会話5】 A：私、料理するのが好きなんですよ。ねえ。 B：じゃあ、家でも料理をよく…	違和感を（持たない・持つ） その理由：
【会話6】 A：この間、ハワイに行ってきたんですけど、どこに行っても日本人が多くて…。 B：あー、やっぱり旅行に行く人が多いから…	違和感を（持たない・持つ） その理由：

質問は以上です。お忙しいところ、ご協力いただき、ありがとうございました。

[付録 6] 質問紙調査票 (表紙) (⇒8.1.参照)

朝鮮語版

설문조사에 협력해 주셔서 감사합니다. 이 조사는 일상 생활의 언어 사용에 대한 조사이며, 대답해 주신 내용은 언어학 연구에만 사용됩니다. 먼저 【연대】와 【성별】을 골라 주십시오.

【연대】 (10 대 · 20 대 · 40 대)

【성별】 (남성 · 여성)

질문은 4 페이지까지 있습니다. 편하게 대답해 주시면 감사하겠습니다.

<질문 1>

그럼 질문에 들어가겠습니다. 앞으로 보여드릴 4 가지 【표현】은 고향이 어디인지 묻는 것이지만, 질문하는 방법은 미묘하게 다릅니다. 처음에 만난 동갑인 사람에게 이런 질문을 들었을 때 자신이 느끼는 항목을 하나씩 고르십시오.

【표현 1】 ‘그런데 고향이 어디세요?’

		매우 그렇지 않다	다소 그렇지 않다	보통이다	다소 그렇다	매우 그렇다
①	정중하다	1	2	3	4	5
②	상대방이 자기를 염려하는 느낌이 든다	1	2	3	4	5
③	친근감이 있다	1	2	3	4	5
④	마음이 편하다	1	2	3	4	5
⑤	알기 쉽다	1	2	3	4	5
⑥	상대방의 자기에 대한 관심이 강함을 느낀다	1	2	3	4	5
⑦	질문에 대답하고 싶다는 느낌이 든다	1	2	3	4	5
⑧	초면인 상대에게 하는 질문으로서 타당하다	1	2	3	4	5

【표현 2】 '그런데 어디세요, 고향이...?'

		매우 그렇지 않다	다소 그렇지 않다	보통이다	다소 그렇다	매우 그렇다
①	정중하다	1	2	3	4	5
②	상대방이 자기를 염려하는 느낌이 든다	1	2	3	4	5
③	친근감이 있다	1	2	3	4	5
④	마음이 편하다	1	2	3	4	5
⑤	알기 쉽다	1	2	3	4	5
⑥	상대방의 자기에 대한 관심이 강함을 느낀다	1	2	3	4	5
⑦	질문에 대답하고 싶다는 느낌이 든다	1	2	3	4	5
⑧	초면인 상대에게 하는 질문으로서 타당하다	1	2	3	4	5

【표현 3】 '그런데 고향이 어디...?'

		매우 그렇지 않다	다소 그렇지 않다	보통이다	다소 그렇다	매우 그렇다
①	정중하다	1	2	3	4	5
②	상대방이 자기를 염려하는 느낌이 든다	1	2	3	4	5
③	친근감이 있다	1	2	3	4	5
④	마음이 편하다	1	2	3	4	5
⑤	알기 쉽다	1	2	3	4	5
⑥	상대방의 자기에 대한 관심이 강함을 느낀다	1	2	3	4	5
⑦	질문에 대답하고 싶다는 느낌이 든다	1	2	3	4	5
⑧	초면인 상대에게 하는 질문으로서 타당하다	1	2	3	4	5

【표현 4】 '그런데 고향이...?'

		매우 그렇지 않다	다소 그렇지 않다	보통이다	다소 그렇다	매우 그렇다
①	정중하다	1	2	3	4	5
②	상대방이 자기를 염려하는 느낌이 든다	1	2	3	4	5
③	친근감이 있다	1	2	3	4	5
④	마음이 편하다	1	2	3	4	5
⑤	알기 쉽다	1	2	3	4	5
⑥	상대방의 자기에 대한 관심이 강함을 느낀다	1	2	3	4	5
⑦	질문에 대답하고 싶다는 느낌이 든다	1	2	3	4	5
⑧	초면인 상대에게 하는 질문으로서 타당하다	1	2	3	4	5

<질문 2>

다음 질문입니다. 앞으로 보여드릴 6 가지 【대화】는 알게 된지 얼마 안된 2 명의 대화입니다. 2 명이 당신과 동세대 사람이라고 생각할 때, B와 같은 반응을 하는 사람이 있으면, 위화감을 가질 것 같습니까? 위화감을 가질 경우에는 왜 그렇게 생각하시는지도 적어 주십시오. 이유는 객관적으로 받을 이유를 적어 주셔도 되고, A의 입장에 섰을 때, 받을 인상을 적어 주셔도 됩니다.

대 화	B의 반응에 대해 가지는 인상
【대 화 1 】 A : xx 씨는 (화제가 되고 있는 인물) 는 출신이 경상북도 김천이거든요 . B : 경상북도 김천...	위화감을 (안 느낀다 · 느낀다) ← 선택하십시오 그 이유:
【대 화 2 】 A : 이제 알마를 그만둘까 해요. B : 충분히 벌었으니까 이제 안해도 된다는 ...	위화감을 (안 느낀다 · 느낀다) 그 이유:
【대 화 3 】 A : 요새 새로 스마트폰을 살까 아이패드를 살까 고민하고 있거든요. B : 뭐가 더 편리할까요. 지금 쓰는 스마트폰은... ※ B의 발언 중에서도 '지금 쓰는 스마트폰은...' 에 대해 생각해 주십시오.	위화감을 (안 느낀다 · 느낀다) 그 이유:
【대 화 4 】 A : 저는 신분당선이 개통된 것도 몰랐어요. B : 그건 서울에 계속 있지 않았기 때문에 ...	위화감을 (안 느낀다 · 느낀다) 그 이유:
【대 화 5 】 A : 저는 요리를 되게 좋아하거든요. B : 그럼 집에서도 요리를 자주...	위화감을 (안 느낀다 · 느낀다) 그 이유:
【대 화 6 】 A : 얼마 전에 발리섬에 갔다 왔는데, 어딜 가도 한국사람이 많았어요. B : 아~, 역시 여행가는 사람이 많으니까...	위화감을 (안 느낀다 · 느낀다) 그 이유:

질문은 이상입니다. 조사에 협조해 주셔서 감사합니다.

論文の内容の要旨

論文題目 「日本語と朝鮮語の談話における形式と機能の関係

—中途終了発話文の出現を中心に—

氏名 高木 丈也

本稿は、音声言語としての談話に特徴的にみられる中途終了発話文といった「発話形式」を取り上げ、それが相互作用の中でいかなる「機能」を担い、談話展開に貢献しているのかを、談話文法という観点から記述しようとするものである。各章の概要は以下のとおりである：

まず、第1章では、研究動機と問題の所在について述べるとともに、分析対象と方法論に関する前提を構築した。ここでは、談話と文章の区別や、談話分析と会話分析の方法論の違いについて明確に示したうえで、本稿における分析対象が、話されたことばたる「談話」であること、分析過程においては、言語学における談話分析の手法を基本としながらも、社会学的観点を取り入れた会話分析の方法論も取り入れることを明らかにした。

第2章では、調査、分析の方法について述べた。具体的には、本稿の研究における主たる分析対象となる各言語21箇所の2者間談話の参加者が、性別、年代、親疎関係、年齢の上下差という発話者の属性や、対話者との関係により、統制がなされたものであることを示すとともに、音声資料の文字化方法、発話文認定の原則についても述べた。また、第8章で行なう、言語使用への意識の分析において用いる、質問紙調査の被験者情報についても述べた。

第3章では、日本語と朝鮮語の談話における品詞分類、用言の活用形、発話形式に関する理論的枠組みを構築した後、主要な先行研究において、中途終了発話文、発話機能がどのように論じられてきたかを概観し、それらに対する本稿の定義、下位分類を示した。また、それぞれの出現状況について、計量化したデータもともにみた。

本稿における中途終了発話文の定義は、形態・統語論、話者交替と音声、発話意図伝達という3つの観点を取り入れており、発話に関わるより広い要素を考慮した精密な同定を可能にするものである。データの分析では、中途終了発話文の談話全体における生起比率は、日本語でより高い数値をみせること、形態論的下位分類は、日本語においてより多くの類型が存在すること、結果としてその使用域は、日本語談話で相対的に広いことが確認された。また、発話機能については、8種の機能項目が確認され、日本語と朝鮮語の発話文が、相互作用において「情報の授受」に関わる発話機能を強く有していることも確認した。

第4章では、日本語と朝鮮語の談話における「形式」と「機能」の関係をみるために、特に中途終了発話文が「情報要求」という発話機能を持つ場合に焦点を当てて分析した。具体的な手順としては、まず、情報要求発話を3種の「談話機能」により分類したうえで、それらの談話における出現様相について、形式と機能という観点から、発話者の属性や、対話者との関係という要因ごとに分析を行なった。

分析の結果、談話における実現形態としての情報要求の中途終了発話文は、両言語の談話文脈の中で、それぞれ異なる発話効果を生み出す装置として機能しており、話者はそれらを相互作用の中でポライトネスやスピーチレベルを調整するためのストラテジーとして異なる場面で選択、使用していることが確認された。具体的には、それらの差異を形成する要因として深く関わっているのは、発話者の年代と親疎関係であり、そのあとに年齢の上下差が続き、発話者の性別による違いは小さいということが明らかになった。また、非中途終了発話文については、発話者の属性や、対話者との関係といった要因が、発話文の出現に与える影響は弱いということも確認された。

第5章では、質問（発話機能としては、情報要求）を表す中途終了発話文の出現について、周辺発話との関係という枠組みの中で分析を行なった。具体的な手順としては、任意の発話文が、質問文として機能することを可能にする要素を「質問表示」と称し、この質問表示が両言語の中途終了発話文にいかんに現れているかを談話文脈の中で分析することにより、文末に終止形語尾を持たない発話文や、そもそも明示的な質問要素を持たない発話文が、ターンを構成し、質問文として機能する要因を探った。

分析の結果、中途終了発話文という、文末に終止形式が現れない発話が質問文として機能することを可能にするのは、発話文表層における明示的な質問表示(3種)が現れる場合のみならず、非明示的な質問表示(9種)によるところも大きいことが明らかになった。なお、これらの質問表示要素の選択にあたっては、日本語では非明示的な質問表示を多用するのに対し、朝鮮語では明示的な質問表示を多用するという異なった傾向をみせており、日本語談話においては、特に非明示的な質問表示の中でも、一貫性を持つ中途終了発話文が多く現れることが確認された。

第6章では、質問を表す発話文の動的機能を解明するために、発話連鎖という概念を導入し、質問発話としての中途終了発話文、非中途終了発話文が、いかなる連鎖組織を生み出し、以降の談話展開に影響を与えているかを分析した。具体的な手順としては、第1部分としての「質問」発話に隣接する第2部分全体を「応答」発話とみなし、それを「情報提供」を表す発話、「情報提供以外」を表す発話に分類したうえで、そこにいかなる発話が現れ、相互作用を促進しているかを形式、機能という観点から分析した。

分析の結果、質問に続く応答発話の出現をみると、日本語でも朝鮮語でも、全体の半数以上は、「情報提供以外」を表す発話により現れることが確認された。

両言語の差異を形成する要因について分析すると、発話形式においては、第2部分が「情報提

供」を表す発話であるときに、発話機能においては、第2部分が「情報提供以外」を表す発話であるとき、その中でも、注目提供や、情報要求といった発話機能を持つ発話であるときに特徴的な差を示すことが確認された。なお、応答発話の発話形式、発話機能の選択にあたっては、ストラテジーとしての談話展開機能が関与していることも明らかになり、日本語では円滑な談話展開の志向、対話者への配慮、朝鮮語では談話展開へのより強い関与、先行発話内容への情報追加が選択されやすいという傾向をみせることも確認された。

第7章では、談話展開上のストラテジーとして用いられる「くり返し発話」の出現について分析した。具体的な手順としては、分析発話の形式と談話展開機能に注目し、日本語と朝鮮語の発話文生成と、談話展開に関するさらなる特徴の分析を行なった。

分析の結果、日本語談話では、朝鮮語談話に比べ、くり返し発話が多く出現することが明らかになった。また、発話形式についてみると、日本語談話では、完全なくり返し、または文／節・句レベルのくり返しが、朝鮮語談話では一部をやや変えたくり返し、または、語レベルのくり返しがより多く現れることが明らかになった。こうした特徴は、日本語話者が言語表現を対話者の発話に合わせた協調的な談話展開をより好むこと、日本語の発話文は、文末形式を構成する形態素の自由度が高いこと、朝鮮語談話では、そもそも語レベルで終わる中途終了発話文が現れやすいことなどに関係するものである。さらに、談話展開機能についてみると、日本語話者は共有型の、朝鮮語話者は要求型の談話展開を好むということも明らかになった。

第8章では、両言語の話者を対象に質問紙調査を実施し、発話文に対する意識と談話における使用様相についてさらなる分析を行なった。具体的な手順としては、日本語と朝鮮語を母語とする各言語 120 名ずつの被験者に実施した調査の結果をもとに質問表現に対する意識、発話文生成に対する意識について分析を行なった。

分析の結果、質問表現に対する意識については、非中途終了発話文は、日本語でも朝鮮語でも肯定的な印象を持たれる発話形式であるが、日本語においては否定的な印象もあるため、その談話における使用は、朝鮮語で相対的に多くなるということ、中途終了発話文は、日本語で肯定寄りの印象を持たれており、「気軽である」との評価が比較的高いこと、日本語では倒置や、疑問詞の現れない中途終了発話文が、より肯定的と捉えられていることなどが明らかになった。

また、発話文生成に対する意識については、先行発話の言い換え、先行発話のくり返しにより中途終了発話文への質問表示がされる場合は、実際の言語使用とほぼ類似した意識を持つということ、間投詞（フィラー）、接続詞、とりたて助詞により質問表示がされる場合は、朝鮮語話者においては、実際の言語使用と、意識の間に乖離が確認され、それは、疑似会話体に対する許容度の高さや、日本のアニメやドラマの翻訳による影響を受けている可能性があることなどが明らかになった。

第9章では、本稿における議論を総括するとともに、本稿の意義、課題について述べた。

一連の議論により、日本語と朝鮮語の発話文は、「発話形式」としては、類似した体系を持ちながらも、それが談話における出現するに際しては、形式、機能、発話連鎖（談話展開）、発話者の属性／対話者との関係といった諸レベルにおいて、異なる生成要因が作用しており、その結果、「質問」→「応答」という連鎖が出現する場合にも、異なる発話形式や、発話機能による発話の出現が認められる、ということが明らかになった。これらの分析から、談話における発話文は、もはや単一的な「形式」と「意味」によってのみ規定されるものではなく、言語が使用される場としての談話文脈という複雑な体系の中で存在しているということが確認された。

謝辞

本稿を執筆するにあたって、多くの方々にお世話になりました。大学院修士課程から博士課程まで、長きにわたり指導を賜りました東京学大学院教授の福井玲先生には、何よりも「論文を書く」ということの意味を教えてくださいました。先生は遅々として進まない私の執筆を辛抱強く待ってくださり、指導の過程で常に適切なコメントをくださいました。先生の「この現象をより広い枠組みの中で捉えると何が言えるのか」といったご指摘は、ともすれば、言語の表層的構造の分析に追われがちになる中で、「談話」と「文法」との有機的つながりについて、非常に多くのことを考える機会を与えてくださいました。

東京大学大学院教授の生越直樹先生には、修士課程在学時からご指導をいただき、分析資料の収集の仕方や、社会言語学、対照言語学の方法論といった、本論文の根幹に関わる部分について、多くのことをご教授いただきました。先生は、私がNHKラジオ講座で朝鮮語の学習を始めたときに講師を務められていた方でもあり、大学院で先生の教えを受けることができたことは、私にとって大変光栄なことでした。

東京大学大学院准教授の本田洋先生には、言語学的観点のみならず、社会学的観点、地域研究としての韓国・朝鮮学という観点からご指摘を多くいただきました。先生には、言語に対する記述を行なう際にも、より多角的な視点を持って臨むことが肝要であることを改めて、教えてくださいました。

その他にも、東京外国語大学准教授の趙義成先生、首都大学東京教授のダニエル・ロング先生、国立国語研究所客員教授の井上史雄先生、前東京外国語大学教授の富盛伸夫先生からも多くの教えをいただきました。先生方のご指導がなかったら、今日の私は存在していませんでした。心から感謝申し上げます。

同時期に大学院に在籍していた方の中では、辻野裕紀氏、新井保裕氏の存在を忘れることができません。お2人とは、公私を問わず、様々な議論を通じて、常により刺激を受けました。よき仲間、よきライバルとして、共に博士論文を書けたということも、モチベーションを維持するのに助けになりました。

また、韓国国際交流財団（Korea Foundation）からは、2010年から4年間にわたって、「韓国学専攻大学院生奨学金」の給付をいただきました。経済的な負担が大幅に軽減したことは、本研究の執筆を進めるうえでも大変役に立ちました。

さらに、お1人お1人の名前をあげることはできませんが、「談話分析」を行なうにあたって、

欠かすことのできないデータの採録や、質問紙調査に協力して下さった皆様にも心から感謝申し上げます。皆様の協力がなかったら、この研究を行なうことはできませんでした。

その他にも、東京大学人文社会系研究科 韓国朝鮮文化研究室でお世話になった先生方、同時期に在籍していた皆さん、非常勤講師として務めている早稲田大学の同僚の先生方、山下芸能事務所の皆様、蛸原硝氏、長山博之氏、이지혜氏、여상훈氏、이기철氏、이의중氏からも、調査、執筆の過程で、非常に多くの助けを得ました。心から感謝申し上げます。

思い返せば、私が、初めて「朝鮮語」という言語に接してから、20 年あまりの歳月が経とうとしています。覚えている限り、私のはっきりと「朝鮮語」という言語を意識したのは、小学校高学年で初めてソウルの街を訪れたとき、1993 年頃のことでした。彼の地に降り立ち、バスの車窓から目に飛び込む「雑踏」の中で飛び交っていたあの「言葉」を耳にしたとき、幼心にも「隣国にこんなにも違う言葉を話す人々が住んでいたのか」と衝撃を受けたことを覚えています。まさか、あの時の私は、将来、自分が朝鮮語学を専攻し、博士論文を書くなんて思っていなかったことでしょう。

そして、あれから、20 年あまりが過ぎ、様々な人々との出会いを通して、私は、韓国・朝鮮というフィールドについて多くのことを学ぶ機会を得ました。その 1 人 1 人との出会い、1 つ 1 つの出来事が私にとってはかけがえのない財産となっています。朝鮮語を通して出会ったすべての方々との出会いに感謝すると共に、今後は、この言語を学ぶ環境がさらに良くなるよう、社会的な役割も担っていきたいと考えています。

人の 100 倍努力しなければならない、まだまだ足りない部分の多い私ですが、なんとかここまでくることができました。今は、若干の達成感とともに、頭の中では、今後の研究に対する思いが駆け巡っています。この学位論文では、日本語と朝鮮語の談話における「形式」と「機能」の関係について分析してきましたが、日朝対照研究における談話分析は、まだまだ未開拓な部分が多く、これから解明すべき課題がまだまだ多く残されています。これまで私を支えて下さった多くの方々のご恩と期待に応えるためにも、博士學位論文提出後も、この研究をさらに発展させていかなければならないと今、決意を新たにしています。

最後に、誰よりもこの論文の完成を待ってくれた父、母にこの論文を捧げ、謝辞に代えさせていただきます。

2014 年 1 月 10 日

高木 丈也